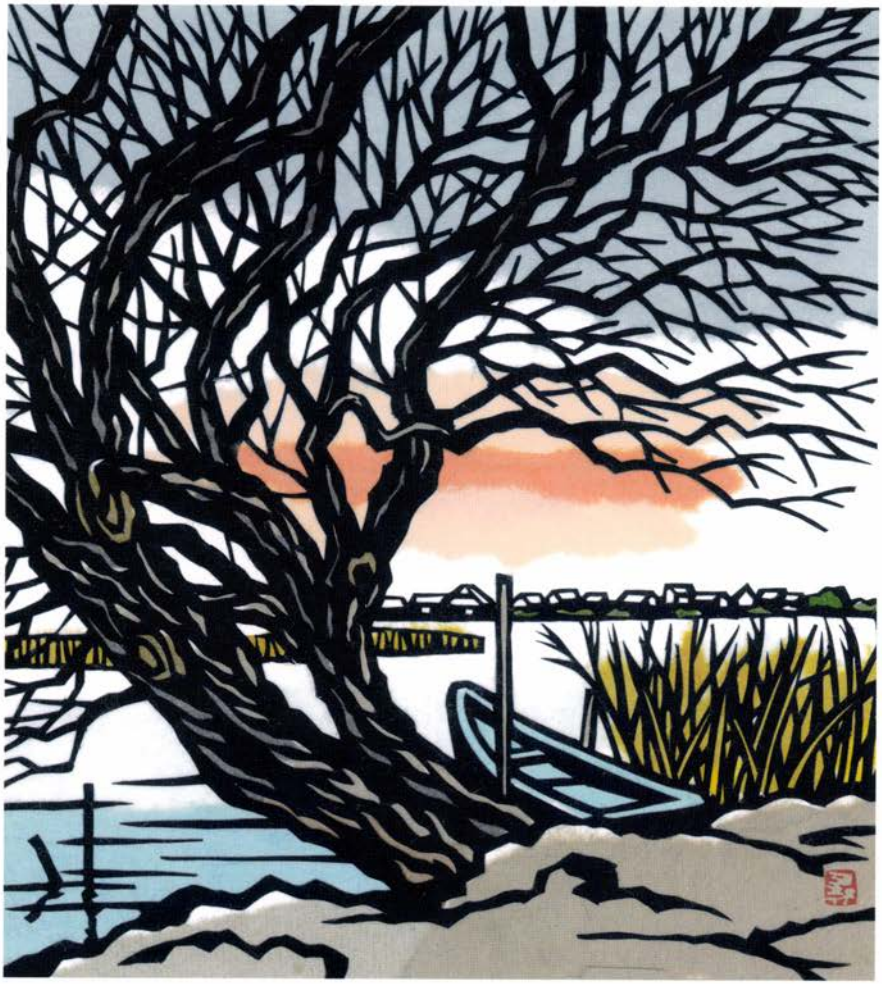
川柳塔

平成三十年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇九九号



日川協加盟

No.1099

十二月号

第七回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第六回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者（各題二句　共選）

課題吟　「鍵」　真島久美子（番傘川柳本社）　三宅保州（川柳塔社）

「顔」　岡崎守（札幌川柳社）　山本希久子（川柳塔社）

雑詠　赤松ますみ（川柳文学コロキュウム）　小島蘭幸（川柳塔社）

投句要領　規定の用紙（コピー可）または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料　一〇〇〇円（切手は不可）

投句締切　**平成三十一年二月二十日（水）消印有効**

送付先　〒543－0052
大阪市天王寺区大道一－一四－一七－二〇一
川柳塔社　誌上大会係　宛
TEL／FAX（〇六）六七七九－三四九〇

賞及び発表　各題特選に賞呈　発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

2019年 本社句会 開催日程表

会場：ホテルアウィーナ大阪

開催日	時間	会場	
1月7日(月)	13:00～17:00	金剛の間(東)	4F
2月7日(木)	13:00～17:00	金剛の間(東)	4F
3月7日(木)	13:00～17:00	金剛の間(東)	4F
4月8日(月)	13:00～17:00	金剛の間(東)	4F
5月7日(火)	13:00～17:00	金剛の間(東)	4F
6月7日(金)	13:00～17:00	金剛の間(東)	4F
7月5日(金)	13:00～17:00	金剛の間(東)	4F
8月9日(金)	13:00～17:00	金剛の間(東)	4F
9月6日(金)	13:00～17:00	金剛の間(東)	4F
9月28日(土) 第25回 川柳塔まつり 川柳塔95周年記念	同人総会	10:00～11:00 生駒	3F
	句会	11:00～17:00 金剛(東中西)	4F
	懇親宴	17:00～20:00 葛城(全)	3F
11月7日(木)	13:00～17:00	金剛の間(東)	4F
12月6日(金)	13:00～17:00	金剛の間(東)	4F

記念大会

小島蘭幸

新幹線で三原駅を出るとすぐ左手に、岸本水府先生の句碑が建立されている松寿寺が見えます。私は思わず「今日は番傘創立110年ですよ」と呟いていました。

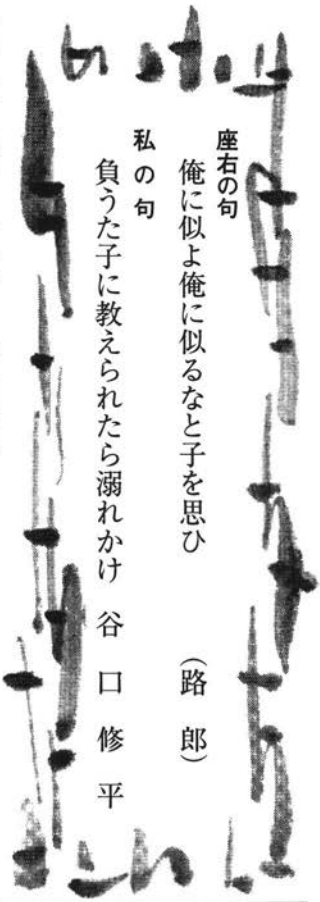
番傘川柳本社創立110年記念全国川柳大会は、10月28日、大阪市の太閤園で開催されました。素晴らしい会場と500名近い出席者に、「さすが番傘やなぁ」という声があちこちでしていました。

大会は、田中新一主幹の力強い開会のことばで始まり、木津川計先生と私が祝辞を述べさせて頂きました。感謝状・花束贈呈では、100歳のお祝、礒野いさむ名誉主幹と、句集『ポケットの水たまり』を発刊された森中惠美子先生の美しい笑顔がありました。

清興の落語は、露の吉次・露の団姫のお二人です。さすがプロ、掴み、話術共に見事でした。選者は6名、川柳塔社からは新家完司理事長が務めました。私は一番若い真島久美子さんに注目していましたが、選句、披講共に素晴らしかったです。懇親宴もさすが太閤園という料理が並び、鏡割りの清酒もアッという間に飲み干すほど好評でした。式典、句会、懇親宴とさすが番傘という思いを強くした一日でした。

川柳塔なら創立20周年記念川柳大会は、11月1日、ホテルリガーレ春日野で開催されました。安土理恵川柳塔なら会長の挨拶に続き、私は祝辞を述べさせて頂きました。清興はオカリナ演奏、選者は事前投句を含めて5名、私は生駒番傘川柳会の松本柾子氏と共選、「完成」の選者を務めました。懇親宴はとても楽しく、カラオケでは私も一曲唄うほどでした。

私は前日から出席して、同人の長谷川崇明氏に案内していただいて興福寺を参拝しました。落慶したばかりの中金堂はキラキラと輝いていました。夜はスタッフの皆様と豆腐会席を堪能しました。とても楽しい二日間でした。「記念大会にはなるべく出席するように」薫風先生のことばです。来年の9月28日、川柳雑誌・川柳塔創刊95周年記念　第25回川柳塔まつりを開催致します。



座右の句
俺に似よ俺に似るなと子を思ひ　（路郎）

私の句
負うた子に教えられたら溺れかけ　谷口修平

川柳塔　十二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「日南市飫肥」

■巻頭言　記念大会……小島蘭幸…(1)
霜ネタ日記2018……高瀬霜石…(2)
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…(4)
川柳塔の川柳讃歌 ⑯⑧……木津川計…(41)
自選集……(42)
句集の森……(45)
温故知新……(45)
水煙抄……西出楓楽選…(46)
橘高薫風句抄……(66)
英語 de Senryu ⑧④……吉村侑久代…(67)
誹風柳多留一二篇研究 66……(68)
愛染帖……新家完司選…(70)
檸檬抄「ジレンマ」……川端一歩・山岡冨美子共選…(74)
■追悼文（井蛙さん黄泉へ旅発つ）……福士慕情…(77)

霜ネタ日記2018

高瀬霜石

川柳を齧って、もう33年ほどたつ。その間、数々の失敗を繰り返してきたが――今思い出しても顔から火が出そうなくらいの――失敗談を綴ってみる。

落ち葉炊き　姉に食べたいものがある

焼き芋を楽しもうとしている、明るく健康的なお姉さんの姿が目に浮かび、入選とした。

ところがドッコイ。正しくは……

落ち葉炊き　姉に焼べたいものがある

なのであった。僕の読み間違いである。

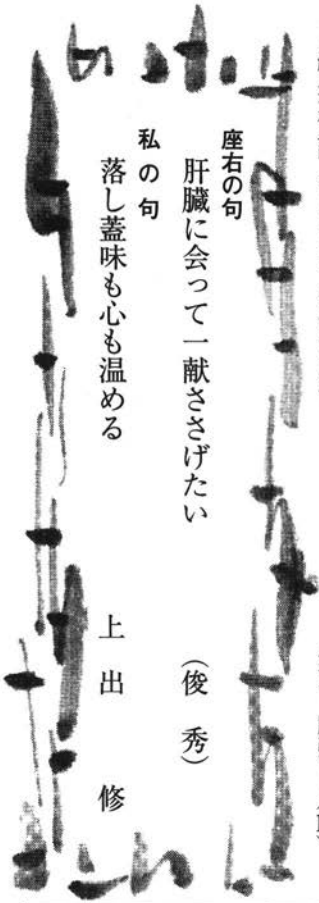
こうなると句の解釈は全く違ってくる。

前者は、食欲旺盛な――多分、ふっくらとした朗らかなお姉さん。

一方、後者は、やむなく恋文を焼べねばならぬ――見るからに切なそうな、多分、ほっそりとした清楚なお姉さん。

作者の岩淵黙人さんは、弘前川柳社の大先輩。世が世なら、切腹ものであった。

一路集（「迫る」……磯部義雄選……（78）
「内緒」……今井万紗子選……（79）
初歩教室「運ぶ」・「選ぶ」……居谷真理子……（80）
川柳塔鑑賞……山口光久……（82）
水煙抄鑑賞……菊地政勝……（84）
せんりゅう飛行船㊻……新家完司……（85）
『麻生路郎読本』余滴(49)……桒原道夫……（86）
インスピレーション・ナビ　印象吟……大西泰世……（88）
十一月本社句会……（90）
句会燦燦……弘津秋の子……（94）
各地柳壇（佳句地十選／岩佐ダン吉・西口いわゑ）……（95）
十二月各地句会案内……（108）
柳界展望……（110）
基金報告・御礼……（111）
高野山川柳塔碑合祀祭のご報告……（111）
川柳塔WEB句会「幸せ」……樋口由紀子・髙瀬霜石共選……（112）
第33回国民文化祭・おおいた結果発表……（113）
■編集後記（ひとこと／斎藤隆浩）……朱夏・勝弘……（114）



座右の句

肝臓に会って一献ささげたい　（俊秀）

私の句

落し蓋味も心も温める　上出修

僕の地元、弘前市に拠点を置くFMラジオ局に、「霜石のやじうま川柳」という番組を持たされて、もう18年になる。

月曜日から金曜日まで、午後3時から15分程度の番組。4800回を超えた。

コレ、週に2回スタジオに行き、1週間分を録音して流す。とてもじゃないが、毎日3時には行ってられないものさ。

青森市にあるFM局にも、たまに頼まれて出る。こっちは1時間の生放送だ。

放送中にも、バンバン投句がくる。

時は3月。こんな句が届いた。

ひな祭り　おびなとめびなアッアッアッ

これはいかにも卑猥と、ボツにしたが、一応、相方のアナウンサーに見せた。

彼女はニッコリ。「師匠。コレ、いいんじゃなーい」と、すぐに読んでしまったので――なにせ、前述したように、生放送ですからね――僕は、ガラにもなくアセった。

ひな祭り　おびなとめびなアッツアッ

と、明るく読む彼女の声にビックリ。卑猥なのは、僕の方であった。選には、その人の人格が現れるものである。

川柳塔

小島蘭幸選

土佐清水市　辻内次根

山里の鴉は人の声で鳴く
冷えたねと話す相手のなく寒い
年齢に差はない生きている焔
欲のあるうちは解けないかも知れぬ
一つ目で直さぬままに秋の暮れ
縮んでも昭和の骨とすぐ分かる

松江市　石橋芳山

背泳ぎのままで探している明日
満たされぬままに続いているメール
愛なんてこっぱずかしく騙し合い
ふくらはぎあたりで止まる達成感
いつだって愚かで馬鹿でいい男
俺の顔出るまでガチャガチャを回す

尼崎市　山田耕治

作業服ちゃんとしまってありました
遠くから目礼したが始めなり
雨降っているのに虫が鳴いている
一人鍋おもてで猫の声がする
ちぎれ雲里から秋の荷が届く
竹の割箸もったいないと思う

橿原市　居谷真理子

月光が遊ぶ小さなすべり台
明け方にいつも悲しい夢を見る
心って指の先にもあるんだね
人の世に流れて海へたどり着く
だんまりも涙も供養通夜の酒
仏たちが咲けと言うたか曼珠沙華

鳥取県　斉尾くにこ

まず休もう時のたるみのゆりかごで
一日の速さが違うひとつ家
おつかれとムーミンママのティーポット
夕焼けよ　苦しいときに笑えない
青のときと出会うBSシネマ館
エンディングノート天使になると書く

倉吉市　牧野芳光

泣けるまで泣けば阿呆になってくる
古里をふるさとにする赤とんぼ
トゲトゲの中で密かに熟れていく
頑張った人が白旗持たされる
金木犀咲いてきたから秋にする
引き出しに甘酸っぱさを入れてある

岡山市　永見心咲

献体を決めたと明日は子にも言う
風になる覚悟は未だできません
覚悟などする術もなく喪が明ける
なんてことないさと嗤う立葵
メーテルと向かう銀河へ満月へ
自省する魁夷の森の白むまで

米子市　吉田陽子

安定感ラフランスにも負けてなし
ウォーキングシューズで秋へ再起動
ぽっくり死願い下げする秋の天
無くせないものに心の健康美
見いつけた衰えません妻の勘
完璧な最後師からのいとまごい

札幌市　三浦強一

明け方の地震に叩き起こされる
地震停電突然に来た非日常
防災リュックあれがないこれ不足
水とガスあり生きる知恵甦る
ケータイの子らの安否へありがとう
ローソクの明かりに空襲の悪夢

桜井市　安土理恵

会うだけよただ会うだけよ日除け傘
納得をしたのにくすぶるものがまだ
生きていけないこんな程度で泣いてたら
さすがさすが殺し文句もいぶし銀
おじいさんに艶あるうたを所望され
字足らずの恋をかさねて秋になり

大阪市　栃尾奏子

雪うさぎ待ってた人に会えたかい
友達がいない真面目な唐辛子
抱き合った空オリオンが美しい
落としぶた私にもある隠しごと
喜びも涙も全部愛でした
寄り添ったかたちで溶ける雪の華

西予市　西田美恵子

淋しくてならないのです仏様
酸っぱくて甘くて苦々しいあなた
あきらめる事にも慣れた手を洗う
一足す一が二にしかならぬ人で好き
退屈を楽しむ今日は何も無い
スクワットあともう少し生きようか

医師の腕信じて祈る子の手術
兄弟みな後期高齢仲間入り
百歳の好きな食べ物肉らしい
燻されてみんな大人になっていく
ジェット風船誰も着地を見ていない
軍艦と何が違うか自衛艦

鳥取市　岸本宏章

水呑んで生き返る花みていたり
痛いのに大丈夫だと医者が言う
足悪くあの世への途　歩けない
車椅子貸そかと閻魔うす笑い
オール電化鼻を折ったのは停電
やんちゃでもなれる大統領ぐらいなら

八尾市　内海幸生

キャベツザクザク自衛権など考える
正面に坐られNOが言えません
ひまわりを演じ続けた肩の凝り
花束のなかで育っている命
もう母はいない素麺のびている
脱け殻の蝉は昔を語らない

岡山市　工藤千代子

君の声抱きしめている秋の耳朶
白い歯を見せて完璧なる拒絶
約束を手繰れば痛み出す小指

大阪市　平井美智子

皺くちゃになって気楽な紙袋
夢は夢　お好み焼きを裏返す
ゆっくりと秋の形になってゆく

香芝市　大内朝子

傘寿機に新たな夢を追うてみる
大鍋の頃懐かしいひとり鍋
蜜月の思い出を追う　うふふふふ
ほろ酔いの脳はぽっぽと花畑
妹の仕草へ亡母が生きている
歯を二本抜かれ命が縮かんだ

鳥取市　福西茶子

銀行は二ヶ月前に引揚げた
学校は三キロ先でバスも無い
スーパーはマイカーでしか行かれない
残り火はまだある空気送らねば
抗ってみてもアナタに勝てません
蟹　空気　水が旨くて医者が居ぬ

西宮市　亀岡哲子

頑張ったらキビシイ顔になっていた
守備範囲　狭めてゆっくりと生きる
なんでかしらがたんとあるから生きられる
緊急時通話不可能長電話
名句一つポカリ湯舟に浮いたまま
手すき和紙の秋の気配の文ほろり

大阪市　津村志華子

太陽を九十二周した命
二章へと続く天寿の私小説
助っ人は唯一君だよ押し車
公園の鳩とは古い顔なじみ
後退は決してしないカタツムリ
霊園の斜め向いに住んでいる

松江市　松本文子

上げ膳据え膳有りがたいけど夜が明けぬ
身の縮む思い敬老長寿欄
私の運決めたのはあの電話
名刺の重さ凄い人生だったのだ
ふるさとの訛背負った影法師
里山は昔むかしを守り抜く

堺市　内藤憲彦

母さんもさすが値ぎれぬ高島屋
避難指示預金通帳抱いて寝る
踊らにぁそんそん人生一度きり
デパ地下の試食コーナー巡る秋
転ばぬようすればするほどよく転ぶ
七色の失敗重ね味になる

西予市　黒田茂代

木漏れ日のゆらぎ詩人になっている
ヘルスメーターに夏痩せ叱られる
熱中症も夏風邪もなし夏を越す
地震水害日本呪われてるみたい
ドローンになって百名山巡る
そろそろ秋空蝉の眼が寒い

松山市　宮尾みのり

育て甲斐ある少年は成長期
定位置にあるリモコンが目に入らず
不平言う老いをぜいたくだと思う
お招きに乗って場違いだと気付き
アイドルになった隣の孫娘
ポリシーは玉虫色と決めている

藤井寺市　太田扶美代

贅沢な街　師がいる子が居る友もいる
ヤキモチは堂々と妬く悪しからず
一言を悔いて雨が止みそうにない
悲しみには濃淡がある通夜の席
想い出を整理するのはいつも秋
しっかりと夢につないであるロープ

箕面市　広島巴子

野仏に会いたくぶらりウォーキング
もくせいのアロマセラピー散歩道
何よりの起爆剤です子の電話
災害に耐えた果実をかみしめる
酒蔵を巡り御機嫌旅仲間
朝ドラが替わり頭も切り替える

広島市　岸本　清

川柳塔心に響く句が数多
そうめんに里の梅ぼし昼の膳
手術後はクシャミするのも気が抜けず
小器用にスマホ操るもみじの手
犬の糞歩きスマホを懲らしめる

竹原市　石原淑子

新天皇の御即位十連休
むすんでひらいて強くなれる絆
鼻少し膨らむ孫のいいしらせ
青い鳥二羽倖せを撒き散らす
弱者いじめか医学部入試不正

竹原市　岩本笑子

一年が早い病院行く日だが
雨女ですの妻から知らされる
秋の虫まだまだ生きろと鳴いている
やがて一人に白い雲を追う
古稀なのよたとえ台風来たとても

三原市　鴨田昭紀

貧しさも豊かさも知る深いシワ
水玉が飛んで若さがはち切れる
アポなしに貧乏神が来て座る
取り出せぬ記憶に付箋つけておく
削っても削っても角が取れない

岩国市　上村夢香

遠出する日写真の母にごあいさつ
いつまでも見守る人がいてくれる
朝四時のオリオン星座ただ見惚れ
女子会は二つ返事で選ぶ服
栗拾い小粒はそっとウリボウに

宇部市　平田実男

近頃の子にお袋の味がない
娘と交わすメールで今日が廻り出す
仕合せはまだ七人の敵がいる
復旧の邪魔をしている視察団
引き際の美学を知らぬ副総理

下松市　有海静枝

虚構ではハッピーエンドだけ観たい
紗をかけて自分を甘くする鏡
礫の形で風がさらう過去
病窓の小鳥の軌道じっと追う
窓越しの点滴越しの青い空

防府市　坂本加代

邪魔しない猫の睡眠奥座敷
飼い猫も戻って来ない認知症
はがきの字何度でも読むあたたかい
別荘という名を付けた古屋敷
ひ孫まで集めた母の大往生

鳥取県　石谷美恵子

どの指が欠けても困る蝶結び
医者の次の良薬は妻だろう
胃袋の乱を医者から見せられる
謝った方が器量をあげている
老母からの荷物とわかる結びかた

鳥取県　竹信照彦

ヤッターと遠い沖縄選祝う
知事選勝利へわが心を送る
真ん中を基地にされ耐えた同胞よ
坊ちゃん政治家右肩ばかり上げ
知らぬ間に自衛艦旗に旭日旗

鳥取県　細田裕花

ランチには笑顔とニュース持ち寄って
ぼやく程なぜかビールが喉すべる
突っ張っています私の血は元気
減反の決断をして酒に酔う
繰り返す愚痴が心のシミになる

鳥取県　松川行男

栗送る秋も終るか風に乗る
おみやげににごり酒買い眺めてる
バスの窓稲穂が垂れる早よ帰れ
兄の名も戒名無くて里帰る
秋ですね戒名いらぬ金魚逝く

鳥取県　山下節子

食養生僕の主治医は妻である
過疎に住み医者のかわりに置き薬
両成敗喧嘩の後のわだかまり
お互いに喧嘩なんかは出来ぬ過疎
台風の度に地図帳出してみる

鳥取市　池澤大鯰

盛り塩と和風料理と酒の味
山の気を受けて船出を思いたち
ネジ山が磨れて丸くなってきた
泥船に乗せられ狸演じてる
一パック肴にゃ少し物足りぬ

鳥取市　奥田由美

少子化で統廃合の我が母校
加齢かな一味辛子が甘くなる
無料だと効きめが弱い美顔液
ついた杖を置き去りにした墓参り
イノシシも庭先に来る村に居る

鳥取市　加藤茶人

一服の紫煙によぎる走馬灯
手始めに　うんこドリルで字を覚え
夏バテに追い討ち掛ける電気代
CMのように隣の芝青い
地位名誉浮き名も棺の中に入れ

鳥取市　岸本孝子

器量よしいずれ劣らぬ姉妹
備蓄米いずれ家畜の餌になる
米櫃を気にかけていたのは昭和
燻されて鰹が長い旅に出る
侘さびの茶室持つのが夢だった

鳥取市　倉益一瑤

友病んで背筋スースーしてならぬ
ご存知ありませんか私の着地点
ちぐはぐな会話通じる夕暮れよ
欲望のコップに水はあふれない
ボタン一つ外し少年背伸びする

鳥取市　田中天翔

かかりつけ医そろそろ持っていたい喜寿
診断書なしでは灰になれません
病は気から心のケアが良く届く
退院の朝の主治医に後光差す
想い出の箱を覗いてみる　ひとり

鳥取市　棚田大

でこぼこ道歩んだ時代なつかしや
パワハラを愛のムチだと言っている
もの忘れだけは負けずに生きている
宿題を済ませた子等の顔がいい
心にもでこぼこ起こりくらくらだ

鳥取市　谷口回春子

親心やっと気づいた梨一つ
デコボコの夫の愛に秋の風
可愛さを抱いて孫午睡
拘泥を食べ百歳生きる頑固爺
コウノトリやっと舞い降り春が来た

鳥取市　永原昌鼓

大災害人の弱さを見せつける
幸運を掴んだ夢はすぐ覚める
あの痛み忘れて母の顔になり
戻せるか核が汚した故郷の海
一日に何度笑うか老い独り

鳥取市　中村金祥

泣くもんか元気じるしの旗を振り
苦しいと蛙みたいに跳ねてみる
猛の字を今年の漢字したい夏
月下美人の匂いに酔ったお月様
整った話に挿む土びん口

鳥取市　夏目一粋

二つ捨て一つ拾って来る齢
人間を辞めたい話風とする
怖い人うちには居ないみな笑顔
人の部品があちこちに落ちている
昼淋し夜も寂しくなる老後

鳥取市　平尾菜美

私まだ夢とうねりに揉まれてる
夢未来先頭きって突っ走り
立ち止まる夢の背な押す虹を見る
少年よ夢語ろうよスマホ置き
幾山河紡いだ夢はへこたれぬ

鳥取市　前田楓花

不潔でも不思議と旨いラーメン屋
食べ頃を待っている間に柿落下
貴婦人がギャハハと笑う汽車の旅
同期会四方山話して涙
樹木希林灰汁を旨みに変えて完

鳥取市　山下凱柳

舌の根も乾かぬうちにまた舌禍
ノーベル賞が長寿社会を推し進め
相続で揉めぬようにと親心
報奨金付けて少子化食い止める
災害多発地球の危機を予感させ

鳥取市　吉田弘子

思い出の旅遠景にする月日
一つずつ難問解けてゆく月日
これで良し明日の着替えを枕元
体内時計深夜のトイレまで確か
習さんの含み笑いは謎めいて

倉吉市　猪川由美子

余命用の電池だんだん減ってくる
総理所信白々しくて聞き耐えぬ
便利さに慣れて被災時慌て出す
トランプ氏世界騒がす達人だ
断捨離でシンプル暮らしラクですよ

倉吉市　山中康子

お金では解決できぬ親子の情
涼風へ猛暑忘れて浮かれてる
産道の痛み歯を食いしばる孫
少子化を防ぐ国会案急げ
荒波に負けずふんばる共稼ぎ

米子市　後藤宏之

おやすみなさい仏さんの手の平
添加物気にしていたら生きられぬ
飼うつもり飼いならされて今となる
原風景神社と小川せまい路地
鈴の音が何の合図か謎のまま

米子市　後藤美恵子

災害に耐えた稲穂は威張らない
気遣いの薄味箸が進まない
老いの意地張れる限度を模索する
とんぼに乗る夫と墓参の白昼夢
座布団が不要世代の足長い

米子市　竹村紀の治

卵割る音も命をつなぐ音
ソプラノもバリトンもある猫の恋
背伸びして幸せの振りしています
いい顔で唄う合唱コンクール
握る手がこれが最後と同期会

米子市　中原章子

適量のビール元気に夏を越す
敬老の身だがたやすく老いはせぬ
爪先立ち習慣にして背を伸ばす
神様よりあなた信じて吉となる
明るい子きっと明るい親が居る

米子市　成田雨奇

世の中が暗いと人はよく笑う
水分を飛ばせばミイラ作れます
居酒屋に灯りがあってひと安心
天賞は晩酌少し多いめに
叔母一人来るために組む盆提灯

島根県　伊藤寿美

雲の峰無口な父のバックボーン
「大地の子」養父に恩は返せたか
沈んだままのヤマトムサシは兵の墓
平成は耐えた昭和を知るや否
地震禍の鳥居に残る先祖の名

松江市　藤井寿代

ハチマキを結び直して終章へ
人生のいろいろ詰めているカルテ
輪郭のボケた男と暮らしてる
怪獣がムクムク湧いて25時
お返しは貴方の笑顔だけで良い

松江市　松本知恵子

木犀が香るいろいろあったけど
片足をはずし気楽に生きようか
イベントの怪獣握手してくれる
この先のプランぼやけ気味で良し
暴風が帰りおもちゃの忘れ物

出雲市　伊藤玲峰

神在の水に育って佳い娘孫
呆けたかないやトボケてるピエロなり
転勤された札幌震度7続く
電気と水に外方向かれて命がけ
出雲駅伝風は残るが晴れわたる

雲南市　菅田かつ子

受け皿になっております老母なれば
買わされて夫へ小さな嘘をつき
わかる日もあるさと老いのアドバイス
八十になってもタイプの好き嫌い
立話抱いたペットの大欠伸

雲南市　松本　昌

意味不明嫁は悲しき他人なり
リハビリに男の涙光ってる
八十路来て免許返納考えよう
木洩れ日の中に幸せ見つけよう
あなたにか頼まぬ事を二三人

岡山県　髙岡茂子

台風の進路ばかり見るテレビ
「へこたれない」友情が貸す本を読む
鏡にはシワの写らぬ距離をとる
線香一本の夫の誕生日
顔を見て散歩のコースきめるポチ

岡山県　田中　恵

無意識に祈る月にも朝日にも
山越えてのんのんさまに逢いに行く
仏像が平常心を植え付ける
コンコンと影絵のキツネ星月夜
御破算にねがいましてはよく眠る

岡山県　山縣のぶ子

掛時計五分進んだままに生き
さみしいがやっぱり自由を謳歌する
たよりなく見えてばあちゃんよく光る
君は僕のバロメーターとおだてられ
つまずいた脛と見上げるいわし雲

岡山市　丹下凱夫

記念樹のサクラだけには話している
夕焼けの向こうにあった立ち話
転んでは起き上がるたび天高し
楽しんで暮そう余生なんだから
月影の道はまっ直ぐ伸びている

岡山市　前田恵美子

ポイントカードせこせこ集め生きている
夕日には帰宅急がす色がある
父母に書く手紙はそっと胸の中
安心は石橋叩く人が好き
安心か便利を取るか問う免許

笠岡市　藤井智史

世の中の負負負負負負負句を作る
失恋の夜もカツ丼食うている
返信の来ない失恋月曜日
焼きもちを焼かれるくらい恋したい
夫婦とはおもろうないとあきまへん

東かがわ市　川﨑ひかり

お宝は未だ補聴器の要らぬ耳
美辞麗句ダンボの耳になっていく
独り居に何処から入る隙間風
泣き虫で小ちゃい方がお兄ちゃん
また来るネ夕陽の中へ消える孫

松山市　栗田忠士

いさかいも傘寿を生きる潤滑油
話せば分かると気楽に踏んでいた誤算
風情あるススキに貰う花粉症
引き算をする気なくても減る余命
神様が配り忘れた余命表

松山市　古手川光

安心して病気も出来ん老い一人
被災地産のみかんを今日も食べている
秋の七草心の灰汁を取ってくれ
おしゃべりなスズメに今朝も起こされる
真っ赤な夕陽のように人生終りたい

松山市　柳田かおる

遠回りして秋明菊に会いに行く
あなたからもらった丸が宝物
じゃが芋のような温和な夫でした
追っかけてほしくて逃げているのです
茶柱が立った行こうかやめようか

大洲市　中居善信

内緒内緒男は疵を持ち歩く
刀折れ矢は尽き果ててまだ生きる
平均寿命確かに重い区切りだな
身辺整理整理できないものばかり
寂しいと言えば泣くなと衒くる

北九州市　小松紀子

卒母しましたこれからゆったり生きていく
頑張りスギずへコタレズ生きている
自分で歩けて食べられ心満つ
無限ではない足腰にまず感謝
昨日よりちょっと良い日であれば吉

唐津市　坂本蜂朗

忘れてるのに揺り起す妻がいる
補聴器を外して妻の小言聞く
広辞苑だんだん重くなってくる
姿見の前で若さの稽古する
友と酌む酒が明日の灯を点す

唐津市　山口高明

奉納米つんだ社殿で鬼が舞う
君知るや薫風主幹の隠し芸
曳山の魅力忘れぬ子の帰省
受話器の声に別れを予感する
下戸どのはバンド弛めて酒の席

熊本市　杉野羅天

台風の直撃恐れ生きる夏
秋薔薇へまた一年が経ちました
停電で人力だけが頼りとは
あっさりと終った老いの夕御飯
涙雨故人を偲ぶことしきり

沖縄県　森山文切

しわくちゃの句箋アイロンでもダメか
北側のルートで姫の寝室へ
恋をしているのか信号が見えぬ
崩れ落ちそうなところにある誇り
じいさんの写真が数枚しかない

札幌市　小沢淳

天と地の異常に人の泣き笑い
サイクリングで日本盗遊とは呆れ
ピーマンに笑われますよ軽い脳
失敗をユーモアとする身のこなし
ハガキでの寄せ書き嬉し震度7

塩竈市　木田比呂朗

計画の実効みえぬ十二月
断捨離も中途半端で年を越す
ガラケーは誤字も素直にすぐ送り
休肝日チェックしている冷蔵庫
だとしても上から目線消費税

男鹿市　伊藤のぶよし

仮の世のはずでも出会う崖っぷち
ドッコイショ万能だったのは昔
元気の素は医者のハシゴと好奇心
大丈夫まだまだ吹けるラッパなら
憂さ晴らし仕置きシリーズ今日も見る

青森県(故)　松山芳生

寝た子をおこすギザギザの音符
にょきにょきとコンビニ新しい風だ
だらだら坂夕陽がくどい影になる
合掌する白足袋も老いました
平成のその先鈍痛が走る

弘前市　浅田隆樹

陽が昇る余生と言うのやめました
でこぼこのイモに苦労の味がある
十月の佳き日に寝込む不摂生
同期会地酒持ち寄り先ず近況
陰干しの喪服に合わすダイエット

弘前市　稲見則彦

秋刀魚焼け新米炊けてあぁ日本
一杯は虫の居所探るため
みんなセピア色の過去との遭遇
豪雪と酷暑でできた家に棲む
ライバルは碁盤の上の事でした

弘前市　今愁女

りんご農家台風予報に目が刺さる
わたしはどうするだろう震度7
四十度耐えたヒト科のしたたかさ
笑顔で握手ばかりのテレビ首脳級
北のドンと渡り合いぬか総理殿

もう少し女でいたい桜貝
八十路なり心の箍も締め直す
カレンダーめくれば医者のメモばかり
喋りすぎ話し足らずも居て女子会
リハビリの一歩にかける旅の夢

弘前市　高橋洋子

内閣の全員野球無理がある
新元号機に国歌論が再燃
今となりゃもう入れない母の傘
大切な人大事にされた記憶
井戸端で白黒つけて嫌われる

さいたま市　星野育子

アメジストだと思ってた義母の石
父と話した記憶がなくて亡父を恋う
遺伝子は不思議爪まで相似形
問われても言えぬ痛さの数値など
魔女になるそう決めたのは星月夜

上尾市　中村伸子

暑い暑い寒い暑いの秋になる
彼岸花とっても熱いメッセージ
豊漁の秋刀魚をちょくちょく買ってくる
仏様も月見団子をめし上がる
アムラーでないが引退惜しかった

朝霞市　前田洋子

口数の少ない友の愚痴を聞く
夜になるとやりたいことを思いつく
古本にあったレシートそのままに
孤独が二つつながる犬の散歩道
犬と歩く今日のふたりは哲学者

東京都　川本真理子

ひび割れた対の湯呑みにある平和
雲間から賑やかだった頃の声
平熱になった地球にほっとする
ひっそりと涙私の泣き黒子
どきどきでテストを受ける認知症

八王子市　川名洋子

失敗を記念日にして泣き笑い
うそ泣きという奥の手に気を許す
義理と見栄ぎゅっと詰まったのし袋
ばあちゃんが重宝される知恵袋
振袖を披露しながら舞う蝶蝶

横浜市　菊地政勝

坂を下りるとふる里は紅葉だ
歳月は切符もなしに過ぎてゆく
歩いてきた線が悲しく泣いている
雑踏の中で拾った孤独なり
森の神いなくて木々は枯れてゆく

鈴鹿市　小河柳女

富山市　島　ひかる

鬱と躁の激しい人に馴らされる
弥次さんと喜多さんが居る一つ屋根
子供等が来ると親爺の顔になり
老人と思っていない子供達
何のかの言って今年も十二月

可児市　板山　まみ子

忙しい時に体調すぐれない
恒例で年に一度の栗おこわ
手間暇をかけてもうまい旬の栗
コスモスを百恵と歌うユーチューブ
幸福度半分ぐらい満たされる

愛知県　早川　遡行

人嫌いだから人にも嫌われる
生き延びたアユを梁場で待ち構え
百均へまず買う前に行って見る
一票になるとは限らない握手
高山へ来ては日本語が通じない

犬山市　金子　美千代

電子辞書忘れず入れる旅カバン
忘れてはいやとツンツン彼岸花
負の遺産子孫へまわす近視眼
群れてると安心なのね鰯雲
知らぬ間に健康オタクやっている

犬山市　関本　かつ子

ダイヤ婚まで十年が難しい
ばあちゃんち孫の逃げ場所開けてあり
集中をしてると隙が見えて来る
有難くサンマ安くて肥ってる
赤字など平気な顔が揃い踏み

奈良県　安福　和夫

古希なんてまだ青二才百寿の世
ガン免疫薬長寿年齢また延びる
庶民には高嶺の花のオプジーボ
亡き親友呼び戻したい長寿国
百歳時代平穏な日日あればこそ

奈良県　谷川　憲

広告の見出しに負けている社説
モノづくり偽装までして地に落とす
ロボットに自慢のキャリア歯が立たず
詫び寂びの宇宙とりこむ四畳半
大相撲若貴ブーム遠く去り

奈良県　中原　比呂志

柳友の支援感謝の二十周年
闇照らす篝火これからも試練
二十五センチどれだけ地球踏んだやら
平成史綴ればほつれ糸ばかり
忘れぼくなって一年をまた跨ぐ

奈良県　長谷川　崇明

頭数揃えば決まる民主主義
手を挙げただけの議員が胸を張り
睡蓮が揺れて分かった鯉二匹
夫婦です打てば響いた時もある
わが余生煮詰め煮詰めて五七五

奈良県　渡辺富子

赤い靴胸にはずみがついてくる
母恋えば胸にほのかにつく灯り
言の葉に乗せると涙溢れ出す
主義主張貫く男よろけ出す
子に還りほほえみ配る母となる

奈良市　阿部紀子

コスモスが競い咲いてる富雄川
何故ならば労られてる歳なのね
天を取りびっくりしたと皆が言い
父が母に好きなようにと建てた墓
明日香村棚田一面曼珠沙華

奈良市　宇賀史郎

台風に酔い止めを高層の揺れ
潮時を逃がして次を待つ無聊
初代の志時代に勝てずIT化
チャルメラは遠くラーメン世界食
子が巣立ちじゃれ合っている痴話喧嘩

奈良市　大久保眞澄

横に座ると席を立つ若い人
顔見知りの老犬腰が悪そうだ
隅っこで見つけてもらいたがってる
欲張ると逃げるお金もしあわせも
延命拒否言い切る自信ありません

奈良市　髙橋敬子

ふんわりと本音包んで返される
口さがない女の本音寒くなる
新米も暑さに強い種にかわる
運転免許まずは夜の部返納に
炎暑からぬけ出て秋にハグしてる

奈良市　辻内げんえい

安心は寄り添う人がいるわが家
異常気象終の棲家を見直さす
デパートで見て通販で買ってます
ブレークのなおみ可愛い俄かファン
二十年後の孫になおみをダブらせる

奈良市　山本昌代

ホッとして電車に揺れている疲れ
ウフフフフ好かれていますこの私
頑張ろうこの世まだ未だ面白い
笑ったら元気になってくる手足
お小遣くれるばあばがいる強気

奈良市　米田恭昌

今朝もまた暗いニュースがトップ記事
満ち足りて被災の人のこと思う
お隣の茶碗割る音とび火する
父さんのペコペコ姿見たくない
平成の挽歌 虎の遠吠え谺する

生駒市　飛永ふりこ

プライドをさらり脱げるは肝っ玉
秋日和自分自身にはっけよい
おにぎりを頬張る皆が童の笑み
秋の天小さな福を手に受ける
大丈夫をくり返しては百度石

香芝市　山下純子

朝一番手帳に予定聞いてみる
新メニューより定番がいい夫
持ち主のわからぬ傘をちょっと借り
軽口をたたいて本音カバーする
耐震で木造母校消えてゆく

和歌山市　磯部義雄

鉛筆を舐め指を折り五七五
災害の時は神様自衛隊
秋の木に蝉の抜け殻しがみつく
多読する柳誌が僕の愛読書
何かあるな娘が酒をプレゼント

和歌山市　上田紀子

好きな色重ね塗りして秋深し
素で生きる纏いつくもの皆捨てて
月遥か約束の日はもう近い
ロボットのひとつ覚えを叱れない
失った宝夕陽と追いかける

和歌山市　喜田准一

不自由な避難いつまで続くやら
土砂現場淋しくたむけられた花
改革と呼んで教師の負担増え
ズタズタに傷つき悩み今が有る
人の好い男が嵌まる落し穴

和歌山市　坂部紀久子

快眠快便それだけで良い老いの坂
知らぬ間に頭数にと入れられて
バーベキュー友の会話も焼きながら
見抜かれた心凍結したまんま
針千本飲んでも吐かねばならぬ嘘

和歌山市　武本碧

月満ちて女系に玉の男の子
ほめ言葉何と効き目のある魔法
風と組み流れにまかせ生きている
内緒話内緒で終る筈がない
夢少し下さい限りある命

和歌山市　土屋起世子

見えぬもの見えて来ました八十路坂
幸せな暮しゴミの日ごみを出す
まだ欠けていません縁の下の石
半額に駆け出す力まだあった
孫の手に従い操っているスマホ

和歌山市　福井菜摘

飾りものひとつはずして輪にとける
自分史の片隅飾るボランティア
フィナーレは嬉し涙で飾りたい
生一本身上にして無位無冠
傘みんな干して明日を疑わず

和歌山市　古久保和子

ペンを持つ力あるなら立ち上がれ
強くなれ私の中の鬼たちよ
診察券命の保証してくれず
こんな時にも一句が浮かぶ悲しさよ
公園の鉄棒パパたちに人気

和歌山市　堀冨美子

探しものする日が増えて時間ロス
お彼岸は私の彩でおもてなし
自然にはお手上げ人間の脆さ
チャンネルのグルメは域を越えている
一覚え二つ忘れの日を歩く

和歌山市　松原寿子

人生のクロスワードに闇がある
満月へいだいた夢を許されよ
充電の旅揺れ動く夢を秘め
記憶の糸探れば石見浜田です
人生のゴール残高頼りない

岩出市　藤原ほのか

カラフルな生き様だったほめている
カラフルな日傘で気持ち持ち上げる
不思議だなこの世に産れ歩いてる
荷を降ろし遥か旅路を締め括る
道端に咲いてる花にも芯がある

海南市　小谷小雪

夏仕舞い灯油の値段気にかかる
お待たせと青いみかんの揃い踏み
噛みしめて腸を鍛える青野菜
野火走るよくよく見ると彼岸花
立ち止まることを教える季節風

海南市　堂上泰女

栗御飯ノスタルジアに浸りつつ
ニューモード買えと囁く秋の風
世の流れ人の流れも速くなる
一徹なＤＮＡは祖母譲り
サンセット孫は天使になっている

紀の川市　宇野幹子

靴音の響き我が子を信じよう
笑い皺私の塔を積みあげる
身の丈に生きてきれいな花咲かす
秋はもう他人あっさり恋終わる
沈黙を破り石榴の実が爆ぜる

紀の川市　楠原富香

人生の旅の余韻をもう少し
不揃いの楽器が醸すハーモニー
失敗も笑い話になる明日
顔色を読んで夫婦の歩が揃う
復興の答え出る日が判らない

紀の川市　山東日出男

人が住む遥か以前に在る大地
僕の町にも活断層が走る
居眠りの頭左右にうまく揺れ
教室で吹いてはならぬホイッスル
訳ありの訳は聞かない方が良い

京都市　清水英旺

台風一過悲喜こもごもの置土産
ご勝手にどうぞ長者の月旅行
置いてけ堀情報社会の隅っこに
秋天よ思いの丈を聞いてくれ
忘れてた大笑いする落語会

京都市　藤井文代

母と妻脱皮し好きな色を着る
日本の文化を着せたおもてなし
歯に衣を時々着せて自己防御
損得でチェック世間狭くする
情報も巧みにチェック地獄耳

京都市　三宅満子

今すこしこの世にいたいよろしくね
台風にめげず可憐に桜咲く
病名を医者もネットで探してる
詳しくはホームページと素っ気なく
藤袴ゆかしい香り蝶も嗅ぐ

長岡京市　山田葉子

昔話じっくり読むとおそろしい
肩入れをし過ぎ伸びる芽つんでいる
大舞台で普段の力出す度胸
身体の芯ぶれないようにただ歩く
ウォーキング真面目すぎたら辛そうだ

八幡市　今井万紗子

私の名父の最初のおくりもの
エンピツを舐めてアイウエやっと書け
着メロが響く亡母さんいないのに
だんだんと歩幅が狭くよく転ぶ
ぽつぽつと免許返納とも思う

魔女の夢ふんわり乗せた秋の雲
若者が疲れ高齢者は元気
お若いね言われてちょっと出る力
美味しい秋に目を瞑る体重計
月まではもうすぐ届くノッポビル

大阪府　米澤　俶子

秋雨にポトリポトリと金木犀
神の采配思わぬ出会い途中下車
勝負服で挑んだ句会全部没
百歳時代父母に会うのはもっと先
八十路間近残っているか伸び代が

大阪市　磯島　福貴子

えんぴつで孫のおてがみ書いてます
古稀過ぎて自由の羽がふえている
忘れてる尖ったこころあった日を
誕生日婚約指輪はめる古稀
寂しさが余白に見える母の文

大阪市　岩﨑　玲子

重責を担う背中に芯がある
蒼天に国を守ると逝った人
突然の別れに泣いた日々遥か
初生りの尊さ旨さ説いた亡母
おでん鍋みんなの心あったか～い

大阪市　内田　志津子

林檎むくシャキシャキ二人半分こ
布団干しお日さまの匂いあなたに
孫が来て陽だまりになったリビング
睡眠負債取り戻してる今更に
ビギナーズラックにあった落し穴

大阪市　宇都　満知子

電車待つ空いているのは三両目
ときどきは私逆ギレしますから
大阪に台風来ない　ウソだった
エアコンを消すこと知らぬ夏でした
おふくろの命日だけは忘れない

大阪市　江島谷　勝弘

会話減りメールばかりが忙しい
親子とは大事な話あと廻し
どうするかビールの泡とご相談
白黒は苦手ファジーに生きてゆく
シナリオの通りにゆかぬ老いの風

大阪市　榎本　日の出

名月も災害憂い顔出さず
風邪を引き互いの愛を知りました
塔まつり済んで一息秋の風
運動会声援響くビル谷間
八十五お元気ですね胸を張る

大阪市　榎本　舞夢

大阪市　大川桃花

怒鳴られて愛と思っていた昔
謂れ知り合点がいったシビトバナ
子が病むよりましかと我が身慰める
天晴な試合敵から拍手され
感動して観てたら何んやコマーシャル

大阪市　大治重信

暑かった机の上に夏残る
張り切った声で出てゆく運動会
台風が乾いた脳を湿らせる
黙りで喧嘩のねたも尽きたあと
お世辞でも褒めてくれればうれしいの

大阪市　奥村五月

少子化にあがる産声宝物
運動会足は自慢の父転ぶ
社の名前消えた名刺は力無い
黙秘権終れば妻は愚痴の山
過疎の母田圃に行けず米を買う

大阪市　小野雅美

白髪抜き気付いた今日は誕生日
ため息をひとつ鏡に真似される
母の文字なぞれば母の息づかい
こだわりがあるからメールより手紙
踏み越えるはずだと神がまた試す

大阪市　笠嶋恵美

台風一過血圧上がる歯も痛む
五千歩を三日続けて無理と知る
娘と食事命よろこぶ元気出る
定期解約なんてうるさい銀行か
コーンスープ友より届く有難う

大阪市　金川宣子

お手洗いばかり行かせるバスツアー
留守電の訛りを聞けば父と知り
校庭中大きな声の運動会
したたかな背骨がゆるく曲線へ
美味しいと言ってくれたらやる気出る

大阪市　川端一歩

震災地私の未来見るようだ
復興の目途が立たないまま暮れる
師の蔵書今年いちばんプレゼント
川柳のお蔭日本語好きになる
老いてなお生きる下絵を今日も書く

大阪市　熊代菜月

星になり私見て居る亡夫の声
カラフルな人の集まるデイに行く
エンピツが愚痴は書くなと芯折れる
八十路すぎアップダウンの坂ばかり
お土産を配って無事を喜ばれ

大阪市　古今堂　蕉子

惚れるという裏に飽きるという虫が
簡単な私イチタスニのようだ
勿体ない罰が当ると育てられ
錦織が勝った わたしも疲れ果て
美しい言葉「お先に」と会釈

大阪市　近藤　正

免疫力ノーベル賞がついてきた
欲しい人より献身に平和賞
値の高い欠陥兵器買う総理
新内閣閉店セールボロばかり
台風に備え関空土嚢積む

大阪市　坂　裕之

みんな手を取り合っていく歪んだ世
里帰り犬も一緒に母の味
貶すより褒めて生きたい古希すぎて
揉めたから彼の良いとこ見つかった
迷い道したが発見したものも

大阪市　高杉　力

表札に残る嫁いだ娘の名前
帰るまでそのままだった予約席
あれれれれ出来てたはずの二重跳び
少しずつ役割増える家事分担
辞書をみて書いた文字だけ浮いている

大阪市　高杉　千歩

たまに見るテレビ再放送ばかり
またひとつ歳を重ねた銀杏散る
老人ホーム会話のない詰所前
マンションに囲まれスケッチの手が止まる
テレビが喋ってる字幕確かめる

大阪市　田中　ゆみ子

舌鼓血糖値とか言わないで
物忘れ度忘れ夕暮は淋し
好きなんです私　背高泡立草
年相応そんなに悩むことはない
ナチュラルが好き鬘はすぐばれる

大阪市　谷口　義

どこがどうというところはない体
大人だなと思う振り幅の大きさ
秋の雲に乗って義姉さん逝きはった
一筆啓上切手が貼ってない
原因は分からないけど目眩のくすり

大阪市　津守　なぎさ

ドクターの笑顔元気のみなもとだ
マフラーの重さを嘆く三分粥
三猿を通すベッドのエトセトラ
肉おちた肩へやさしいナースの手
献立表見つめる日課きざみ食

ペコペコのお腹抱える検査前
がんばれと励ます医師の暗い顔
空腹で長い祝辞を聞かされる
顔みたくないので開く文庫本
今の世は以心伝心よりメール

大阪市　寺本　実

許すたび愛は形を変えてゆく
褒められてまだ木に上る夫である
グレーなど決して認めないパンダ
金木犀居座わる夏を包み込む
居心地は良くても子の家は三日

大阪市　原田　すみ子

古希を越え次のハードル喜寿傘寿
義母卒寿急に足萎え入院す
白寿への道は険しいものと知る
秋の日を大和の国の法隆寺
軍備より天変地異に備えたい

大阪市　平賀　国和

人生の延長戦にあるドラマ
胸も背も温さ伝わるだっこ紐
筋書きの無いタイブレイクのドラマ
あれそれと波長があって半世紀
塩辛いおかずが増えてきた不思議

大阪市　藤田　武人

招待が来たらどうする月旅行
三日間明かり灯らぬ友の部屋
久しぶり四コマ漫画読んでみる
松ぼっくり拾って帰る私です
コスモスもトンボも群れて人群れる

大阪市　藤原　千恵子

デフォルメをした自画像にある過信
人間の弱さ保身に膝を折る
光年の距離に現実感がない
わがままになれよとストレスに言われ
よっぽどの事件斜めに猫走る

大阪市　升成　好

心地良い秋風浴びて指を折る
朝ドラで早く片付け早起きで
愚痴こぼし友に後悔わびる筆
また忘れ杖を探しに歩く足
老春を笑うて過ごす骨折れる

大阪市　吉内　タカ子

風の中　心かよえる人といて
赤い羽根付けて貰って恋ごころ
秒針もゆっくり刻む寺めぐり
優しさにあふれる人に輪が出来る
私から変えていこうか　変わる筈

大阪市　若本　安代

堺市　奥時雄

昼寝して寿命ちょっぴり損をする
スマートに別れたあとの苦い酒
店たたむ暫し惜しまれ忘れられ
選べない介護する身かされる身か
千古の御陵に今年も新芽ふく

堺市　柿花和夫

水中花枯れることなく今日も過去
子が巣立ち小さくなったゴミ袋
女の子生まれた日から比べられ
拝んだり蚊を叩いたり私の手
戦の無い平成祝う戦中派

堺市　加島由一

仏さま今日も戦闘開始です
古傷が痛む昭和の素浪人
冒険と恋は欠かせぬサプリなり
生きる糧　株と競馬と恋である
悩みごとこたえのでない草むしり

堺市　齋藤さくら

台風も新聞入るありがとう
若かったあの日の自信消えている
子育ての悩み昔と変わってる
お返しは要りませんよと美味い柿
誓い立て夢追いかけていた帽子

堺市　坂上淳司

八十余年歩き過ぎたか背が縮む
背が縮み腹が出っ張る嫌な老い
ＬＬのジーパン裾はＳ仕上げ
首縮め師の説教の通過待ち
若き日の己に身の縮む思い

堺市　澤井敏治

丸ポストまだ現役の無人駅
長寿社会古稀から先にある未来
墜ちた偶像でも走れます歩けます
躓いても父母の歩んだ道を行く
炊事ロボ出来たらなあと思う主夫

堺市　遠山唯教

賢人に説得力と耳がある
台風にＬＥＤが神となる
終生をこんなかたちで終れない
人間の捻子がゆるんで情けない
生涯にバックミラーをつけぬ妻

堺市　矢倉五月

突っ支い棒欲しい日もあり秋の風
濃い絆できた句集を媒体に
もう愚痴るまいと思うがまだ痛い
老々介護見ると亡夫に感謝する
はてとさてだけでスマホはまだ他人

茨木市　島田誠一

ダイエットせよと肥満の医者が急く
痩せる夢三日で萎むランニング
歳時記の暮らしはどこへ温暖化
弔辞には染み抜きされていた汚点
売り時を焦った株が出世する

貝塚市　石田ひろ子

胸に滲む言葉大事に取っておく
新米をいただく平和をいただく
泡立草にまた叱られた背の丸み
極上の秋召し上がれいわし雲
小さい秋見つけた熱いお茶の中

河内長野市　大島ともこ

草むしり胸のつかえを草むしり
雷が落ちてきたかの恋一つ
人の話基本的には聞きません
恋みくじ吉が出るまで終わらない
キリギリス忘れてはない危機管理

河内長野市　梶原弘光

私も知りたいファミリーヒストリー
１００歳の翼誇らし気にしなる
燃費良くするため少しダイエット
親展がボクにも後期高齢者
一強はやりにくいねと風見鶏

河内長野市　木見谷孝代

秋風にせきたてられて鍬をとる
コスモスの風に包まれ畑起こす
台風にやられた野菜蒔きなおす
二度蒔きの野菜がやっと出揃った
農の厳しさ若者パート増やしてる

河内長野市　黒岩靖博

目の前で生きてた人が突然死
台風が道路を塞ぐ置き土産
寿命伸び僅かな預金赤信号
肩書きがとれてまんざら悪くない
爺ちゃんの英語変だと孫が言う

河内長野市　辻村ヒロ

違うらしい仕事の顔と家の顔
長生きに良い食べ物をメモしてる
スランプを口癖にして不勉強
デイの日は化粧する為早起きだ
歩け歩け言われながらも生きている

河内長野市　藤塚克三

俺の人生助走続きで飛躍せず
年金暮らし妻が陽気で涌くゆとり
肩肘を張って生きると息切れる
歳月が哀しみそっと包み込む
酔ってない歪んで見える月に吠え

河内長野市　村上直樹

百寿茶壽近いようでも千歩の差
図書館へ寄贈を終えた趣味の本
拝み討ち老いにかまけた怯懦心
感謝と誇り兄妹姉弟四人揃い踏み
泣き笑い我が人生は万華鏡

河内長野市　森田旅人

心柱持ちしなやかに生きた母
遥かなる母を小さく呼ぶ癒し
配り終え兄は安堵の満中陰
小さいこと拘っていてまだわたし
愛憎の同士となった金婚譜

河内長野市　山岡冨美子

花の芯ゆさぶる秋のサクソフォン
台風にトランプ忖度などしない
沖縄はいまもオキナワ砂糖黍
不知火は遥かに亡母の忌はめぐる
柘榴爆ぜ柿は熟れても過疎すすむ

河内長野市　山室光弘

腹八分出来ぬ悩みの秋の色
解説を先に読む癖文庫本
引き受けて悩みつきないお人好し
肩に力秀句うかばぬ訳は知る
惚れっぽさ八十路がきても忘れない

岸和田市　岩佐ダン吉

地図通り僕に歩けと言いますか
闇の中歩くやがては道になるだろう
直言にふっと私を取り戻す
反対に傾く私ひとりでも
筋通し少し私に晴れるもの

岸和田市　宮野みつ江

台風も三度目通り過ぎる待つ
ご命日 松茸御飯炊いてます
夕刻の鏡見知らぬ婆様が
口角を上げる訓練忘れてた
だあれとも会わずにいた日コンビニへ

四條畷市　吉岡修

燃えきったデスマスクだとわかるだろ
黄砂くる悟空がきっと止めるだろ
満々と弓弦張っている疲れ
大きい字にしてよだいじなスイッチだ
余生よしうまい地酒にあえる旅

吹田市　木下敏子

諦めない中途半端は嫌だから
生け垣の木犀の香に励まされ
ゆっくりと歩む八十路の秋の空
ウォーキング今朝もゆっくり四千歩
前向きに八十路の坂を杖ついて

吹田市　須磨活恵

有難いこの一年が無事に暮れ
カギ掛けたままの一日雨が降る
言い訳は心の脆さだと思う
秋しぐれ独りの部屋が冷えびえと
人は人私は私の健康法

吹田市　野下之男

台風も地震も神がおりません
災害地復興の元気いいですねえ
薬箱きちんと並び待っている
食べている食品なぜか今テレビ
連休のあの有難み忘れない

高槻市　指宿千枝子

鍵なくし四時間待って子が帰宅
おまつりの宴も褪せて夜が更ける
隣人の温もり胸に抱いて寝る
にこにこの暮しに勝るものは無し
祖母に似て百まで生きる日々にしよ

高槻市　片山かずお

秋ですねさすがの百日紅も散る
秋の使者ですとひつじ雲が浮かぶ
キンモクセイ秋が来ましたよと香る
運動会の歓声風に乗り届く
神苑にそうっと秋を告げる萩

高槻市　島田千鶴子

五七五とても短い物語
赤飯の用意は出来たおめでとう
下り坂やっと佳境に入ります
秋の庭小さき日だまり猫二匹
最終章日々を楽しむこととする

高槻市　初代正彦

野暮用を済ませほっこり籐の椅子
身の丈にあった暮しにある笑顔
温かい皆の笑顔に開く鍵
気配りも酒の肴にする宴
カナダ松茸にもふっと秋の味

高槻市　杉本義昭

真っ直ぐな愛の言葉でラッピング
ほめられる店で買ってる化粧品
買う冷やす開ける注ぐ飲む独り者
憧れの女の前では貝になる
フォークソング共に歌った日の遥か

高槻市　富田美義

長老の一喝が出て座もエンド
これからの指針と信じ聴く法話
見学にゃ祝儀持参で来いと有り
常識は一つに非ず生きた知恵
切っ掛けはとっくに忘れ共白髪

高槻市　富田保子

あの煙美味しい猫は知っている
洋食もいつも手慣れた箸にする
窓明けて今日の天気にごあいさつ
デパ地下の試食で足りる老いの腹
あきらめの早さ私を遠くする

高槻市　原洋志

ごたごたのわけを屋台は聞いてくれ
八十路過ぎ積載量を軽くする
再会に少しアレンジする履歴
人生をやり直したい塗り絵から
手術前医者の大学確かめる

高槻市　松岡篤

我先に座りスマホでゲームする
きっと会おう半世紀後も宿題に
泥仕合する程遺産無いらしい
母からの野菜は土も愛も付き
バス代に消えてしまった預金利子

豊中市　池田純子

鈴虫にやっと風鈴タッチする
シクラメン酷暑乗り切り赤い花
こし餡をこねる手に亡母良しの声
さくら貝拾いふる里持ち帰る
万国旗しょって野菜が並んでる

豊中市　上出修

もう恋も終わってしまう秋の暮れ
何の日か朝の散歩で日章旗
君しかと祭り上げられ有頂天
古希はまだチンピラですよ百の会
沖縄を我が物顔に米機飛ぶ

豊中市　藤井則彦

ありのままの自分で生きる心地良さ
夢に出た人とばったり街で会い
あの世にはやがてぞっこん惚れるかも
新聞を逆めくりして呆け防止
悪い夢見るのは生きている証し

豊中市　松尾美智代

富山の旅トロッコ列車寒かった
思い出を肴に友と飲む至福
婆ちゃん五人楽しかったね 喋りすぎ
台風の一日前の晴れの旅
地震台風娘一家の宿になる

豊中市　水野黒兎

片隅になごむ小さな記事がある
しっかりとトゲを忘れずバラ育つ
妖精に熊にキノコに森は母
心臓が躍り初演のベルが鳴る
台風に今日一日の引き籠り

富田林市　片岡智恵子

胸を打つ話を通夜の席で聞く
芽ぶかぬ花を未だ抱いている三年目
五分粥に半分癒えた味がする
老いるのは仕方なし和して同ぜず
遠い日を薄いベールの中に置く

富田林市　関よしみ

土に一礼稲刈りをする農賛歌
ミレーの絵まねて落穂を拾い上げ
火星人オレンジ色で寄って来る
雲の峰抱えてさびし膝頭
白に白重ね結んだ赤い糸

富田林市　中村恵

ぶらんこの振り幅少年は揺れる
折り鶴は愛の形を覚えてる
古ぼけた椅子一脚の模様変え
わがままで冬の苺を食べたがる
太陽が沈むあなたは旅立った

富田林市　山野寿之

平凡のひとり暮らしの日向ぼこ
ロマン売る花屋が消えて老いる町
豪雨に猛暑は地球の怒髪天
古稀の娘にまだ気配りの母白寿
台風一過ブルーシートの街無残

寝屋川市　籠島恵子

マイクロプラスチックは人間の罪
しあわせを振りまくように夕やける
同情はしない考えが違う
夫とは違う思いで見る夕日
名刀にドラマ　マイ包丁にもドラマ

寝屋川市　伊達郁夫

終活がほぼ片付いた眼鏡拭く
老いの窓灯が漏れているから安堵
孫洗う孫のわがまま聞きながら
どの色を足せば私の虹になる
日向ぼこ　このぐずぐずが堪らない

寝屋川市　冨山ルイ子

夏日に逆もどりおかしいな地球
顔顔顔なつかしい人塔まつり
あの人とこの人と会い胸おどる
席に私訪ねてもらい話し込む
新年会のお誘い受けて思案する

寝屋川市　平松かすみ

母さんのお針の好きな座り胼胝
AIにお聴きしようか我が寿命
昨日より機嫌の悪い両の足
墓石まで動かす震度5の力
脳回路百歳視野に入れている

寝屋川市　森　茜

棒になり凝視している鬼やんま
ちぎれ雲ちぎれていったままひとり
一部始終隠しカメラが語りだす
むらさきの声で恋する手ほどきを
早朝のからすがアカネサンと呼ぶ

羽曳野市　安芸田　泰子

気楽さがやがて淋しくなる独り
郷愁の心の画布に父母をかく
駄菓子屋で子供の頃を買って来る
突き当たった壁がやる気を引き起こす
うたた寝を覚まして過ぎる秋の風

羽曳野市　宇都宮　ちづる

台風が倒した稲もこうべ垂れ
終活の合間カーテン派手にする
喜寿にして職場ある夫頼もしい
転んだ子こちら伺い立ち上がる
困ったら亡母に助けの鈴ならす

羽曳野市　徳山　みつこ

傘さしてくれた貴方は遠去かる
墓を維持していけるかな子を案じ
一族の芯でいる気の傘寿です
基礎に金をと本庶さんの金言
終章へひと日ひと日の多色刷り

羽曳野市　中川　ひろ介

猛暑去りやる気出てくる青い空
いが栗と喧嘩のはての栗御飯
爺婆はサマータイムはあたりまえ
まっすぐに歩いて余生瑠璃の空
芸術の秋カンバス前に爆発だ

羽曳野市　藤原　大子

認知症優しい声は良くわかり
シルバー席証明書見ず通される
老いてゆく変化も少しずつ慣れて
勝敗も喜怒哀楽もあり生きる
10連休言われ侘しい無職なり

羽曳野市　三好　専平

青田風みささぎぬけて魔女となり
コロコロと五輪のかげで賽子を振り
悲しくてやがて怒りとなる政治
一万四千発なんですねんそれ
冷房の効き過ぎている葬儀場

羽曳野市　吉村　久仁雄

勝ち負けのこだわり捨てて碁と遊ぶ
両成敗敵も安堵の息を吐く
波風を立てて議論を深くする
昨日と同じ今日が豊かに暮れていく
真っ当に生きると増えるゴミの量

東大阪市　北村賢子

天変地異まさしく人類への怒号
喝采もないまま生きてエンディング
健康寿命延ばし出かける同期会
歳重ねる度に合掌深くなる
終活話あすなろの名の老人会

東大阪市　佐々木満作

駆け足で季節移ろう喜寿傘寿
爪に火を点した頃を忘れてる
なるほどと父言わしめた子の決意
本番に不思議と強い無精者
降りかかる火の粉を躱す安倍総理

枚方市　二宮山久

庭の松植木屋入り息を吹く
趣味多忙大活躍の電動車
ちょっとした小銭入った食事会
無器用に生きた人生宝物
手探りで始めた趣味に花が咲き

枚方市　二宮紫鳳

木犀の香りが運ぶ朝の幸
脇役が性にあってるお人好し
ボランティア癒し癒され笑顔の輪
絵手紙に添えた一言効をなし
コスモスがねぎらうようにお出迎え

枚方市　藤村亜成

挑むたび相手も強くなっている
未知の友さがす句会場巡り
月の土地所有するのはどこの国
きっぱりと話せて風がさわやかだ
明日に向き撃てるだけの弾が欲し

枚方市　山口弘委智

バイク音聞きのがすまい子の便り
新米のおにぎり妻の手に躍る
鉛筆の芯まで丸いふくよかさ
ぐったりが座席を埋める終電車
古希四人集えば青春縄のれん

藤井寺市　鴨谷瑠美子

ほいほいと両手で受けている薬
落し蓋のように布団を掛けて寝る
裸木になっても隠すものがある
他人ならもう水やりはやめている
おみなえし先祖の墓の側で咲く

藤井寺市　鈴木いさお

告白の前にこっそりワンカップ
不束な娘育てたのは私
極楽の席は先着順らしい
エンディングノートが語り出す本音
アディショナルタイムを生きるカラフルに

藤井寺市　吉田喜代子

柿りんご夏の食欲取り戻す
夏去りて急に冷たくなる便座
あきれてた車中スマホに我もまた
虫の音にゆったり一句終い風呂
寂しさか夫逝き人のまた電話

藤井寺市　若松雅枝

時雨れるや亡き子残せし旅鞄
若者と話ぐらいはまだ出来る
先方が差出した手だ拒めない
百歳まで少し間がある大丈夫
若いからと頼る息子ももう古稀に

松原市　森松まつお

誕生日花の効果は三日ほど
逆流性胃炎立派な名をもらう
一ヶ月酒税払わず過ごしてる
メンタルな面では妻にかなわない
数独にはまり夕食ピザを取る

箕面市　大浦初音

予定ある日日を元気にこなす幸
まず名前さがしています投句欄
四人掛今は二人のさし向い
腕組めば介護かと見る高齢者
柔らかな心ですごす終活期

箕面市　酒井紀華

帯の芯ポンと叩いて勝負する
吊り橋も心もゆれる波の音
さようなら橋を渡れば過去の人
震度7容赦しないぞ現実は
ビリケンさん安らぎ配る足の裏

箕面市　出口セツ子

傷つけて傷つけられて生きている
明日の米以上の欲は無い身軽
遊ぶのも疲れる年になり困る
予定表埋めてあしたのエネルギー
優しい子支えに試練にも無敵

箕面市　中山春代

晴れた日に捨てる私の手芸品
豆皿に錠剤三つ光る朝
イケメンに惚れ惚れ埴輪ミュージアム
古里の棚田が見える父の米
十二月「遺族の家」とあるラベル

八尾市　寺川はじむ

一刀でもメジャーに映える二刀流
身のあちこちが老いのサインを出してくる
捨てた方の道がひときわ映えて見え
天下りしてから稼ぐ公務員
かかあ天下されど笑顔が満つる家

八尾市　宮崎シマ子

稲刈り機入らぬ棚田人の手で
月に届く世になり私原始人
居眠りが続く観光バスの帰路
私を嫌う人が居るとは知らなんだ
ねちねちと朝の愚痴雀が笑う

八尾市　村上ミツ子

なにがあろうと母娘なんとか生きている
またかいなすっかり忘れてたなんて
諦めてないのにやはり負けました
タイガースがんばってがんばってビリ
あちら立てこちらも立てて転んでる

八尾市　山根妙子

醍醐味は水蜜桃の丸かじり
燻製の試食でビール欲しくなる
季の移りスカーフ羽織るほどの風
月の暈ふわりと明日の雨を予知
綿雲に挿しこみたいな割箸を

神戸市　上田和宏

理論肌これが取り柄で難点で
愛してる律儀に言えば疎まれる
男と女やはりらしさを求め合う
進歩したはずのステップ通じない
右と左身体はこうも違うもの

神戸市　奥澤洋次郎

心根の良さで育ってきた美人
いろいろとあったが華が欠けている
非正規が口遊んでる三谷ブルース
まだあった店五十年振りの街
外圧がなけりゃ変れぬ永田町

神戸市　冨永恭子

慌てずともよい時間たっぷりある
赤じゅうたん踏んで泥土を知らぬ靴
名産に他県ナンバー寄る誇り
登らずに堪能させる逆さ富士
無人駅見知らぬ人と日向ぼこ

神戸市　能勢利子

待ち合せの本屋が消えて百均に
読書家の娘スマホで本を読む
断捨離は百科事典がいの一番
プレゼント孫にはいつも図書カード
読書時間だらだらテレビに侵される

神戸市　細川花門

鳴く虫を軒に吊るして客を待つ
裏になり表になって火蛾の舞い
観覧車に張り付く蓑虫の思案
埋めてある秘密の壺に蟻の列
虫の音をCDで聴く都会の子

神戸市　山口光久

少しずつ視野も歩幅も狭くなる
ストレスを解かしてくれるお湯がある
別人に成り済ましてる厚化粧
風が吹くまでは我慢と言い聞かす
不断着に染み込んでいる人間味

神戸市　山口美穂

衿もとへついて帰って来た藪蚊
秋の蠅日向ぼっこをしてました
ゴキブリ発見みんな忘れて追っていた
台風に落とされ柿の無念色
もやもやの心を仕舞うとこがない

神戸市　山崎武彦

ふわり雲追憶のひとしあわせか
控え目に質素にわたしのエンディング
ふわりふわふわふわふわと三次会
そして秋妻の手がもう荒れている
逆光に鈍色となる瓦礫跡

明石市　糀谷和郎

無印になって気楽の羽が生え
うしろの君を風が知らせるかごめ唄
夏の日の戯言今はもう遥か
新刊の秋かインクの香が誘う
祝杯の名目ならば種切れぬ

芦屋市　黒田能子

平均に暮らせるだけで満ち足りる
したたかに長生きしますこれからも
合格の祝杯家族だけでする
無印の製品の方よく売れる
寝不足の肌ざらざらとしてきます

尼崎市　市坪武臣

暑かろう案山子に贈る麦わら帽
戦争を忘れぬために夏が来る
七転び八起き落ちることはない
投票後出口調査で嘘を言う
大車輪で働く蟻の冬支度

尼崎市　加川靖鬼

一口城主瓦一枚寄進する
手の皺に生きた証しが刻まれる
恙無く生きて夫婦の傘寿会
遺伝子の不思議引き継ぐ蜘蛛の網
万能薬だからちょっとも効き目無い

尼崎市　永田紀惠

試供品元はしっかり取る仕組
独り言気付けば一句できていた
天国の予約取消す退院日
無愛想も味にしている繁盛店
スキップが出来る間はまだ若い

尼崎市　藤井宏造

時には味方時には敵になる海だ
負けてこそ堂堂言える負けおしみ
村中が夜更かししてる村祭り
青空の下はやっぱり握り飯
二時間半で東京弁の中にいる

尼崎市　藤田雪菜

何もない一日だから安堵する
逆らわずひっそり影がついてくる
不用服ボタンはちゃんと取っておく
愚痴こぼすむなしさ虫が鳴く現実
鈍行でロマンを辿る倉敷へ

川西市　岡一心

大会へ漕ぎ出す勇気冒険心
念を押す母の忠告身に沁みる
雨天良し好天なお良しハイキング
正味より付録が欲しい記念号
御名当ずばり的中射るハート

川西市　山口不動

秋の蚊は命がけにて食らいつく
台風に持って行かれたもくせい香
家選ぶ避難所よりも高いとこ
ありがとう全身麻酔の前に言う
まだ見える全身麻酔の点滴が

篠山市　北澤稠民

この歳でまだまだ欲が捨てられず
生きてきた道を返りてほっとする
一冊の仏書が生きる知恵をくれ
賞罰なし精いっぱいに土と生き
体力をつけて始める医者通い

篠山市　酒井健二

居住まいを正し会いたい人がいる
生き延びた今日一日を愛おしむ
聞き上手まともな医者に会えました
その昔貧乏自慢のお金持ち
赤い線添って進めばレジへ着く

篠山市　酒井真由

午睡からさめる　病院のベッド
山の音を静かに聴いている夕べ
まぼろしの灯台波が夜を穿つ
骰子がどう転んだのかはヒ・ミ・ツ
無視という融通無碍の手があった

三田市　足立つな子

敬老も彼岸もわすれ奮闘す
うろこ雲ああそうなのか彼岸の日
下り坂気をつけないと膝笑う
看護師の語り口には頭が下がる
なんとなく人の胸中わかる歳

三田市　上田　ひとみ

響いていますか繋がっていますか
良い人の基準お聞かせ下さいな
足りないところをやさしく助け合う
弱いことそれも私の良いところ
淋しんぼあなたとそしてこの私

三田市　尾崎　一子

七十五歳おめでとう孫が笑む
記念日は海の夕日をながめよう
リンクウタウンマーブルビーチへとふたり
煙る海遠方に関空の灯り
駅で外人さんを案内する孫

三田市　北野　哲男

松茸を担いで下りた山も荒れ
古里の思い辿れば木の校舎
筵もう民芸品に並べられ
階段が億劫になる歳に酒
フィナーレは揃わぬながら皆歌う

三田市　多田　雅尚

ノーベル賞医学支えるのはネズミ
正論を通す親方四面楚歌
便座には開放感とある孤独
階段に消費カロリー書いて有り
ＤＮＡ同じで違う顔かたち

三田市　谷口　修平

子供とは遊びたくないカブトムシ
新語にはとことん弱い生き字引き
虐待児救ってくれたお節介
寅さんのカバンの中に住む孤独
子供からそろそろ欲しいお年玉

三田市　野口　真桜子

感性だけで生きのびる母駄駄をこね
ユーモアとセンスの種に水をやる
同窓会さざ波たてた君と僕
ヘソクリが百万越えたらしい妻
駆り立てる危機感ありてラインする

三田市　福田　好文

父の日に毛生え薬を娘がくれる
百歳の親に介護さす傘寿
故郷に帰れば昭和天こ盛り
膀胱から起床ラッパが鳴る深夜
サマージャンボ当てて鰻を買う予定

三田市　堀　正和

眼鏡の度合わなくなって秋深し
よく笑う句会へと行く秋ひと日
スポーツも表明るく暗い裏
責任は誰もとらない委員会
一周忌まだ生酒が残ってる

三田市　村田　博

古傷に触れて顔出す不発弾
鼻メガネ似合うお歳になりました
補聴器を外しカラオケ止まらない
型式は古いがパワーでは負けぬ
愚痴吐いて吐いて始まる泣き上戸

高砂市　松尾　柳右子

独り居を気遣う娘らに感謝する
台風にめげぬコスモス笑顔呼ぶ
送迎をされて笑顔の友集う
思い出は消えぬ主人の指定席
異口同音ピンピンコロリ目指す夢

宝塚市　田中　章子

結婚記念日忘れたのはわたし
甘いこと言うのが祖母の仕事です
盆栽はいやよ真っすぐ伸びたいの
ありがとう言えばこころに谺する
コスモスの揺れが心に風運ぶ

宝塚市　丸山　孔一

お酒はと聞けばドクターただニヤリ
量よりも値段に合わせ買う野菜
外見で元気ですねと言われても
再発を防止しますと言う無策
冬眠はしたいし飯は食いたいし

西宮市　秋元　てる

よく笑いよく喰い死ぬのを忘れてる
老人は置いてけぼりにする新語
ミスばかりして早寝をしたら夢に来た
お裾分け古里自慢がついて来る
古里よ歩けないのに夜毎呼ぶ

西宮市　緒方　美津子

目にやさし十月号の白い秋
平穏が続くと備蓄を忘れる
空渡る瑞穂の国の祭り笛
コンビニへマスク外して入ります
自惚れも生きる力に代えてよし

西宮市　西口　いわゑ

大空に諸手をあげて彼岸花
鉛筆が時にはナイフより怖い
秋雨のしとしとなぜかほっとする
人もみな紙に表裏のあるように
許してみればほんの些細なことなのに

西宮市　福島　弘子

シルバーの割り引き料金いとうれし
励まされリハビリ笑顔出始める
百歳が形見とくれたこぎん刺し
バッグの中砂丘の砂が付いて来た
悔いはない老母を看取った下手な嘘

鉛筆の芯が喜ぶこの一句　西宮市　福田正彦

生命には毎日違う風が吹く
川柳の息吹に浸り宴猛る
免許証返上したが生きている
菊の香と酒酌み交わし秋更ける　西脇市　七反田順子

自然界の不思議を探る地学好き
名字には謎が多くて面白い
スパイスを効かせた料理上機嫌
生きざまも名優だった希林さん
シニア席座る心地はどっしりと　南あわじ市　萩原狸月

若かった只それだけにあった春
終活に惰性の賀状整理する
ばらばらの年賀の客に里の鬱
晩婚が曽祖父ちゃんにしてくれぬ
災害のニュースも狙う視聴率

避けようもなく受けとめた暴風雨
未曽有の風速耳でとらえている恐怖
被災地へ思いを馳せて目を伏せる
台風の思いもよらぬ置き土産
こわいのは気付かぬうちに進む老い　（前月分）池田市　栗田久子

友の俳句しかと味わいああ良いな
緑地公園オゾン涼風満喫す
コイン一個ポッケにゆるい散歩する
書いた字をなぞって変な字になった
蔓絡む中でじっくり熟れていた　（前月分）熊本県　岩切康子

時告げる鐘の音響く町に住む
ドローンの秘境の景色ドラマより
睡眠時間今日の体調指図する
自転車さえ転ばぬ先と禁止令
テーブルのリモコン三つさえ迷う　（前月分）鳥取市　吉田弘子

恋文を書いております惚け防止
体力が落ちて財布の金あまる
宗右衛門町灯りの数は恋の数
招き猫に帰れコールをさす女将
一年は短く夜は長すぎる　（前月分）堺市　加島由一

第169回 大阪川柳の会

日時　12月4日（火）午後1時開場・午後2時締切
会場　大阪市北区梅田　駅前第2ビル5階　大阪市立総合生涯学習センター　第一研修室
宿題と選者（各題2句・席題なし）
△「神戸」矢沢和女　△「節目」本田智彦
△「部屋」西出楓楽　△「奥」森中恵美子
会費　千円　**欠席投句**（切手82円5枚同封）12月3日到着分まで　会員に限る
（会員募集）年会費千円　会報を年6回奇数月にお届けします。
〒532-0025　大阪市淀川区新北野1-3-4-706　本田智彦　宛

川柳塔の川柳讃歌 ⑯⑧

上方芸能評論家　木津川　計

早よ帰ろうが遅帰ろうがひとりやし

安土　理恵

永井荷風は生涯独身だったから妻に怒られたり嫉妬されることがなかった。紅灯の巷を愛した耽美派はことにストリップに入りびたった。訃報が大きく報じられるとストリップ嬢たちは「にふうセンセイて偉いのね」と初めて感嘆、文化勲章受章者も形無しだった。「葬式無用。骨は拾ふに及ばず。墓石建立また無用。新聞に死亡広告も出すまじく…」が遺言だった。理江さんもひとりになられた。というてストリップへは行けず、どこへ行く。

八十を過ぎると神社よりお寺

早川　遡行

「八十になったら恋をしてみよう」と詠んだのは橘高薫風だった。薫風さんは人格者に見えて曲者で「恋人の膝は檸檬のまるさかな」などと信奉者を歎かす句を詠みもした。そこへいくと遡行さんは殊勝で、娘っこばかりが巫女の神社へは目もくれず、女っ気のないお寺を選ぶのだから、恋人も檸檬も眼中にないのだ。偉い。弟子は師を超えるのである。ところが遡行さん、次の句の尾畠さんには負けます。上には上がいるなあと僕は脱帽する。

人として見事に生きる尾畠さん

谷川　憲

山口県の山の中で行方不明だった男児を発見、一躍有名になった尾畠春夫さん(79)の話を新聞で読んだ。ドン底の貧乏家庭に生まれ、農家へ奉公に行ったが馬の餌を盗み食いした。長じて別府で魚屋を開業、一度も赤字にならず、配偶者にも恵まれ、二児を育て、65歳から世間へ恩返しにボランティアに。中学校に4カ月しか通わなかったから85歳になったら夜間中学へ行き、「あと五十年生きたい」と。憲さん、「人として見事な生き方」ですねえ。

時は金などと貧しいことを言う

居谷　真理子

「時は金　時ばかりあり余り」の名句を詠んだ川柳家がいた。ならば毎日が日曜日の高齢者は大金持にならねば辻褄が合わんではないか。「タイム・イズ・マネー」を信奉した西洋の功利主義にひきかえ東洋の志は「一寸の光陰軽んずべからず」と学問の成就を目指したのである。真理子さんも偉い。時間をカネに換算するのは心が貧しいと。すると日本一の大金持、ソフトバンクの孫正義氏の個人資産は二兆二九三〇億円。日本一の貧乏人だ。

確かめました主治医の出身校

堀　正和

医者のランクはピンからキリまで。キリの藪医者が小咄ではやる。患者が運ばれてくると「手遅れじゃ」が決まり文句の藪の元へかつぎ込まれた患者にやはり「手遅れじゃ」「センセイ、いま屋根から落ちたばっかりです」「落ちる前になぜ連れてこんのか」。こんな藪にかかると災難で命の保証はない。出身校を詮索するのも治りたく助かりたい一心から。堀さんも慎重です。「医者のあと石屋にかかる残念さ」(柳多留)になりたくない一心だ。

古書店のお客何方も学者風

山口　高明

古書と古本には違いがある。古書は絶版になり、出版社に注文しても手に入らない。古本は古本屋にあり、一般書店にも置いてある古い本で新刊書店の価格より古本屋の方が安いのが普通だ。古本屋は三通りに分けられる。①古本だけを扱っている店、②古書だけの店、③古本と古書の両方を扱っている店。今はネットで古書が手に入るから古本屋は絶滅に向かう。高明さん、学者ならずとも悲しいなあ。

自選集

母は不死鳥どうぞ痛みが出ぬように
バイキング僕から欲が消えている
行列に並ぶゆとりのある旅だ
マドンナのブログに僕がいたと言う
退職をすると新元号になる

小島蘭幸

行く秋をまだ佇ちつくすカンナの朱
寄り添うた肩の先から冬兆す
わたくしの行く手を阻む黒い猫
睨みあい道を譲ったのはわたし
冬が来るまでに手紙を書き終える

木本朱夏

軽音楽聴きつつ牛の仔が産まれ
この辺で一服しよう峠茶屋
螺旋階段ひたすら上る蟻である
何事もなく星空に掌を合わす
逆転劇生んだ見事な犠牲フライ

斉藤劦

浮き雲に乗って同窓会便り
好きな人に逢える信号エメラルド
手刀を切って酒場の端っこへ
体幹が酒で歪んでいるようだ
生きている僕に回覧板が来る

新家完司

暗闇が好きです種もわたくしも
乗り越えて節目だったのだと悟る
アドリブと言うが所詮は付け焼き刃
旦那さんを亡くした人が多すぎる
友がまたひとり旅立つ　雪が降る

高瀬霜石

子や孫の明日を憂う温暖化
行かされて余生の翼整える
気付かないうちに空気のような仲
親が居て師が居て今の我が居り
点滴器のようにスマホを持ち歩く

竹治ちかし

名月と交わす挨拶しまい風呂
生かされて連休プラン追う居職
エスコート通天閣とハルカスに
旧友の笑顔は生きるバロメーター
青空へ胸一杯のハーモニカ

津守柳伸

することがないのに昼寝のひまがない
笑い皺も苦労の皺もない私
おいしそう自分で作る隠し味
一つずつうまいまずいと栗を食べ
妻の声が聞こえてくる秋の雲

都倉求芽

減反を決め冬耕の牛を入れ
人の世は雪解脱山光輪寺
宇宙船戻って冬の月冴える
大年の風呂にひたりて思うこと
師を悼む暖冬異変今日限り

土橋螢

百均へ来てほっとする戝布
口角を上げると心晴れてくる
運動会孫のべべたはばあちゃん似
スパイスをいっぱい振っておく噂
亡夫の分も生きよと傘寿賜わりぬ

西出楓楽

さて師走五・七・五のネタ探す
さて師走医師への賀状また思案
さて師走十大ニュース添削す
さて師走通帳残高妻と読む
さて師走父母の命日たしかめる

仁部四郎

終活後は天国移住と決めている
弟に健康指南受ける歳
三日後に思い出してもう時効
年金のプランを覗く秋の天
魂は土には還らないのです

前たもつ

目覚ましが本日の幕あける役
とりあえず大山（だいせん）さんの貌を見る
開山千三百年大山に雲はない
大山を見てから今日の身を囲む
いま少しこの世にいたく気を貰う

政岡日枝子

一年の計はさておき今日の計
日めくりの軽さ一日の重たさ
今にも動き出しそうな時刻表
最近は座るときでもどっこいしょ
完全看護聞くと看るとで大違い

三宅保州

月下美人　前ぶれ長くひと酔わす
鈍行の駅に情の一輪さし
かさこそと枯葉が響くひとり旅
それぞれの皿に母なる知恵と味
女とし成長眉描き紅を画く

宮西弥生

闘病のベッドを見舞う塔まつり
親友の涙をしかと見る涙
手を握る薩摩隼人の底力
懐かしい顔顔顔とする握手
来年も来れたらいいなァ塔まつり

福士慕情

背が曲ってますよと注意する妻も
手も足も衰え緩慢な動作
病院へ行くのに手離せない車
食前食後食間にまで飲む薬
お互いに頼るしかない老夫婦

村上玄也

準備した笑顔は使い切りました
燻したら善人だけが転げ出た
ＡＩの世に蓄蓄は役立たず
淋しさは同じか俺と浮遊ゴミ
純真な影絵があった古障子

森山盛桜

一本の針

愚かにも曳きずっていた針仕事
きっかけは針一本が失せたこと
狂って探す　誰かの足を刺す前に
また一つ手放す家事もプライドも
自尊も自負も三途の川の手前まで

八木千代

木枯しの防ぎようなし夫病む
来年の桜を見ようとり敢えず
遺影用ばかりが溜まるアルバムだ
打ち消してみてもメールは駆け回る
アバウトに生きる円周率は３

山本希久子

鯖よんで六十五になりました
一生涯妻を愛したことはない
いつも恋しているような母でした
金子兎太・新子・薫風・山頭火
心中するほどの恋ならしてみたし

板尾岳人

折鶴は一度も啼いたことがない
痛み止め煙草一本吸っておく
コピーしたＤＮＡが目を覚ます
人生のいつまで続くおままごと
飛び跳ねているのはきっとカタツムリ

川上大輪

句集の森

『川柳塔創刊80周年記念句集』

遠山可住

牛が居たら喜ぶ草を焼いている
初霜が降りましたハイさつまいも
もったいない雨が降ってる海の上
けもの道父と歩いたことがある
太陽のサービス夕焼けして落ちる
合併へ路地の歴史が一つ消え
分校へ子供の声を聞きに行く
子を産みに母は戻れぬ橋渡る
正直に呑んだ薬の副作用
名案が出て一服の茶がうまい
わたしにも一票がある利用価値
ドライフラワー少しすました古希の恋
袖の下効いたと思いたくはない
どのボタン押したと老いを叱られる
税務署でお茶をよばれたことがない

（平成一六年七月一七日発行）

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

雨の中　鬼が出かける投票日
むかしから鬼の嫌いな多数決
勝つことは思いもよらぬ鬼の背な
気の弱い鬼で何度も振り返る
外食へ妻を誘わぬ変な鬼
お喋りなおんなを嫌う夜の鬼
妻も子もだれにも見せぬ鬼の地図
いっぴきの鬼まぎれこむ阿波踊り
五本目のたばこを鬼は喫いはじめ
軍鶏の背に鬼の涙腺ふとくなる
四十六キログラム何を為しうる鬼なるぞ
天井に鬼の呪文が貼ってある
闇市の鍋の匂いが鬼を呼ぶ
生きのこる鬼に八月十五日
火の玉を抱いて墓まで鬼の道

完

（新年号から「小出智子川柳集『蕗の薹』」を連載します）

西出楓楽選

北の大地に灯り戻ったニュース聞く
飲み会の息子にせめて灯り点け
水で泣き水の恩恵知った夏
葉物高値に料理担当音を上げる
顔付きも歩く姿もばあさんだ
弱気だな腰の痛さに負けている

米子市　野川宣子

揺れている　私も白いコスモスも
魁夷展行けば魁夷に恋をする
若い日の地味な洋服など捨てる
ストレスは無ければ困る塩コショウ
肉体の他は結構まだ若い
地図が好き　私は鳥にすぐなれる

大阪市　森田遊子

ワタ食って大人の味を知る秋刀魚
叢雲が名月を妬き邪魔をする
車座に神輿を囲み茶碗酒

河内長野市　中島一彌

ひび割れた夫婦茶碗の持つ歴史
老けたねと白寿の母に気遣われ
大自然ヒト科のエゴに牙を剥く

三田市　松本ゆかり

味よりも器で値段決めている
身の丈に合った器に幸を盛る
奥歯かむ口のへの字がくせになり
はっきりとシニアと名乗る映画館
効くのなら嫌な注射もするのです
バッカスに向うむかれる精の無さ

堺市　古川光雄

家族葬友に別れも言えずして
預金残睨んで余命心配す
足腰が老いて心も老いて来る
ボランティア出来ぬが心配だけはする
ボケ防止妻の買物ついて行く
西台風日本沈没北地震

米子市　戸田　真理子

むずかる孫スマホ子守りの救世主
一文字に結んだ口にある事実
アルバムを開くと笑い声の渦
逃げ道はここよと孫を抱きしめる
子の寝顔が叱った事を詫びさせる
おかえりと言える幸せ噛みしめる

白河市　鈴木　たけし

敬老日米寿の車椅子の笑み
敬老会は増え入学式は減る
老いるとはこういうことか湿布貼る
十五年血圧帳も束になり
無人駅タイムスリップするホーム
先頭は苦手びりでは恥ずかしい

豊中市　荒木　郁子

芋粥に頬が緩んだおばあちゃん
昼の膳夕べも食べた栗ごはん
趣味一つ減りまた増えた医者通い
デザートに増えた薬がノミネート
停年後留守番役の仕事増え
喜びも悲しみも知る足の裏

千葉県　廣瀬　良磨

向日葵が癒してくれた暑い夏
影法師秋の日差しにほっとする
斜めから見るモナリザに癒される
空白を色鉛筆で塗りつぶす
手を広げ漂う秋を包み込む
街路樹がそろりそろりと冬支度

和歌山市　西川　千鶴

見ぬふりをした悔恨が疼き出す
革張りの椅子も息呑む裏話
びりっ穴回り右すりゃ一位です
十七文字に自分らしさを捻り出す
色色と有るのよ何も聞かないで
お百度を踏んで菩薩の顔となる

河内長野市　穂口　正子

百均で夫婦茶碗を買いかえる
この茶碗きっと長生き二人より
夭逝の母の子ずっとあかんたれ
頼りたい夫が私に頼ります
小手先のあれこれいらん実みせて
僕の嘘気づかぬ妻は菩薩様

神戸市　奥田　宗光

こんなにも酷使していた腱鞘炎
この体どこのパーツも主役です
どうしたの声にならない電話口
平凡なやすらぎネギを刻む音
手の平でころころ笑う妻がいる
サキソフォン抱きしめられてからドラマ

ありがたい薬飲まずに生きている
災害に備え強める近所の輪
釜山旅ハングル読めず迷い道
年金にボーナス欲しい夏と冬
薄くても出かけるときは髪をとく

鳥取市　副井　裕

気配りで夫婦の絆紡いでる
でこぼこの夫婦で紡ぐ糸太い
くじけたら戻って行ける里がある
ズカズカと病魔勝手に来て困り
顔見れば帰る土産を母準備

鳥取市　田賀　八千代

振り返り歳取ったなと友の背
起きがけの決意食後は消えている
百均の種もきれいな花咲いた
爪に火を灯しながらの介護料
柱時計二人暮らしに活入れる

倉吉市　大羽　雄大

秋の夜　風の音さえ淋しいよ
夕暮れに歌を唄って帰ろうか
日暮れ時一番星がついてくる
ひとり身に秋の夜長はさみしいね
今日も雨いつになったら衣替え

倉吉市　堀　かずこ

失敗を重ね重ねて今がある
目に肥やし芸術作品見て回る
つなぐ手をはなし夫は旅立ちぬ
本当の悲しみ日ごと深くなる
帰り来て我が家の灯火ない独り

倉吉市　若松　由紀子

松茸と今年も店で顔合わせ
築地の寿司冥土みやげとしたかった
新米をおかずに新米を食べる
着れる服捨て時がよくわからない
台風の後押し欲しい徒競走

米子市　池田　美穂

まだ八十路負けん気見せる力瘤
へそくりが底つき婆も力なし
二人居が上と下にて日を過ごす
あてこすり言い放ちてはジョークとな
検診日仏に頼み手を合わせ

米子市　見山　温子

老春を惜しむ夕日は早く消え
雑草のまま老いてゆくそれもいい
老い二人白紙にレール敷いてきた
無い袖を振らせるプライドが苦い
いきなりの寒さ身体はうろたえる

鳥取県　西谷　悦子

鳥取県　橋本　整

ほどほどの欲張り生きる支えです
父を看て母を看た妻俺が看る
ありがとう夢を運んで来る柳誌
運命は黙って受けぬ立ち向う
幸せを運ぶ朝日に手を合わせ

松江市　中筋弘充

五十年曲がらず折れず夫婦箸
お互いが引き分けにする口喧嘩
特老の義母に婿が来たよと手を握る
百一歳の義母に知らせぬ従姉妹の死
逝った娘は歳を取らない誕生日

雲南市　永見安子

久しぶり涼しい風に仁王立ち
それぞれに凛として咲く曼珠沙華
ゆっくりと流れる雲に問いかけて
やめたとは言わず頑固に生きてみる
虫の声小さくなってうろこ雲

瀬戸内市　宮宅比佐恵

夢一つかなわぬままに朽ちてゆく
お返しに私の笑顔さし上げる
さりげない言葉にもらう温い風
寄席好きで免疫力をアップする
あきらめた夢は心にいつまでも

尾道市　日谷　寛

鋭角の恋に切絵の黒い私語
弾けてる恋に花火の赤い私語
さわやかな恋には秋の虹の私語
すばらしい恋には花の愛の私語
笑い合う恋には鰯雲の私語

竹原市　若年幸子

山肌の傷へ心配嵐来る
被災地へお囃子高らか活気付く
秋めいてシャンソン似合う風の街
足早の日暮を惜しむ石蕗の花
明日あたり柳誌届くと待つポスト

竹原市　土井輝恵

爺ちゃんを立ててまあるく今日も暮れ
家計簿と日記続けて四十年
惚けてない手違いでした苦笑い
余命とや計算をして家電買う
トランプの波が日本を襲うだろ

府中市　岸田　武

年金を弾いて出した義捐金
酷い夏だ被災地の土乾き切る
二年後の夏が気になる酷夏なり
古本屋と雑談椅子を出してくれ
イントロへ恥をかくかと立ち上がる

まだ妻がときどき放つ静電気
老人のペンがときどき吠えている
目的は自分探しの一人旅
人の道外した恋はしていない
もう恋はしないと決めた削除キー

徳島県　小畑定弘

笑うから顔が輝き艶が出る
商いの裏を見て来た招き猫
花びらをきっちり巻いて木槿落ち
投錨のあとの静けさ雲の峰
ほどほどに生きて余命を遊ばせる（九十三歳）

今治市　渡邊伊津志

一〇代の話へ一気クラス会
本人は不在煮詰まるいい話
巣立つ日の覚悟錦を飾りたい
深読みの男に少しある苦味
ハンカチを透かせば思い出が見える

大洲市　花岡順子

待っていてくれたと父の手を握る
越えるしかない悲しみを越えられぬ
本当にみんな乗り越えたのですか
本棚にずらりと並ぶ父の意志
わたくしの涙はわたくしが堪え

佐賀県　真島久美子

鈍色の風に吹かれてさんご草
一時のまどろみに似る秋日より
お互いに化け合っていた新婚期
地が動き続きの夢もはじけ飛ぶ
安らかな日々も地震で断ち切られ

札幌市　斉藤宏子

うっかりを軽くみていた歯のきしみ
ぐらぐらを放置していたすきま風
てにをはで行き先変わる一行詩
たられば を信じ愉快なティータイム
簡単に手招きされてばかりいる

黒石市　北山まみどり

十月も咲く朝顔に有り難う
岩木川津軽ダムから始発です
ノンアルのビールで酔って愚痴を聞く
禿げ仲間気軽に友にすぐなれる
断捨離の残り時間が急がせる

弘前市　髙森一呑

地雷空襲同時に受けたような夏
天災は忘れる前にやってくる
金木犀秋を嗅がせてさっと散る
死ぬまでに一度やりたいビールかけ
嫌なこといずれ忘れる便利脳

富士見市　中島通則

地図持たぬ異国の旅のような老い
飽きるほど二人暮しが続く幸
妻小言受け身で聞いている平和
晩学の森をスマホと旅をする
いろいろな老け方を見るクラス会

福井市　伊藤良一

八つ当りされた茶碗がいとおしい
テキパキと動きに無駄のないナース
ノーブラで過ごした夏の快適さ
3年で仮面剥がれる嫁姑
終えてから洗濯物の出る嘆き

豊橋市　西郷紀美代

主なき庭が自由を謳歌する
略字では君に真意が伝わらぬ
年金にシンプルライフ勧められ
終章は斯くありたしと散る枯葉
答弁をメモに任せてしたり顔

豊橋市　藤田千休

びっくりです「うち癌です」と嫁が言う
がん宣告絶対治すと信じきる
「行って来ます転ばないで」とオペ室へ
上げ膳据え膳シャワーもできる患者さん
このわたし頼ってくれる孫がいる

大阪市　柴本ばっは

今年の季節女心も顔負けだ
木陰の風母さん傍にいるような
寂しさと気楽さ置いて逝った夫
紺空にゆったりの雲あなたなの
老いの語らい耳に口寄せ膝を寄せ

大阪市　中島栄子

たゆたってそっと追い越す秋の風
古伊万里の壷に活けてる秋の花
思う事何でも叶う秋の宙
憧れを乗せて遥かへ白い雲
G1の馬本当に美しい

大阪市　森廣子

電線に搦め捕られた鰯雲
振り返り山波越えた足をほめ
少年に返る夫のあけび採り
友でなく男でもなく共白髪
身終いは皆それぞれの死生観

大阪市　横山里子

ステーキと寿司を一緒にバイキング
渋皮煮手間がかかって肩が凝る
朝食はラジオ体操済んでから
本堂はアルミサッシの出入口
冷凍の焼いもチンでほっかほか

池田市　太田省三

泉大津市　助川和美

包丁研ぐ妻の御馳走期待する
些かの貯金をくずしフルムーン
秋夜長夫の傍でリンゴ剥く
塾部活弁当だけが子と会話
駐車場買物ですか問うトンボ

貝塚市　吉道あかね

度忘れが昨日も今日も続いてる
歳のせいに手抜きの技もうまくなる
老いるとは痛い痒いが増えてくる
せっかくの皺だ私の年輪だ
国産の松茸匂いだけにする

門真市　坂本星雨

老いの悲劇無理をしすぎて戯画になる
免疫力もっと自分を信じよう
恐いのは地震台風預金ゼロ
台風は地球の怒りかもしれぬ
錦繡の焔へいのち緋に染まる

河内長野市　原熊知津子

人間は好き付き合いがややこしい
傷は浅いと片付けられた楽天家
フィルターを取りかえ景色塗りかえる
守れない約束をする秋の月
夜のブランコ中也と揺れるゆあゆよん

堺市　羽田野洋介

どうせなら自分にエール送りたい
気晴らしにつけたテレビは負け試合
返事する口と顔とがちぐはぐに
お返しを何にするかが正念場
関心を持ち過ぎるのも善し悪しだ

堺市　大和峯二

古希すぎたアンテナなれど感度良い
民意より官邸どおりさせる国
改憲へシフト強めて揃い踏み
民犠牲軍拡予算一人勝ち
女房のアンテナなぜか冴えている

四條畷市　西川ひろし

閉め切って台風待つ問塔誌読む
台風が夏を根こそぎ持って行き
貴台風相撲協会吹き荒れて
本棚が私の歴史語ってる
天災は忘れないようやってくる

豊中市　木藤こみつ

美人の湯で私美人になれました
いつまでも見送りをするいいお宿
逃亡者いるかもしれぬ道の駅
サングラスかけて洗濯物を干す
コロッケに醤油ソースでもめている

待ち合わせ賢く見える紀伊國屋
メニュー見て二の足を踏む土瓶蒸し
値上げされ更に竹輪の穴太る
スーパーのレジで慌てる空財布
昼下がり猫と交互に大あくび

豊中市　齋藤　奈津子

風と雨幾度も日本舐め尽す
火の匂野良着に残る夕日時
ユニホーム汗と涙と笑顔あり
山や川小さく見える里帰り
水電気ライフラインの有難さ

羽曳野市　磯本　洋一

縄のれんくぐりほっこり天国へ
ガラ携も卒業できずスマホ買う
この世とは仮の宿とは空しいね
八十路会青い山脈お開きに
竜宮は星のかなたにお引越し

枚方市　谷　英也

塾帰り家路を照らす星月夜
歳をとり欠席に〇増えていく
食べたいがいつも気になる血糖値
はやばやと御節料理のチラシくる
流れ星我が家の屋根を掠め落ち

箕面市　寺井柳童

長生きが怖い八十路の一人旅
嫌な事忘れ上手に生きのびる
充電をしろと朝から雨が降る
笑うしか他に武器ない老いである
しんどいと言いつつ遊びちゃんと行く

大阪府　小栢　こずえ

雲と居る変幻自在の時空間
前向きの友の電話が螺子を巻く
カナヅチも宇宙遊泳ならできる
嘘つきといわれる程の才も無く
借金にどっぷり浸った国に住み

大阪府　神野　千恵子

そよ風が木犀運ぶ神無月
木犀の匂い嗅ぎたく夕散歩
噛むごとに亡母の面影栗ご飯
秋天に似合う花あり曼殊沙華
秋天に昇る心地の朝ウォーク

神戸市　近藤　勝正

投句より心時めく句会場
四六時中磨きをかけて五七五
相合い傘ええ格好して濡らす肩
飲み放題これがラストともう一杯
年金でやってみたいな楽隠居

神戸市　斎藤　隆浩

神戸市　田本古鈴

プライドが役に立つ時立たぬ時
占いにもたれたい日の気の弱り
素足から秋の気配が登り来る
空気読む背中むずむずさせながら
過ぎし日はもう戻らぬと老いの愚痴

尼崎市　近兼敦子

ほどほどにあきらめ肩が軽くなり
うんうんと聞いてるフリが上手くなる
今どきの料理上手なモテ男子
下調べだけで楽しい旅気分
楽しそう母の話は何回も

尼崎市　清水久美子

身に余る栄誉を明日の糧にする
心地良いムード溢れる祝賀会
スケジュールぎっしり詰まる神無月
落ちるだけ落ちて出直すタイガース
年末はかんぽの宿へエスケープ

伊丹市　平井富夫

川柳は言いたい事のデパートだ
ハイペース被災地ばかり増えていく
言い訳のたびに深みにはまるウソ
募金箱ガツガツしない子に入れる
クラス会徐々に人数減って来た

篠山市　久保木剛

雨続き時間たっぷり句が出来ぬ
怒っても丹波弁ではなまぬるい
山門に笑った仁王見かけない
手が出ない見るだけ見とこ農機展
根っからの左党無いときおとなしい

三田市　大西重男

宿敵が我を残して先に逝く
脳みそも減る一方の土俵際
朝ドラに合わせて起きる無精者
根も葉もないうわさ話に踊らされ
何をしに来たかを忘れる家の中

三田市　東内美智子

ラジオしかなかった君の名は眞知子
同姓同名主治医とバスの運転手
大安仏滅暦頼れど知らぬ振り
包丁より口で受けてる熟し柿
神田川いつも待たせた君のこと

三田市　馬場貴美江

天災は忘れる間なくやってくる
孫娘主婦母となり頼もしい
山車担ぎここぞ踏ん張る男意地
リハビリで寄せ来る老いを振り払う
明日もまた感謝の日へと繋げたい

宝塚市　岸田万彩

コンビニが負んぶに抱っこする老後
夢数多動かぬ体引きずって
断捨離をせねば動けぬウサギ小屋
ボケてない証拠に作る五七五
天災も生々流転の一部分

奈良市　尾畑なを江

庭のすみ荒れてはいるが柿実る
仏壇に話しかけてる淋しがり
説明が足らず損してばかりいる
汗だくの掃除もすぐに元通り
核心をさらけ出さないずるい人

生駒市　児玉規雄

自画自賛全員野球の新内閣
築地から豊洲へ行けぬ鼠達
路地裏に残る昭和の佇まい
商魂は平成最後が売文句
新元号平和としたら如何です

和歌山市　北原昭枝

方言がつつんでくれた郷の風
おいしさと愛が詰まったお弁当
デコボコの道を歩いた靴思う
明日へと続く夕日に染まる空
足元が冷えて季節の風を知る

和歌山市　定松宏枝

長い髪切って未練とグッドバイ
飽きましたどのチャンネルもスキャンダル
停電で知恵と工夫を思い付く
老人の優待券をそっと出す
赤い靴履くと足腰しゃんとする

和歌山市　佐藤まき

台風禍空襲以来不安な夜
不眠不休の工事に愚痴は言えません
五日振りすべて電気で甦る
台風一過山鳩の声秋日和
にぎやかに今夜は虫の宴かも

和歌山市　福呂秀子

幸せに時時愚痴がベール掛け
丸さへと舵取りながら老い二人
指摘する夫の前で背を伸ばす
窓開けて虫の音拾い心澄む
正直な鏡に歳を諭される

和歌山県　森下よりこ

負けてなるものかと踏ん張っているひとり
今年も五枚お地蔵様の涎掛け
鬱の日も何事もなく過ぎてゆく
組み直す百歳までの予定表
楽しみは今宵はアガサクリスティー

計画を突如壊した暴風雨
夕焼けと虹創り出す雨あがり
雑学の泉楽しい立ちばなし
台風の痛み忘れて紅葉狩り

和歌山市　倉橋悦子

陽炎へ麦藁帽子自転車で
おだやかにつづくやさしい道をゆく
妹の顔みに長い列車旅
真夜中に鳴るベル嫌な予感する

和歌山市　鍋嶋澄子

衣更二三度してるあわて者
布団きてしみじみわかる秋の良さ
さんま漁朗報聞いてゆるむ頬
先見えて誰にも言葉柔らかく

和歌山市　福島一雄

合鍵でハートの扉開けれない
げんこつでヤル気スイッチ押してます
乗り越える壁が私を強くする
宝くじ頭の中に御殿建つ

和歌山市　松本雅子

天災毎に想定外がふえてゆく
台風の備え息子を呼んで来る
仮眠にも避難準備のカバン抱く
つまずきの段差に老いを知らされる

岩出市　村中悦男

日記にもあて字が目立つ年になり
ベッドには老眼と辞書待っている
一粒も残すな躾身にしみる
孫が来て日頃のおかず張りが出る

鳥取市　上山一平

赤トンボ元気を出せとツーと寄る
疑似餌では家族の平和保てない
鏡からモラルモラルと薄化粧
復興へまず心から笑顔出す

鳥取市　大前安子

飾るもの今日も明日も笑顔です
汗積んで進む善人嘘がない
言い負けて悔しさ残り貝になる
シナリオはここまで後は運しだい

倉吉市　岡﨑美知江

年金日財布ぬくぬく温泉だ
笑い上戸悲しい時もケセラセラ
野遊びの子等今はゲームで萌やしっ子
孫さとすやさしく出来る子になれと

倉吉市　田中紀美恵

ひと部屋に時計はふたつ置いている
若い人は若い若いと言いません
わたしには滅法強いものがない
出来る人何でも出来るすごいなあ

倉吉市　田中けいこ

台風の置き土産秋の真夏日
暗算が減法遅くなりました
あの世への見学ツアーないかしら
ごしごしと揉まれて厚い面の皮

倉吉市　宮田風露

少量を薬と飲みし湯飲み酒
大変だ太陽海に沈んだぜ
秋の雨作詞家見てて歌にする
旭日旗つけて入れぬ国がある

境港市　中井虎尾

老老介護共に覚悟の日は近し
長袖とぞろりと羽織る秋夜長
ああ八十路あの娘この娘も同じ齢
酒だけは毎晩美味い夜が来る

米子市　生田和之

モノクロ写真私を誰とたずねる子
十七回忌亡父が喜ぶ酒の宴
身構えた台風感謝肩すかし
台風一過稲刈り日和にぎわう田

米子市　伊塚美枝子

食後には薬飲んだか夫に聞く
抱っこして猫に悩みを打ちあける
日記帳生きた証に書いている
亡母からの褒美は長く生きる事

米子市　川本美津子

寺の鐘過疎も夕焼け野良終える
子育てに優しい嘘も言った親
三世代それでも昼間一人占め
ズカズカと遠慮知らない暑い夏

鳥取県　飯野菖子

応援をしたりされたり同い年
今日大事今が大事と深呼吸
お日様の力を借りて今日の意気
雨降りの夜間運転恐くなる

鳥取県　門村幸子

別れとはどんな形でも悲しいね
一人寝にネズミガリガリ恐いこと
息子のローン金があればと親心
年金の来る日待ってるぎりぎりだ

鳥取県　下田茂登子

少しでも誰かの役に立ちたいと
早合点気持が先に動きすぎ
遊びたく足腰痛み医者通い
台風が週末連続やって来た

鳥取県　橋谷静江

地球にも寿命があると気付かされ
やみくもに頭ごなしに怒るなよ
最高を連発すると価値下がる
事実ではあるが自慢は言いづらい

松江市　相見柳歩

アルバムは昔の私忘れない
悔しさの数だけ自分磨かれる
色々な人が居るから面白い
言葉かけ元気な声にススキ揺れ

松江市　山根邦代

思い出が左脳ゆるがし病癒え
思い出に支えられ今本調子
どん底を諭す人あり努力する
呼び出しの柝の音も高く大相撲

出雲市　黒目ひでお

ごつい手で触らないでよ桃の肌
ひと筋の涙指ワイパーで取る
礼服で紳士ぶっても丸い背な
老いという鬼バッサリと袈裟懸けに

島根県　原徳利

じわじわと脂肪ためこむ秋日和
ひとりごと自分が自分を許すため
サプリメント愛補填には不充分
倒れても朱の色あせぬ彼岸花

岡山市　大石洋子

体育の日よく歩いたと膝ほめる
パスワード無いと生きれぬ時代なり
ブラインド隠せるようで隠せない
女子会は食い気にはさみ墓話

玉野市　片岡富子

譲れない今日のわたしは石あたま
馬鹿になりあの約束を守ってる
現在地抵抗せずが吉と出る
貧乏揺すり集中力を振り落とす

岡山県　小野美那子

青空へ祭囃子も舞い上がる
虫のいい話は眼鏡拭いて聞く
年金日煙も旨い秋刀魚買う
新米のいのちの息吹噛み締める

岡山県　藤澤照代

秋風に背なを押されて山歩き
秋の風友の訃報を持って来る
洞爺湖の復興花火ドンと咲く
復興の一助になるか土産買う

広島市　田桑恵子

何もかも吐いたばかりに友離れ
追伸に少し孝行らしきこと
何事をするにも覚悟の要る後期
ことのほか女子会ネタはエンドレス

広島市　松尾信彦

ひたすらに奉仕の道を尾畠さん
七光り世襲で選ぶことはやめ
前進も後退もあるこの世です
神様から借りてる命大切に

尾道市　小畑宣之

三次市　伊藤寿子

孫の詩はオギャーと生まれてから詠まれ
生まれたらもう兄ちゃんが居た不思議
寝る前にパパはギューッと抱いてくれ
おやすみのママのキスは良い香り

山口市　青木隆子

マジシャンも敵わぬポッケドラえもん
手品でも見ているような爆食家
生きる意味みんなあるよね曼殊沙華
同窓会ほのかな思い甦る

山口市　中前幸子

野仏にときどき願いごとをする
海鳴りに聴く亡父の声亡母の声
カクテルの底でチェリーのセレナーデ
バイブルを伏せて女はしたたかに

松山市　郷田みや

雨の日は雨の話をすればいい
どう言えば優しく切れるかな電話
今日の気分うす紫のスニーカー
秋晴れへ園児の声が透き通る

高知市　三谷松太郎

種なしの実の食べよさが物足りず
出力を六割五分でいい余生
家内留守さあどうするか何もせず
やせ我慢エンマ様にはまだ内緒

福岡県　本田さくら

見上げればくじらが空を泳いでた
彼岸花わが世の春と咲き誇る
彼岸花黒蝶とまり話する
「若いね」にテレ笑いする私です

唐津市　岩﨑實

食がゆく心配ないよしばらくは
ひ孫抱きやっとひい爺になりました
静寂も一つのゆとりじっと待つ
事成就何をおいても自己次第

那覇市(故)　前川真

待つことに慣れた私の停留所
土砂降りの中で支度をしてる虹
靴紐を結び直してラストラン
子の帰省隣の猫もお出迎え

沖縄県　禱モモト

なんとなく続けた仕事天職に
年波の自己主張する人目立つ
宿り木で我が物顔の胡蝶蘭
食べ物に国境なしのカップ麺

沖縄県　宮すみれ

色紙の破れ障子に私流
パンプスのじゃり道さけて遠回り
断捨離のこんな物まで値がついた
笑い取る固い話と艶話

仙台市　月波与生

オカリナを吹くともだちだった君と
夜行バス眠れぬ人もみな寝顔
ときめきをカラーとセピア色に分け
再雇用どれほど嘘をついたろう

東京都　高岡弥生

運動会大変なのは裏方さん
久しぶり友に会う時厚化粧
夢の中プロポーズされ目が覚める
飼い主の側で満足寝そべって

横浜市　川島良子

月旅行ボクなら被災地義援金
人生は悲劇喜劇の積み重ね
難産で生まれた一句泡と消え
曖昧な言葉でこころ弄ぶ

横浜市　長島亜希子

財政赤字自分の財布じゃない気楽
偶にとる百点テスト見せに来る
言いたいこと言って稼げて良い仕事
どうせまた台風来そう窓拭かぬ

静岡市　渡辺芳子

親友が再入院する秋の暮れ
じゃー又ね握手する手に力入れ
善人は幸せ続くと限らない
おだやかでゆったりもったり生きたいな

名古屋市　冨田末男

こっそりと言われロダンになっている
心配はしない実力持っている
背伸びなどしないらしさが消えるから
CMのフレーズ学ぶものがある

名古屋市　山本三樹夫

酒を断ち抜け殻になり生きている
経費増え五輪マークが苦笑い
ポンコツ車それでも愛し二〇年
女子だけにハンディー抱かせ入試泣く

江南市　脇田雅美

冗談が素直な心怒らせる
天国に逝く時男化粧され
初対面箸の袋に名前書く
美味しいは食卓囲む大家族

豊橋市　小松くみ子

台風が風鈴の紐ふり切った
初めての柿台風耐えてほめてやる
早生ミカン遠い思い出遠足日
まつりへと調子を上げる笛太鼓

京都市　櫻﨑篤子

あの暑さけろりと今日は秋の雨
友も逝き我が葬式を決めておく
私の葬はセレマのおまかせに
ケータイの警報続く雨の量

遺す物無くてお詫びの遺言書
御都合のお悪い時は惚ける母
嫌な事頼む時だけ甘い声
根性で昭和一桁まだ生きる

舞鶴市　伊藤　恒

電子マネー昭和人間パスをする
金ないが時と悩みはドンとある
一杯のビールの味で元気知る
墓終い何と悲しい世の流れ

京都府　北野　クニオ

横綱がヒヤヒヤさせる大相撲
松茸は目立たぬ様に生きている
夏暑く冬も温いと予報出る
老いてこそ見えてくるものキット有る

大阪市　前川　善之

クラス会話題は糖と尿酸値
助け合う炊事洗濯片づけと
診察券その数だけの病持つ
若トラに今年もやはり裏切られ

大阪市　松田　聰

猛暑去り落ち着きみせる血糖値
萩咲いてだるさ体を抜けてゆく
二十五度切って書店へ足が向く
禁止無視して楽しげにバーベキュー

大阪市　樋口　眞

あやふやなままを楽しむ老いの恋
遅いながらすらすら歩くありがたさ
遅咲きが見事な花を夢みてる
神様の矢印通りきた八十路

池田市　上山　堅坊

退職後ポケットティッシュ足りません
これだけは口にしないぞ「今の子は」
水稼業風情をみせる三年目
三味線がひねた音色でにじり寄る

泉大津市　磯野　不二夫

御裾分け期待し過ぎて買い控え
ＬＩＮＥして女房の愚痴はぐんと減り
髭だけは病押しても生えてくる
役柄に心底惚れた樹木希林

河内長野市　渡邊　修

川柳で脳のしわふえ若返り
老いるとは胸キュンよりも胸シュンに
疲れない距離にあなたがいてほしい
懲りもせず美容にお金捨てている

堺市　楠井輝子

縦と横糸はどちらも切れている
猛暑から台風過ぎて秋よ来い
運休で初めてわかる有難さ
記念日の食事自分の好きな店

吹田市　岩口　のぞみ

高槻市　三谷白黒

老人の体操やって貯筋する
この齢で単位落した夢をみる
オプジーボ高くて庶民使えない
辞書出して調べる言葉何だっけ

豊中市　貝塚正子

どっしりと座る仏に投げる愚痴
土いじり浮世の憂さを花にする
何度目かの最後のタバコ口にする
浴室の石鹸ウナギに変身

寝屋川市　岡本勲

散りぎわは男の価値を決めるとき
留守じゃないすぐに立てないだけのこと
人情にどっぷりつかる里帰り
妙案は会議の席より縄ノレン

寝屋川市　川本信子

まだ増える後期高齢生きづらい
昔より果物段々甘くなる
外米がアジア料理に欠かせない
電車内サラリーマンがキイたたく

枚方市　坂本ミヨノ

園芸店美女の笑顔につい買った
朝焼けに見入る片手にほうき持ち
萎みゆく花に包まれる種取る
老人席座りたくないやせがまん

八尾市　田邊浩三

大根が二つに切られ売られてた
必要だテレビの字幕高齢者
海老頭美味しいところが入れ歯では
たこ焼のタコだけ残すこの入れ歯

八尾市　前田紀雄

喜寿越えて百歳時代未だ子ども
介護ならロボットよりもオプジーボ
プレバトの添削聞いて憂さ晴らす
閻魔から空席有るとオファー来る

八尾市　山川寧

孫の挨拶おばあちゃんスマホ貸して
台風が去ってそよ風頬撫ぜる
オクラ好き粘り強さが似てるから
夜を徹し英単を引く喜寿の興

大阪府　髙木道子

美しく咲くコスモスの有るが儘
口角を上げて対座すお仏壇
神様は出雲の国でハイタッチ
台風禍見下ろしている鰯雲

大阪府　中内孚彦

政治とはつまり格差を生む仕組み
冷戦下首脳たち利を貪った
路地裏のボヤ消防車二十台
返す気ないロシアに無駄な外遊だ

手作りを誉め合う老いの生き上手
八十路坂余生楽しむ詩句の杖
茄子光る紺あざやかな雨上がり
こおろぎの髭の先までふるえ鳴き

大阪府　畑中節子

妻任せ任せっきりの旅でした
尻餅をついて高みを知る頓馬
詠み溜めた川柳に重くなるスマホ
任せれば良いのに急いてドジ重ね

神戸市　大頭としお

少しだけ辛い個性が煙たがれ
個性です自慢のつもりが皆はなれ
寒い夜鍋に熱燗決めてます
八十路難所医者妻がいう酒やめな

神戸市　輿水弘

一日の無事を仏と祝う杯
賞味期限まだあるうちに羽ばたこう
ブランドより無印わたしの性に合う
些細な事飲み込むような空の青

神戸市　玄番美恵子

富士見ると僕はやっぱり日本人
妹を見舞った帰り酔い進む
新幹線窓の景色も急いでる
ＡＩに気配りだけは勝っている

神戸市　敏森廣光

嬉しい日ペンがわくわくはずみだす
あこがれの若さ漲る甲子園
ガムシャラに生きてゆとりの女坂
さみしさにうっかりのった泥の舟

神戸市　山根弘華

ラストスパート女のコース駆け抜ける
愛されて尊敬されて出しゃばらず
同郷とわかり気前の良い女将
胸貸すと叩いて見せる軽い音

神戸市　米田利惠子

種を蒔きゆるりと土と話する
リュウグウでほいほい跳ねる探査ロボ
四コマへ続く明日へ夢を盛り
カレーかなピクリと鼻がよく動く

伊丹市　延寿庵野鶴

住処も餌も奪われた猪下りる里
人よりも猪が上手に芋を掘る
猪を撃つ人も高齢山歩き
猪退治する桃太郎待つ明日

加西市　山端なつみ

旅に出るポスト溢れて留守ばれる
久々の雨到来に草背伸び
鼻歌で歩けば犬もリズム足
新聞は文芸欄から見入る朝

篠山市　澤良子

恐い者親父一人が失格し
ジョギングの一歩でつまずき医者通い
八十路すぎどの腱もみな役立たず
この歳まで賞罰なしという自慢

篠山市　長谷川　善　輔

熱いお茶おいしくなった秋の風
希林さん希な人生よくぞ生き
次々と自然の暴力もうごめん
困ること何もないのに老い不安

篠山市　藤　井　美智子

古稀越えて歩幅縮める下り坂
電車内席譲られる歳になる
肩書きがとれて気楽な歳になり
長蛇の列並んでやっと食べる店

三田市　九　村　義　徳

シニアでも負けぬパワーと意地がある
ボディースーツ猛暑に負けず痩せ我慢
我慢耐え戻って来いよブーメラン
還暦も皺を伸ばしに韓国へ

三田市　幸　田　厚　子

散歩道金木犀に深呼吸
名月を窓越しに見る夜寒かな
満天の星にも愉快な神話あり
日暮時乙女チックに物悲し

三田市　住　吉　美和子

介護するされる身になる思いやり
二人の娘妻が味方だオレ一人
年金日後何日と節約だ
ひとり言ばあばなにだと孫が聞く

三田市　辻　開　子

五十年夫婦はやがて同志なり
いい人ほど早く逝くのはほんとうだ
酒だけが友達なんて酷すぎる
アホになってもバカにはなるな御老人

宝塚市　太　田　としお

叩き売り品より欲しいまわる舌
のんびりと風呂に浸って浪花節
エアメール待つ事楽しポスト前
水溜り遠慮しないで車行く

西宮市　髙　橋　千賀子

今日までをみなシュレッダーかけてます
良く育ててくれたと稲穂頭たれ
寒いのか雲の服着る夜半の月
地球はしるインターネットいう魔物

奈良県　中　堀　優

言い訳にぐっと詰って目が泳ぐ
一瞬の生命を競う北の花
幼い日一気に戻る盆の歌
故郷の土の匂いが夢に満ち

（前月分）札幌市　斉　藤　宏　子

（前月分）大阪市　柴本ばっは

ご機嫌よろしくお別れしますお墓とも
断捨離は情けかけてはできません
懐刀出てきた祖母の古箪笥
隠しごと入れて忘れていた箪笥

（前月分）倉吉市　田中けいこ

観光バス降りてくるのは高齢者
確実に秋がきている抜け毛ふえ
被災地を思うと辛いなど言えぬ
らしい話ほんとうのこと分からない

第15回記念　川柳『信濃川』新春誌上大会

＊新作２句・定型のリズムでお願いします。

課　題　「オノマトペ」
擬音語・擬態語・その他

選　者　１６名共選
相田　柳峰・北村あじさい・坂本　加代
永見　心咲・倉益　一瑤・瀬戸れい子
吉道航太郎・千島　鉄男　他

締　切　**1月31日　消印有効**

投句料　１０００円
（野口英世さんか郵便小為替）

賞　１位　魚沼産コシヒカリ 10キロ 他

投句先　〒９４０－２０４２
長岡市宮本町３丁目２４３３
相田　柳峰宛

第39回　ときせん賞　作品募集

応募締切　**2019年1月25日（金）**

選　者　大野　風柳　森中惠美子　小島　蘭幸
中居　杏二　德永　政二　矢沢　和女

作　品　雑詠　2句（未発表作品）

選句方法　無記名清記の上、選句1句毎にその合計点
（平抜き2点、五客3点、三才4点）

発　表　時の川柳誌　２０１９年４月号誌上
（２０１９年５月１９日（日）時の川柳交歓川柳大会で表彰）

応募方法　応募用紙または便箋に作品2句

応募料　１０００円（定額小為替等）切手不可

応募先　〒６７５－００１９
加古川市野口町水足1160　岡田　篤宛

主　催　**時の川柳社**

第57回　井笠川柳会誌上大会
「蘖」ひこばえ

課題と選者（各題２句）
「筆（ふで・ひつ）」
岡田　篤・福本　清美・村上　氷筆
「玉（たま・ぎょく）」
野村　賢悟・小林　生子・西出　楓楽

応募要領
便箋または所定の用紙に各題２句（計４句）を列記し郵便番号・住所・氏名・電話番号・所属柳社を明記し応募料と共にご送付ください。
未発表句に限る。複数投句は不可。

投句料　1,000円（定額小為替または現金書留）
応募者全員に発表誌（31年2月発行予定）を送付

締　切　**30年12月29日（土）消印有効**

投句先　〒714-0081 岡山県笠岡市笠岡2289
井笠川柳会　TEL・Fax 0865-62-6200

賞　品　各課題毎に、天位獲得者3名のうちから1名に句碑を贈呈します。

主　催　**井笠川柳会**

橘高薫風句抄

（『橘高薫風川柳句集』平成十三年発刊）

ペディキュアの足を仏足頂礼す
遍路杖納めセールスマンの足
夢に見る父は父よりやさしかり
耳垢と耳学問をわびしがる
日の高さ悪事悪事とならぬなり
へらへらと泳ぐ魚に似た汚職
薬玉の中の鳩なり受験の子
臍の緒がまた生えてくる子の受験
端然と墓のようなる書家の墨
昼の月瓢湖に映る力なし
花つけて白鳥の首シクラメン
聞香の首かしげいる白鳥か
心経の無の字の多き金泥なり
読む限り末法の世も面白し
草花に水をやる世は渇したり
落選す百万言を費して
雲は挽歌雲は新生恩師の忌
十年の歳月が澄む竹の節
蝶がいて石に老若男女あり
朝刊の音のさらりと今日も晴
竜宮もヘドロ藻泥となりぬべし
牛頭馬頭の雲は動かず原爆忌
禊する蓮花の菓子を口にして
失恋の四十九日となりけるよ
花言葉忘恩もある不死もある

隠岐行

雨意将に至らんとする摩天崖

長崎行　三句

長崎の霞はまるし湾円く
磔像へつるべ落しに夕日落つ
小便を風に散らしぬ大瀬崎
目に余るものにロビーの登山靴
清しさは秋に衰え冬に死し
西成のシャツステテコは王衣に似
三日月があんなに光るのも勇気
トンネルが遠くに見えね秋の恋

英語 de Senryu㉞

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim Horne

その日ぐらしも　軒に雀が　こぼるるよ

living from hand to mouth,
sparrows fill
under the eaves

心にもない約束が　明日となる

not my real intention,
that promise
coming tomorrow

---

living from hand to mouth その日ぐらし　*sparrow* 雀　*fill* 満ちる　*under* ～の下
eaves 軒　*real* 真実の　*intention* 意思　*promise* 約束　*come* 来る　*tomorrow* 明日

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句㉔　日本から発信

永瀬十悟 (*Togo Nagase*)　東日本大震災を詠む『三日月湖』

この時期、鳥の渡りをよく見ます。Vの字に形づくって北西の方角に飛んでいきます。行先はどこかしらと思いつつ眺めています。永瀬十悟さんの句集『三日月湖』(コールサック 2018.9.12) の中に、「逢ひに行く全村避難の地の桜」があります。帰るに帰れない場所に咲く村の桜。福島で生まれ育ち、今も暮す永瀬さんによると「原発事故により避難を余儀なくされた地は、神聖な場所のように静まり返っていた」とあります。当たり前のように帰る場所を持つ鳥の方が、人間より自然で幸せな暮しです。永瀬さんは「ふくしま」五十句で、第57回角川俳句賞を2010年に受賞しました。『三日月湖』よりいくつか作品を紹介します。英訳は吉村の試訳です。

逢ひに行く全村避難の地の桜

*going to see /a local cherry tree/ the place where all villagers evacuate from the accident by *APP*　　** APP: atomic power plant* 原子力発電所

廃屋となりたる牛舎燕来る

swallows are coming/ to the cowhouse/ still deserted

鴨引くや十万年は三日月湖

wild ducks never appear / the lake of Mikazuki/ for a hundred thousand years

誹風柳多留一二篇研究 66

細井龍夫・伊吹和男
山田昭夫・石川道子
小栗清吾
清　博美

556 **入水しよふよりハ傘張る方がよし**

細井　平清盛の第二子、宗盛は五条坂の傘屋で生まれた子だ、という伝説に基づく。源平合戦は壇之浦で敗れ、入水したが死にきれず、捕らえられて結末は近江の篠原で斬られた。傘屋の息子のままで傘張りをしていた方がよかったのに、とは要らぬ御世話。

その元をたつねてみれハ傘屋　宝九桜
傘屋取りあげばゝの口をとめ　安五桜1
傘はりの子をぶち破る高足駄　一五四16

清　賛。

557 **五十ぞう江戸をくらつたやつとにげ**

細井　江戸三田、本郷、谷中など各所に出没した玉代一切五十文という私娼の五十歳が、罪を犯して江戸払いになった奴と手と手を取って逃避行とはお似合いだ。江戸払いとは、品川、千住、板橋、四谷大木戸、隅田川以内に住んではいけないという軽い方の追放刑で、その上は江戸十里四方払いで、日本橋から片道五里四方を構われた。

さああそびなさいとせつく五十ぞう　明五松5
五十ぞう色に手拭買ッてやり　六11

清　賛。

558 **びやう打をすへて前後へはつとのき**

細井　鋲打駕篭を据えると両脇を警護していた者が前後にパッと退いて平伏し、女主人のお出ましを待つ、というのだが、女乗物の最上は惣黒漆に金蒔絵を施したもので、鋲打は数等下級になるものだから、駕篭の主は万石以下の旗本の室か、お姫様か、それとも側室か。場面も野掛け、花見、宿下り等、考えられる。

鋲打の供ハもゝ立チ草に取り　明六桜2
ひやう打へ筆ひろい込ムうらゝかさ　天七10 5
鋲打で来タと御ふくろころげ込ミ　明四桜1

伊吹　賛。江戸川柳の約束ごとで鋲打は立派な乗物。

清　賛。

559 **初の字が五百鰹が五百なり**

細井　走りのものは三両くらいしたらしい鰹は出始めから暫くすると急速に値段が下がる魚だが、「初」の字が付く内はとても高価で、肴屋が売り歩くようになっても一匹一分もした。その半分の五百文は「初」の字だろう。初物食いは七十五日生き延びるとかの俗信で江戸の人たちは競って食しようとした。京坂では無かったことらしい。

初物て直も高砂の叺の魚　七〇11

高うハござりますけれども初鰹　笆一15
はつかほぶたひハとばぬところなり
天八宮1

山田　賛。走りの鰹など美味でもないのに、さしずめブランド物と同じ理屈。

清　賛。

560　**わけをいふ程ついて来る四ツ手駕**

細井　四つ手の駕篭舁は、羽織を着た人を見かけると、吉原へ行くのではないとか、行くけれど素見だけだとか、一分しか持っていないとか懐具合迄説明して断らない限り、何時までもしつこく付いてきて、なんのかんのと言って勧誘する。凄まじい客引き攻勢だ。

御のたられなさるものかと四ツ手いひ
一五13

す壱歩もしらす駕かきついて来ル　六19

すけんとハ神ならぬ身のかごいかご
一九20

伊吹　賛。言えば言うほど反論してくる。

山田　賛。商売は断られた時から始まる。

清　賛。

561　**口をかき入レにたいこハ壱歩かり**

細井　太鼓持ちは、口八丁手八丁で遊客に取り入ってお座敷を盛り上げるムード・メーカーである。その達者な口で客からまんまと一分借金をした、というのだが、おそらく返金の見込みも積もりもない。

たいことハ是口をよくたゝくの義
宝13仁3

たいこもち弁にまかせてかりたふし　拾七2

山田　賛。書入れは「②抵当。かた」(「広」)。

小栗　賛。山田兄の言われるとおり、書入れは「抵当」。本来は抵当が必要なところを、得意の弁舌でごまかして借金したことをかく表現したものだろう。

清　同。

562　**あの男この男とて古くなり**

細井　あれこれと男選びをしているうちに、箱入娘に臺が立ってしまった。これ一重に、迷いに迷って決断が遅れた親の責任だ。

智ゑらみする内柳臼になり
両袖がおもつたいほどゑん遠し　拾二23
玉23

伊吹　賛。えり好みする本人も悪い。

清　賛。本人が悪い。

563　**くさめするのがお妾の持病也**

細井　他人に噂されたり悪口を言われたりするとくしゃみが出るという俗信があるので、お妾さんにのべつ幕なしにくしゃみの出る奇病があっも何の不思議もない。お妾さんは方々で絶えず噂の種になっているから。

お妾ハ前からゆびのさしてなし　七一18

伊吹　賛。非難の的。

清　賛。

564　**後の月又候かやう〳〵なり**

細井　吉原の紋日、八月十五夜だけではもの足りず、後の月（九月十三夜）にも息子が出掛けて行き、大散財をしたので、これではたまらぬと親戚一同に寄って貰い、「実はかくかくしかじかの義にて」と親父が口上を述べて、前後策の相談をしているところ。

後の月さいおうの義とおやぢいひ　九12

そらを二度見たが息子の落度也　傍一12

山田　賛。「又候」だから勘当の可否であろう。これが最初なら、

わび言て初手にハ月のなりにすみ
安二松2

清　賛。

愛染帖

新家　完司　選

（投句277名）

ペンだけで私を見せる難しさ　米子市　池田　美穂

（評）正直なペンは作者の性格や暮らしぶりまで表すが、平凡を脱して独自性を持たせるのは至難。生涯の目標として不足なし。

弁護士が弁護している悪い人　松原市　森松まつお

（評）進んで引き受けたのではない国選弁護人などの場合、「何の因果でこんな人の弁護を」と不愉快に思っている場合もあるだろう。

胸少しふくらむ孫と露天風呂　香芝市　山下　純子

（評）「ばあちゃ～ん！」と甘えてくれるのは幼児のときのまま。まだまだ子供だと思っていたが、身体はふっくら思春期のきざし。

寝て待っているがなんにも届かない　大洲市　中居　善信

（評）「果報は寝て待て」とか「待てば海路の日和あり」と言うので待っているのだが…。届くのは果報ではなく訃報ばかりである。

正直と真摯を辞書で確かめる　鳥取市　福西　茶子

（評）どちらの意味も理解しているつもりだが、苦しい答弁の中で遣われると「別の意味があるの？」「比喩か？」と思ってしまう。

日記には書けない事は忘れない　府中市　岸田　武

（評）日記は他人に見せるものではないが、心の奥底や重大な秘密は書けない。紙ではなく心に刻まれたことは忘れることはない。

スクワットできて正座ができぬ膝　神戸市　冨永　恭子

（評）スクワットで膝を曲げるのは90度まで。だが、正座ではキチンと折り畳まなければならない。固くなってきた身体には拷問！

通帳はわたし死んでのお楽しみ　羽曳野市　徳山みつこ

（評）そう、通帳も遺言状も極秘。「優しくしてくれないと遺産分けから外す」と脅かしてやろう。たとえ残額ゼロであっても…。

杉玉が揺れて試飲のできる店　羽曳野市　中川ひろ介

（評）軒先に杉玉を吊るしている造り酒屋。酒蔵を見学させていただいた後は待ち兼ねた試飲。だが「おかわり！」は自重しよう。

酔わせたらおもろい扉開けまっせ　大阪市　岩崎　玲子

（評）酒癖もいろいろ。「おもろい扉」だけだったら喜んで付き合うが、その後に「恐い扉」を開ける人が稀にいるから油断できない。

堺　市　村上　玄也

好きなように負けたらえでタイガース　米子市　生田　和之

最下位でもいいさ巨人に勝つならば　尼崎市　清水久美子

トラキチは日本シリーズなど観ない　鳥取市　田中　天翔

チコちゃんに叱られそうだボーと生き　岩国市　上村　夢香

チコちゃんは本気わたしに喝入れる　神戸市　山根　弘華

もくもくと生きて卒寿もあと少し　寝屋川市　冨山ルイ子

卒寿過ぎれば老人だと思える　米子市　竹村紀の治

目出度いかそうでもないか九十歳　大阪市　榎本日の出

卒寿でもまだまだ逢えるいい仲間　神戸市　能勢　利子

年金日ステーキ所望する白寿　尼崎市　市坪　武臣

職退いてのらりくらりで元気です　倉吉市　大羽　雄大

ごろごろとできる家族のありがたさ　岡山県　藤澤　照代

明日のため楽しみぶらり下げて寝る

黒石市　北山まみどり
ふぞろいが勢ぞろいして丸くなる

青森県(故)松山　芳生
激論が続いて多面体になる

和歌山市　古久保和子
洗いざらい吐いて常温に戻す

岡山市　永見　心咲
大根の首と尻尾を見比べる

河内長野市　原熊知津子
生き様という生き方はしていない

沖縄県　森山　文切
小さくなった公園に立っている

青森市　守田　啓子
ドモホルンリンクル倫理上禁止

仙台市　月波　与生
しめきりにちょこんととまる赤とんぼ

大阪市　谷口　義
羽衣の下は金木犀である

米子市　後藤　宏之
流れない星にも願い言っておく

櫃原市　居谷真理子
矢でも鉄砲でもジョッキでも持って来い

池田市　太田　省三
ほろほろと八十になりましてんと言う

鳥取市　前田　楓花
筋肉も落ちた秋刀魚を裏返す

神戸市　細川　花門
寿司ネタが洋風・和風・中華風

弘前市　高瀬　霜石
どの星に行くか今から決めておく

富田林市　中村　恵
特別の日だから父のハーモニカ

大阪市　江島谷勝弘
生きてケージ死んでパックの鶏の肉

河内長野市　辻村　ヒロ
ひらがなで丁寧に書く「うらみます」

佐賀県　真島久美子
虹も出た買ってみようかクジ一つ

大阪市　小野　雅美
ガラポンに減法強い妻がいる

那覇市(故)前川　真
合鍵だロックだスマホの狂宴

鳥取県　竹信　照彦
台風だ地震だ大坂なおみだ

熊本市　杉野　羅天
6Bで君が好きだと書いてある

大阪市　栃尾　奏子
果たし状みたいね君のラブレター

三原市　笹重　耕三
胸やけの酷い失恋もう慣れた

笠岡市　藤井　智史
結婚は夢夢夢の上の夢

長岡京市　山田　葉子
鈍行で持病との旅まだ続く

奈良市　山本　昌代
性格は合わず習慣だけ一緒

伊丹市　延寿庵野鶴
水溜まりゆるり転がる昼の月

奈良県　安福　和夫
輪ゴムさん円周率が言えますか

奈良市　山本　昌代
アップルの右側かじったのはなぜ

大阪市　高杉　力
本籍は母のお腹と書いておく

貝塚市　石田ひろ子
ボス猿もやがて追われる時が来る

三田市　丹羽　美恵
決断のゆるい男を駅で待つ

にやにやとしたらセクハラだと言われ
どこからがセクハラ　どこまでがジョーク
女です自信あっても脱ぎません
袋とじ開けてビックリつまんない
かたつむりどんな邪魔にも負けません
食欲を落とすわけにはいかぬ通夜
向日葵を注文父のお葬式
カジュアルがだらけて見える昭和人
本庶さん付和雷同に喝入れる
突っ張ってみても縮んでいる歩幅
いい目覚めお猪口2杯のプレゼント
部長より下の肩書ない会社
シャンプーは要らぬオヤジの風呂セット
この日だけ三食一緒年金日
ぴったりのTシャツ着ればメタボばれ
主婦業のしあわせを知る歳となる
無人駅月もお客の顔で待つ

紀の川市　宇野　幹子
恋人のように柳誌を抱きしめる

八尾市　髙杉　千歩
作句してます読めない字書いてます

奈良県　長谷川崇明
改竄の竄は逃げ込む意味という

鳥取県　斉尾くにこ
言葉って毎日使うのに不慣れ

三田市　多田　雅尚
重箱の隅を突っ突く句も出来ず

桜井市　安土　理恵
川柳を止めねば終活手につかず

和歌山市　松本　雅子
五七五で調律をするピアノ

枚方市　山口弘委智
柳会の選者に挑む知者数多

大阪市　樋口　眞
元気ない呼名が多く物足りず

三田市　上田ひとみ
去年よりたしかにひとつ老けた顔

河内長野市　山岡冨美子
皺に染み免罪符には事欠かず

東京都　川本真理子
歳なりにちゃんと修復済みである

倉吉市　牧野　芳光
こんな血も藪蚊が吸いに来てくれる

和歌山市　北原　昭枝
秋風に誘われ飛んでゆくお金

岡山県　山縣のぶ子
イヤホンのリードにすがる脳回路

松江市　石橋　芳山
もう少し臭えよ人間のお前

防府市　坂本　加代
地に足を心は空を駆けめぐる

神戸市　山口　光久
ブレーキの利かない舌が事故起こす

香芝市　大内　朝子
思うても言ってはならぬ事がある

京都市　清水　英旺
口は味方足はあっちに向いている

米子市　後藤美恵子
老いた耳疎まれようと聞き返す

藤井寺市　鈴木いさお
家族には内緒で認知症検査

箕面市　中山　春代
終活のストレス百均で遊ぶ

羽曳野市　宇都宮ちづる
百均でひとつだけ買う勇気ない

京都市　都倉　求芽
台風接近なにも慌てるものがない

大阪市　平井美智子
効能を疑われてる置き薬

豊中市　松尾美智代
内緒で掛けた保険が満期フルムーン

豊中市　水野　黒兎
パック旅行必ず店へ拉致される

堺市　奥　時雄
今もって土日を少し待つこころ

鳥取市　田賀八千代
新しい景色見たくて買うヒール

東大阪市　佐々木満作
無理をせぬスローライフの青写真

大阪市　古今堂蕉子
飴あげて饅頭もらう今日は丸

広島市　松尾　信彦
ことの外貧乏だけは慣れている

豊中市　池田　純子
食べっぷり良いから婿に決めました

宝塚市　太田としお
ありがとう警察官に自衛隊

大阪市　森田　遊子
女の子と呼ばれているクラス会

松江市　中筋　弘充
注連縄で浮気もできぬ夫婦岩

松山市　郷田　みや
難波駅で大阪のオバチャンになる

松山市　柳田かおる
大阪のおばちゃんおしゃべりも多彩

神戸市　上田　和宏
喜怒哀楽に加えるならば痛だろう

奈良市　大久保眞澄
いつ死んでもは長生きのおまじない

池田市　上山　堅坊
ブレーキもアクセルもない竹トンボ

大阪市　森　廣子
知り合いの顔で芽を出す彼岸花

三田市　福田　好文
墓参りせよと急かせる彼岸花

河内長野市　渡邊　修
帰省した健気な孫と般若経

岩出市　村中　悦男
人間も動物であるニュース増え

大阪市　笠嶋　惠美
死ぬ覚悟教えてくれた樹木希林

八尾市　前田　紀雄
オブジーボより論吉の方が僕に効く

塩竈市　木田比呂朗
二千円札のお釣りをすかし見る

和歌山市　上田　紀子
熟れすぎて泣き出しそうになった柿

羽曳野市　吉村久仁雄
思うのは命以上に今日のメシ

松江市　栂瀬みちを
健康に良い食べ物は旨くない

藤井寺市　太田扶美代
レトルトの方が美味いと思います

富士見市　中島　通則
南無阿弥陀仏睨めっこする兜焼き

豊中市　木藤こみつ
脂汗かきかき習うフランス語

河内長野市　藤塚　克三
松茸が今年我が家で食えるかも

宝塚市　丸山　孔一
億積んで月の背中を見ると言う

鳥取市　奥田　由美
ケンカ後に脆い絆が試される

大阪市　平賀　国和
飛鳥時代にタイムスリップ法隆寺

大阪市　柴本ばっは
ちょっと来いそれで掴んだ今の幸

松山市　栗田　忠士
一言も交わさなくても済む夫婦

鳥取市　倉益　一瑤
思案している間に逃げた儲け口

三田市　堀　正和
ラブコール病院からはやって来る

大阪市　宇都満知子
集合写真豆粒ほどの私どこ

鳥取市　岸本　宏章
ご先祖に内緒で売った山の畑

岡山市　大石　洋子
実験用のヤギ放たれて人懐こい

堺　市　澤井　敏治
出来ちゃったよりはおしゃれに授かり婚

奈良県　渡辺　富子
地味はダメ派手すぎもダメ何着よう

鳥取市　谷口回春子
台風銀座昔九州今全土

岡山県　小野美那子
揺らし方心得てるか秋の風

弘前市　高森　一呑
旨くない胃カメラ飲んで呑める酒

大阪市　奥村　五月
アホになる薬になると言うお酒

尼崎市　永田　紀惠
鰯雲誘う早目の縄のれん

三原市　鴨田　昭紀
百薬の長で現実逃避する

豊橋市　藤田　千休
生ビール汗と尿とに仕分けされ

福井市　伊藤　良一
父を越え大吟醸の祝い酒

富田林市　山野　寿之
膝寄せて目線合わせて酒を酌む

高槻市　松岡　篤
袴を脱いで話せる立ち飲み屋

堺　市　内藤　憲彦
熱燗でまあまあまあを飲まされる

岡山市　丹下　凱夫
コップ酒だけでデッカクなる世間

大阪市　藤田　武人
晩酌は覚えているが飯不明

高槻市　片山かずお
諸般の事情あって今では発泡酒

豊中市　貝塚　正子
今はもう五勺の酒で良く眠る

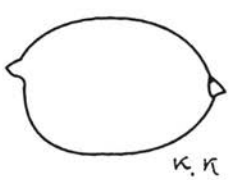
米子市　成田　雨奇
最期まで酒呑んでたと云われたい

共選欄

檸檬坊

（薫風書、カットとも）

（投句　343名）



「ジレンマ」　川端一歩　選

ジレンマを楽しんでいる僕がいる　尼崎市　藤井　宏造
ジレンマに陥らせない好奇心　加西市　山端なつみ
人道援助ミサイルに化けるらし　和歌山市　佐藤　まき
ロボットに負けそう首がかかってる　犬山市　金子美千代
告発か保身で揺れる人の道　河内長野市　中島　一彌
ジレンマを常に背負った原子力　高槻市　松岡　篤
再稼働電気は来るが核も来る　明石市　糀谷　和郎
減りません国の借金いつまでも　和歌山市　福島　一雄
バック転すればジレンマ飛んでゆき　奈良県　中原比呂志
犬猿の仲の2人と仲が良い　尼崎市　清水久美子
国境の島々に胃が痛くなり　堺　市　奥　時雄
飲み込んだ嘘に鼓動が鳴り響く　富田林市　関　よしみ
ジレンマの若い芽を摘む町工場　貝塚市　石田ひろ子
またもめるモッタイナイと断捨離が　奈良県　安福　和夫
トンカツを食いたしMの服着たし　河内長野市　木見谷孝代

「ジレンマ」　山岡冨美子　選

百億人耐えるか地球のジレンマ　大阪市　古今堂蕉子
まあまあと割って入って板挟み　堺　市　村上　玄也
効能を疑いながらまた縋る　岡山市　永見　心咲
寒暖についていけないキリギリス　黒石市　北山まみどり
なで肩にまだジレンマが溜まってる　大阪市　高杉　力
もたもたとどっちつかずの弱い腰　奈良市　山本　昌代
ジレンマに落ち残照の中ひとり　高槻市　島田千鶴子
ジレンマへ河馬の欠伸を見て帰る　和歌山市　古久保和子
ジレンマの愛を通した樹木希林　弘前市　福士　慕情
ジレンマを楽しんでいる僕がいる　尼崎市　藤井　宏造
迷い続けてメビウスの輪に入る　倉吉市　牧野　芳光
早く行けゆっくり走れ親心　倉吉市　大羽　雄大
役どころ不足で自負が悶えている　尼崎市　清水久美子
やりたいのに出来ない理由すぐ浮かぶ　長岡京市　山田　葉子
パパとママどちらが好きと子に迫る　三田市　九村　義徳

ジレンマに落ちてはあえぐ自営業　三次市　伊藤　寿子
捨てようか痩せたら着れるワンピース　香芝市　山下　純子
金持ちとハンサムどちら選ぶべき　三田市　谷口　修平
改憲はしたいし支持は上げたいし　大阪市　近藤　正
核禁止条約に手を上げられず　札幌市　小沢　淳
大空へ放つジレンマ柿熟れる　大阪市　津守　柳伸
古希の恋ジレンマに夢こわされる　西脇市　七反田順子
ジレンマに乗せられてやる仲直り　鳥取市　土橋　螢
切り下げと値上げがつづくまんどころ　大阪市　江島谷勝弘
ジレンマがないジレンマに老いひとり　大阪市　髙杉　千歩
見向いてもくれない人に恋してる　東大阪市　北村　賢子
長生きもしたいが医者は大嫌い　塩竈市　木田比呂朗
ジレンマがあってこの世はパラダイス　弘前市　稲見　則彦
ジレンマから脱皮アナタのひと言が　横浜市　川島　良子
博愛の心ジレンマには遠い　香芝市　大内　朝子
ジレンマの愛を通した樹木希林　弘前市　福士　慕情
男には好かれ女に嫌われる　橿原市　居谷真理子
ゴミだらけの富士で六根清浄　宝塚市　岸田　万彩
年寄りと思え思うな我ながら　大阪市　原田すみ子
どっちにも味方をしたい嫁姑　富田林市　山野　寿之
身を護る酷暑気になる電気代　和歌山市　土屋起世子
ジレンマにならないように即決める　玉野市　片岡　富子
愛は我が儘昨日キライで今日はスキ　大阪市　宇都満知子

結婚をするかしないか　できないか　和歌山市　松本　雅子
嫁姑諍い旗を上げられず　札幌市　小沢　淳
少しだけ気付いてほしい板ばさみ　八尾市　宮西　弥生
女子会かチコちゃん見るか試される　岩国市　上村　夢香
ケーキ屋の前でたこ焼き売っている　三田市　北野　哲男
肯定も否定もできず宙に浮く　神戸市　山口　光久
廃炉なら鉄腕アトム動かない　仙台市　月波　与生
ありがとうさようならでは終れない　堺　市　内藤　憲彦
正解は貴方次第と雲が言う　松江市　藤井　寿代
夕暮れの鐘にジレンマ解かされる　米子市　政岡日枝子
体重と味覚へ秋のハムレット　札幌市　三浦　強一
しゃべれば揉める黙れば言われ放題　神戸市　冨永　恭子
柔軟に生きるとボクがいなくなる　東京都　川本真理子
三軒長屋真ん中に住むジレンマよ　八尾市　宮﨑シマ子
核の傘入ったままの被爆国　防府市　坂本　加代
蟻の巣ころり買ってきたけど使えない　土佐清水市　辻内　次根
母さんの介護するよと言うニート　河内長野市　村上　直樹
感情と理性バランス崩れ出す　大阪市　升成　好
生活保護年金よりも頼られる　三田市　谷口　修平
ジレンマになる程思案していない　鳥取市　田中　天翔
ジレンマをポケットに入れ立ち上がる　岩出市　藤原ほのか
もうやめた言いつつ肥料予約する　篠山市　久保木　剛
切り下げと値上げがつづくまんどころ　大阪市　江島谷勝弘

この次は駿河トラフか南海か　三田市　堀　正和
お味噌汁思い出せない夕べの句　西宮市　福島　弘子
遺産はほしいし介護はシンドイし　奈良市　大久保眞澄
ジレンマの地球が怒る災害禍　広島市　田桑　恵子
9条がジレンマになる自衛隊　名古屋市　山本三樹夫
あとはもう海に捨てるか汚染水　羽曳野市　中川ひろ介
愛と憎ぼくのこめかみ放さない　寝屋川市　森　茜
窮極のジレンマ自分が許せない　岡山市　永見　心咲
ジレンマに苦しむ胸底の真珠　藤井寺市　太田扶美代
良心がジレンマゾーン行き来する　和歌山市　武本　碧
ジレンマが少なくなっている気儘　神戸市　奥澤洋次郎
缶ビンの蓋がなかなか開けられぬ　河内長野市　大島ともこ
柔軟に生きるとボクがいなくなる　東京都　川本真理子
百億人耐えるか地球のジレンマ　大阪市　古今堂蕉子
ジレンマを破る決断力を持つ　笠岡市　藤井　智史
条件が満たされなくて逢いたくて　海南市　小谷　小雪
ひと色が出せないために未完成　松山市　柳田かおる
沖縄を真ん中に描く安保地図　堺　市　内藤　憲彦
正論を吐けば仲間が去って行く　紀の川市　楠原　富香

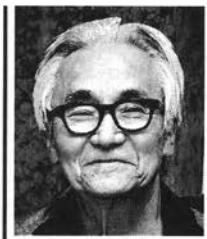
秀　句

ジレンマも老いてく身体から消えた　米子市　政岡日枝子
生きるのは辛い死ぬには早すぎる　堺　市　加島　由一
ジレンマを抱え豊洲へ大移動　神戸市　玄番美恵子

甘い水飲むと虫歯が痛む猿　沖縄県　森山　文切
男には好かれ女に嫌われる　橿原市　居谷真理子
愛は我が儘昨日キライで今日はスキ　大阪市　宇都満知子
ジレンマなどどこ吹く風の風見鶏　松山市　栗田　忠士
飲み込んだ嘘に鼓動が鳴り響く　富田林市　関　よしみ
ジレンマは続く女のひとり旅　三田市　上田ひとみ
ネズミからゾウの時間へ切り替える　池田市　太田　省三
一人では何もできない赤いバラ　岡山市　工藤千代子
ジレンマをまん中に置くヤジロベエ　紀の川市　宇野　幹子
その先は無限ジレンマ続く夜　倉吉市　岡崎美知江
抜け出せぬ螺旋階段上り下り　神戸市　細川　花門
立論にすべて反論たつ不思議　羽曳野市　三好　専平
ヤジロベーお前は誰の味方だい　唐津市　山口　高明
ジレンマの真ん中辺にある答え　奈良県　渡辺　富子
救急車音の割りには進まない　江南市　脇田　雅美
三叉路でジレンマになる笠遍路　伊丹市　延寿庵野鶴
大空へ放つジレンマ柿熟れる　大阪市　津守　柳伸
打ち明けてしまえば恋は恋でなく　徳島県　小畑　定弘
9回の裏は必ずやってくる　弘前市　髙瀬　霜石

秀　句

胸の棘捨てると僕が居なくなる　那覇市(故)　前川　真
生きるのは辛い死ぬには早すぎる　堺　市　加島　由一
愛だろか同情だろか恋だろか　男鹿市　伊藤のぶよし



追悼

井蛙さん黄泉へ旅発つ

福士慕情

去る、七月二十三日、須郷井蛙（すごうせいあ）さんが還らぬ人となりました。川柳塔みちのくの重鎮というよりも県内では井蛙さんを知らない柳人はおりません。句会では何時も大きな声で「井蛙」と呼名をされており、皆から慕われておりました。

喪主の長男さんは「父は何事にも前向きでユーモア溢れるサービス精神旺盛な人でした。川柳や囲碁、将棋、旅行と多彩な趣味を通じて出会えた多くの友人は父のかけがえのない宝物でした。入院中も孫と将棋をしたり、薬剤師さんに川柳を教えたりと最後まで楽しむことを忘れなかった父…今迄本当にありがとう。お疲れ様でした」。とご挨拶されました。

井蛙さんが川柳塔あおもり（現在は川柳塔みちのく）から上梓された百句集、「記念貨」の序文に故波多野五楽庵先生が「百句集『記念貨』に寄せて」と次のように述べられております。

あくまでも生活体験を基盤とした作家と、想像力を駆使してゆく作家と川柳が分かれているとしたら、井蛙さんは前者に属する作家と言わねばならない。

温厚な井蛙さんなればこそ、飾りのない生活の中にいる井蛙さんなればこそ、選ばれた百句の中にそのお人柄がにじみ出ている思いがする。

記念貨をてばなす今日の悲しい日
自転車は盗まれた月賦だけ続き
二年間貯めて一着より買えず

子煩悩であり、奥様思いの井蛙さんは、

市場寵病む子へ　筋子少し買い
調理師も顔負けをする妻の味

と心配もし、ちょっぴり自慢もしてみせる。また井蛙さんは文章をよくし、津軽の巨木、珍木を雑誌等に執筆されているが、郷土の漬物にもくわしい、おそらくお好きな酒のせいかもしれない。

酒出る席には万障繰り合わせ
残業が済むと男は飲みたがり

津軽を詠い人生を詠い続ける井蛙さんこそ麻生路郎の言う「いのちある句を創る作家と呼ぶにふさわしい」平成四年八月。

井蛙さんの人柄を如実に表している序文である。眼鏡の奥で何時もにこやかに笑っている優しい眼差しが、当分眼から離れない。

川柳塔みちのく同人の弔句

甲吉の川柳道場でまた逢おう　　黙人
順番を違えた柳友が旅へ発ち　　劦
「記念貨」を抱いて輝く黄泉路逝く　　花峯
ユーモアのデパートでした井蛙さん　　霜石
師と仰ぐ井蛙彼の世で句会中　　一呑
井蛙先輩極楽浄上席頼む　　呑舟
修学旅行の延長でした鳥取の夜　　和香子
お猪口手に話す笑顔は忘れない　　ふさゑ
語り継ぎますよ井蛙さんの呼名　　芳生
セイアという呼名が消えた句会場　　慕情
飾らないいのちを詠んだ井蛙さん　　隆樹
大海をとっても知ってた井蛙さん　　則彦
浄土でも句会へ参加してますか　　龍馬
井の中に厭きて大空から俯瞰　　規子
黄泉の国でも須郷井蛙（すごいかえる）　　ひとし
ジャンプする　　合掌

柳泉院碁道棋勇居士　享年八十四

「迫る」

（投句　226名）

磯部義雄選

停年が迫る背中の晴れやかさ　倉吉市　岡崎美知江
締め切りに追い立てられるカレンダー　防府市　坂本　加代
じわじわと迫る老化と手をつなぐ　奈良市　渡辺　富子
暮れ迫る酷暑の疲れ癒えぬまま　米子市　後藤美恵子
ざわつかずこれでどうだと多数決　海南市　小谷　小雪
締め切りが迫ると脳が動き出す　京都市　三宅　満子
サヨナラを迫ればマスカラが滲む　大阪市　小野　雅美
迫っても尻尾の先に触れただけ　倉吉市　牧野　芳光
家裁から真に迫って来た通知　尼崎市　清水久美子
膝談判一歩も引かぬ子に育つ　大阪市　田中ゆみ子
にっこりと笑って強要する返事　黒石市　北山まみどり
返済を迫ると開き直られる　堺　市　村上　玄也
返済の当てがないのに日が迫る　藤井寺市　若松　雅枝
返答を迫ると草書体で逃げ　高槻市　原　洋志
居住いを正し返答迫られる　松山市　宮尾みのり
差し迫って欲しいと思うものがない　大阪府　米澤　俶子
免許証が返納せよと言い出した　三田市　九村　義徳
やんわりと確信をつく細い眉　大阪市　平井美智子
核心に触れると揺れるイヤリング　阿南市　小畑　定弘
絵手紙の赤いルージュが迫り来る　鳥取市　田中　天翔

閉会が迫るサクラに合図する　唐津市　仁部　四郎
拉致の子へ真に迫った母の声　貝塚市　石田ひろ子
真相に迫ると無言押し通す　横浜市　菊地　政勝
柔らかい言葉で核心に迫る　大阪市　高杉　力
足下の火に決断を迫られる　和歌山市　武本　碧
魂の芯に迫った直下型　堺　市　澤井　敏治
被災地に冬が迫って来る焦り　犬山市　関本かつ子
砂漠化が迫るを知らぬ星条旗　池田市　上山　堅坊
刻刻と迫る地球のロスタイム　堺　市　坂上　淳司
ヒト科のエゴで身近に迫る地球の禍　大阪市　磯島福貴子
歯から目へ老いは容赦もなく迫る　弘前市　福士　慕情
おっとっと平均寿命すぐそこに　和歌山市　福井　菜摘

佳　句

天の声ヒト科に迫る核放棄　河内長野市　中島　一彌
真相を迫れば空気重くなる　紀の川市　宇野　幹子
陣痛へ命の誕生が迫る　東大阪市　北村　賢子
老いという付け馬迫る骨密度　高槻市　富田　美義
命を刻む音して秒針が迫る　藤井寺市　太田扶美代

人

正論が迫り背骨が軋み出す　下松市　有海　静枝

地

急がねばまた被災地に冬が来る　三田市　北野　哲男

天

嫁ぐ日が迫る寡黙な父になる　香芝市　大内　朝子

軸

年末が迫りソロバン走り出す

「内　緒」

（投句　229名）

今井　万紗子　選

ヒソヒソと声が立ちます人の群れ　熊本市　杉野　羅天
ここだけの話でいつか共犯者　東京都　川本真理子
内緒だと何かいいもの出て来そう　米子市　後藤　宏之
内緒事知ってしまってから寡黙　大阪府　米澤　俶子
友だちには内緒妻には秘密です　青森県(故)　松山　芳生
わからんでいいのよ女心など　橿原市　居谷真理子
針の穴抜けた内緒がでかくなり　伊丹市　延寿庵野鶴
だいどこの隅に寝酒の大吟醸　大阪市　古今堂蕉子
飴玉で親の内緒を子が喋る　島根県　原　徳利
すき間から洩れた内緒が風にのり　吹田市　須磨　活恵
酔ったふり内緒話に耳が立つ　和歌山市　福井　菜摘
内緒には出来ぬ児の口塞げない　堺　市　矢倉　五月
芋づるのように内緒が出たネット　松山市　宮尾みのり
裏口に受付があるのは内緒　松原市　森松まつお
ゼロひとつ増やして自慢するドレス　奈良県　渡辺　富子
内緒話聞いた耳からもう口が　弘前市　稲見　則彦
内緒だと念を押すから燃え上がる　堺　市　遠山　唯教
ここだけの話大したことはない　海南市　小谷　小雪
ときめきは内緒気付かれないように　藤井寺市　太田扶美代
ここだけの話とっくに舞っている　倉吉市　大羽　雄大

虫干しの服から洩れる内緒ごと　富田林市　山野　寿之
本当は亀は近道知っていた　松江市　栂瀬みちを
二人暮らし嬉しい知らせまだ内緒　河内長野市　藤塚　克三
盃を重ねて内緒こぼれ出る　奈良市　米田　恭昌
片方の耳が勝手に歩きだす　黒石市　北山まみどり
母さんの青春匂う小引出し　大阪市　田中ゆみ子
内緒話超特急で駆けめぐる　生駒市　飛永ふりこ
うふふふと孫の耳打ちこそばゆい　堺　市　坂上　淳司
内緒だがぼくには尻尾妻に角　豊中市　水野　黒兎
耳が伸び内緒の話知るうさぎ　大阪市　小野　雅美
内緒だと言えば益々知りたがる　大阪市　坂　裕之
ポケットの中で出番を待つ内緒　大阪市　平井美智子

佳　句

補聴器も内緒話が好きらしい　河内長野市　辻村　ヒロ
太陽に当ると内緒には出来ぬ　堺　市　村上　玄也
内緒ごと洩らすと真意探られる　唐津市　仁部　四郎
耳うちがやがて炎となる怖さ　和歌山市　武本　碧
傾いた首の角度で知る内緒　岡山市　永見　心咲

人

他愛ない内緒指切りさせられる　大洲市　花岡　順子

地

内緒だと昨日も聞いた話聞く　米子市　成田　雨奇

天

内緒事知り尽してる一張羅　神戸市　山口　光久

軸

巡り巡って同じ内緒がやってくる

初しぐれ教室

題 ― 運ぶ・選ぶ

居谷 真理子

今回は編集の不手際により課題を「運ぶ」「選ぶ」と二題出してしまいました。申し訳ありませんでした。二題とも投句して下さった方々、ありがとうございます。

（原は原句　参は参考句）

「運　ぶ」

原 いい知らせ運ぶ予感の赤とんぼ　勝　正
参 いい知らせ運んできたか赤とんぼ
原 あの世まで運んでしまう離岸流　(前)　真
参 帰れないとこまで運ぶ離岸流
原 彼の国は無慈悲に北に連れ去った　みちを
参 引き裂いて北の国へと連れ去った
原 ボールペンさらさら運び川柳を詠む　ひでお
「川柳」に「うた」とルビがありましたがちょっと苦しいですね。また作句には鉛筆が多く使われます。
参 鉛筆がさらさら運び二句三句
原 子のズボンしっかり運ぶ草の種　紀美代
参 草の種家まで運ぶ子のズボン
原 手抜きする方へ運んだ怠け癖　昭　枝
参 手抜きする方へ方へと運ばれる
原 華でしたママに運んだ給料日　雄　大
参 給料をママに運んだ頃が華
原 あの石をどう運んだかピラミッド　不二夫
参 どう運びどう積んだのかピラミッド
原 リーダーの頓知スムーズ事運ぶ　(門)　幸　子
参 リーダーの頓知が事を運ばせる
原 今日の日を運んでいくよ夕日落つ　廣　光
参 今日の日を持って行くよと夕日落つ

「選　ぶ」

原 あの議員えらんだ人は私達　不二夫
参 あの議員選んだなかに僕もいる
原 粒選りの梨を贈って秋来たる　(門)　幸　子
参 粒選りの梨です秋を贈ります
原 三選にあぐらかきそな人がいる　廣　光
風刺はオーバー気味が面白い
参 三選の布団にあぐらかいている
原 選び選ばれまあまあまあの夫婦仲　なつみ
参 選ばれて選んでまあまあの夫婦
原 審査員一票の重み胸熱く　寧
参 一票の重さ知ってる審査員
原 母さんの選ぶ本面白くない　孚　彦
参 母さんの選んだ本はツマンナイ
原 分岐点さあ右へ行く左行く　優
参 分岐点右も左も霧の中
原 選びぬきもらった猫が病気がち　ゆ　き
参 かわいさで選んだ猫が病気がち
原 指先が選んでくれる熟れ具合　里　子
参 指先が選んでくれた熟れ具合
原 記念日に妻に感謝の店選び　のぞみ
参 記念日に妻の好みの店選び
原 ワイシャツを選んだ老いの下心　整
参 ワイシャツを選ぶも老いの下心
原 家選ぶ夢と現実の狭間で　隆　子
参 現実と夢の狭間で家選び
原 選ぶなら菓子箱次第と決めている　信　子
参 菓子箱の重さで選ぶつもりです
原 来世もまた貴方と一緒に生きたい　風　露
参 来世もあなたと共に生きていく
原 趣味と益目利きが選ぶ古物市　まさる
参 趣味と実益目利きとなって古物市
原 服選び右往左往で疲れはて　開　子
参 服選びだけでこんなに疲れはて
原 選挙カー訴えるのは名前のみ　通　則
参 選挙カー連呼連呼で通りすぎ

原 旅選ぶ車窓も楽し鈍行に　照代
参 鈍行の旅を選んで見る車窓
原 カーナビの選んだ道で遠まわり　美枝子
参 カーナビが選んでくれた遠まわり
原 親ごのみ金婚式で孝行か　(立)和子
参 親ごのみのお方に添うて五十年
原 安価でも似合うブラウス選っている　こずえ
参 安くって似合うブラウス選っている
原 ワンサイズ小さめを選ぶ試着室　由紀子
参 ワンサイズ小さめ持って試着室
原 選りすぐりの選手にもある体力差　よしお
参 選りすぐりの選手にもある運不運
原 白菜の鉢巻き選ぶ道の駅　(高)道子
参 白菜のこの鉢巻きはあの農家
原 お見舞いへ笑顔を選ぶチェックする　(大)安子
参 やわらかな笑顔選んでお見舞へ
原 孫娘女子校よりも男女校　(東)美智子
参 孫娘女子校けって共学へ
原 あれこれと迷って選びカスを引く　重男
参 あれこれと選び選んでカスを引く
原 文句言うな貧乏くじは己がひくなり　善輔
　良い句ですのに「なり」が余分
参 文句言うな貧乏くじは己が引く

原 八十路です議員を選ぶ義務がある　貴美江
参 投票の義務も権利もあり八十路
原 これからも自分で選び生きていく　(高)弥生
参 これからも自分で選ぶ生きる道
原 この苦労買ってでも率先選びたい　(澤)良子
参 買ってでもしたい苦労を今選ぶ
原 おみくじの選びなおしはしてならぬ　こみつ
　いつもながらユニークな着眼
参 おみくじの選びなおしはなりませぬ
原 八十路来たそろそろ閻魔に選ばれる　光雄
参 閻魔から声かかりそうもう八十路
原 選良がいつの間にやら選悪に　恒
参 選良のいつの間にやら良が取れ
原 仕分けされ少しのキズもB級品　厚子
参 これしきのキズでB級品にされ
原 選り抜きの結婚相手夫です　雅子
　どうもごちそうさま！
参 選り抜きの人を夫と呼んでます
原 選ばれて数合わせ乗り鞍変えか　勝治
参 数合わせ当選すぐに乗り換える
原 最良の己の道に悔いは無く　三樹夫
参 最良の己の道だ悔いは無い
原 選ばれて我を親にと障害児　(斉)宏子

参 私を親に選んだ宝の子

【佳句】

選りすぐり黒枝豆は僕の作　剛
じゃんけんに勝ってばしりに選ばれる　奈津子
期待と不安乗せて豊洲にお引越し　亜希子
よい知らせ足の運びも軽くする　くみ子
派手な服試着し尽し地味選ぶ　美穂
トランプを選んだ国が大慌て　洋一
あんなにも試着したはずなんだがな　(大)洋子
選り抜きの泡を出した松葉がに　一平

【今月の推せん句】

シャンソンを聞く時選ぶロゼワイン　貝塚　正子
お姫様抱っこで運ぶ吟醸酒　原　徳利
よっこらしょどっこらしょっと老い運ぶ　生田　和之

平成三十年初歩教室年間賞

春よ来いピンクの絵の具溶いて待つ　島根県　原　徳利
自覚ないけれど今朝から高齢者　三田市　丹羽　美恵
マイルーツ想像の野を騎馬で行く　神戸市　近藤　勝正

川柳塔鑑賞

同人吟　山口光久

―11月号から

万緑のシャワーも浴びる露天風呂

三浦　強一

心も体も爽快になり、疲れを一掃してくれる露天風呂。満天の星を仰ぎながら、緑のシャワーを浴びながら、鼻歌交じりのひと時。こんな至福はないでしょう。温泉旅館に露天風呂は付き物です。

君がいて会えて話せて大ジョッキ

居谷　真理子

無二の親友がいるのは宝です。学生時代の友、職場の友、サークルの友と話し合い、行動を共にできるのは嬉しいものです。でも、高齢になるに従い友の数が徐々に減るのは寂しいものです。

笑うしかなかったいきなりの別れ

平井　美智子

前触れもなく突然の別れは悲しい限りです。誰にでも起きることで、ただ呆然とするのみです。「笑うしかなかった」は的を射てますね。

愚痴をいうたびに壊れてゆく時間

山岡　冨美子

言っても仕方のないことをくどくど言って嘆き、大切な時間を無駄にするのは勿体ない。お喋りは時間の無駄。愚痴を言うのも時間の無駄。「壊れてゆく時間」に感動を覚えます。

平和とはペットの医者が街に増え

北野　哲男

心配や揉め事が無く穏やかで、戦争や災害が無く、不安を感じないのが平和。ペットでも飼いたいと思うのは贅沢でしょうか。当然、動物病院ができ、獣医も増えてくる。一見平和そう。

大風呂敷にまんまと乗って地獄見る

山下　凱柳

人の欲には歯止めがない。ついつい他人の法螺話に乗ってしまい、大怪我をするのが落ちである。実現不可能な大風呂敷の奥には地獄が待っている。

どの色も似合わぬ齢になり候

西口　いわゑ

若い頃はどんな色の服装をしても華になります。誰でもそんな時期を経て成人になりました。高齢になると個性が豊かになります。個性に合った色を十分生かし、独自性を持ちましょう。

震度7生きていたかと笑い合い

小沢　淳

震度7の地震は恐ろしいものです。阪神淡路大震災は歴史に残る大惨事で私も体験しました。連絡が取れた仲間と「生きていたか」と声を掛け合いました。

本音だけ聞きたがってるイヤリング

菊地　政勝

建前と本音の使い分けの上手な人はいます。会話の中で聞きたがっているのは本音。杯を重ねるごとに建前から本音に変ってゆくのです。

八十路にもあすなろという登り坂

上田　和宏

あすなろ（翌桧）は常緑樹で檜につぐ良木である。明日は檜になろうと夢を見て、一生懸命努力をしているのです。八十路でも上り坂を駆け上がりましょう。

蒔いた種否応無しに発芽する

冨　永　恭　子

蒔かぬ種は生えぬ、打たねば鳴らぬ寺の鐘と言われています。原因がなければ結果はない、それなりの努力が必要という事である。蒔いた種は温度と水分があれば否応無しに発芽するのです。

お互いに地が出てからのお付き合い

酒　井　真　由

社交上のお付き合いも真のお付き合いもお互いに「地が出て」からである。上辺だけに陥るより有りの儘がいい。長く長くお付き合いしましょう。

逃げ道が無いまま夫婦続けてる

野　口　真桜子

どこの家庭でも夫婦の危機は存在する。逃げ道が有っても無くても、夫婦を続けているのです。何か目に見えない鎖が働いているのでしょう。

照れくさかろうな遺影が若過ぎる

大久保　眞　澄

遺影は過去の写真の中から適当なものを選び飾るようである。私も古い写真の中から選んで欲しいと頼んでいる。照れるどころか胸を張っていいでしょう。

運は天にこの世すいすい泳ぎ切る

今　井　万紗子

人事を尽くして天命を待つ、といいます。遣るだけの事はやって後は運に期待しましょう。世知辛い世の中、すいすい泳ぎ悔いのないように。

災害は人の手抜かり突いてくる

大　川　桃　花

異常な自然現象によって起きる災害は到底防げないが、ある程度は減ずることは可能。手抜かりがあれば被害は甚大。ずばり言い当てています。

馬鹿になることが出来ないお馬鹿さん

髙　杉　力

世渡りは馬鹿になることが肝腎。でもそれが出来ないから困る。自分を抑えて我慢我慢。

先送りしとけば時が片づける

吉　岡　修

行き詰まった時はちょっと小休止、慌てない慌てない。問題の解決は先に延ばすことが肝要。お役所は要望や陳情に即決する事はまずありません。やんわりと先送りです。時間が経てば「時が解決」してくれます。

頑張れば喜ぶ人が居てくれる

太　田　扶美代

困難にもめげず、外圧にも屈せず、ひたすら努力して目標を達成する。その達成感が堪らない。一緒に喜んでくれる人が傍に居れば何と心強いことでしょう。

一期一会雲の流れに逆らわず

岩　本　笑　子

科学が発達しても自然現象を制御することはできません。雲の流れには逆らえません。人生は一期一会、人との出会いは大切です。心を込めて接しましょう。

三流で無口で音痴そこがいい

倉　益　一　瑤

一流でなくても、二流でなくてもいい。三流で結構。能弁でなくても、多弁でなくてもいい。無口で物静か。歌えばピカ一もいいが、音痴で皆の笑いを取り、人に好かれ愛されるのがいい。

暑いとぼやき寒くなったら又愚痴る

古手川　光

人は好き勝手に御託を並べる、言いたい放題である。暑い時はぶつぶつ、寒くなれば愚痴る。言っても仕方のないことを言って嘆く、手前勝手である。

水煙抄鑑賞

—11月号から

菊地政勝

年輪の所どころにある破線

笹重耕三

人生を振り返ると決して順調に歩いた訳ではない、山あり谷ありの人生だった。

手花火のポトリと終わる夏の恋

坂本星雨

手花火の様に細くて短く儚い恋が終わり、しばし静寂が続きました。

度忘れは一人になってふと浮かぶ

福呂秀子

同じ様な体験をして居ります。

故郷の木霊はいつも柔らかい

西川千鶴

帰省した喜びを山に呼びかけると、律儀にもあたたかく応えてくれた。

鏡見て元気ですかと問いかける

川本美津子

自分を励ましているのでしょうか。

立ち位置をわきまえているかすみ草

花岡順子

主役を引き立てるために自分の役割りを良く自覚している。他の人もあなたの気遣いに気が付いています。

どちらにも味方をせずに友が減る

米田利惠子

平行線の続く二人の会話へ仲裁に入ったが、聞く耳を持たぬ二人。そんな人達が離れていっても仕方がない。

懲りもせず見切り発車をしてしまう

清水久美子

もう少し粘って考えを巡らせたら良かったものを、いつも反省をしています。

タンポポの綿毛本音が掴めない

田賀八千代

本音を出せない風吹くままの命です。

お隣もそのお隣も皆施設

下田茂登子

長寿国であるが故の現象でしょうか。

ひらがなの気持になったご老体

三谷松太郎

角が取れてまるくなった、好好爺。

自宅でも仮面を付けたままの僕

廣瀬良磨

仮面をかなぐり捨てて地を出してゆったり暮しましょう。

失敗のしっぽ切り捨て立ち直る

上山堅坊

きっと明るい明日があります。

断捨離のテキスト買って本が増え

西川ひろし

断捨離のコツは「迷ったら捨てる」です。勿体無いの気持ちがある限り進みません。

あの時に迷った答糸を引く

川島良子

迷った末の答は正解ではなかった。

なぜ空が青いかなんて考えぬ

田本古鈴

天の恵みです理屈はいりません。

言い勝って心地良かった例しなし

磯野不二夫

相手を説き伏せた気持であったが、思い出すとあの発言が良かったのか、と反省し、いつまでも蟠りが残ります。

何事も妻に伺う縦社会

副井裕

会社の延長を家に持ち込んでいるようです。でもこちらの家庭はうまくいっていると思いました。

日本人少しは照れが残るハグ

木藤こみつ

テレビで良く見かけます。日本人がやると不自然に見えるのは何故でしょうか。

原石のままで終れば悲しすぎ

宮田風露

二人が良しと思っていればいい話

長島亜希子

守る人あるから疲れ心地よい

小野美那子

96 金魚たち

生物の中でも魚類は多種多様で、現在発見されているものだけでも二万八千種もいるとのことです。それを大別しますと海水魚が56％、淡水魚が43％。残り1％は汽水魚か識別不能ということでしょうか。

その多様な魚類の中でも観賞用として飼われているのは、金魚や鯉、そしてメダカや熱帯魚など、美しい姿や優雅な泳ぎを愛でられています。中でも金魚は昔から馴染み深く、楽しまれているご家庭も多いことでしょう。

肩金魚まつりの日から玄関に　松本としこ
夏越した金魚すくいの金魚たち　石田比呂子
五年いる金魚わたしを知っている　鴨谷瑠美子
パクパクと声なき声を出す金魚　小西カツエ
怒ったらダメと水槽の金魚　立蔵　信子
許さない許す金魚の尾が揺れる　増田　純子

「肩金魚」とはまことに失礼な呼び方ですが、玄関に置いているというのですから粗末に扱っているわけでもなさそうです。これは「愚息」とか「豚児」などと同じように、身内の者を謙遜して言う謙遜語と解釈するべきでしょう。

飼い主といちばん意思が通じ合うペットは犬だと思いますが、愛猫家からすれば「猫も負けていない」でしょう。では「金魚」はどうでしょうか？　五年も一緒に暮らすと「顔見知り」位にはなれるようです。また、「怒ったらダメ」「許さない許す」は、金魚に自分の想いを語らせています。

金魚鉢一匹残り生きている　谷川　勇治
一匹になった金魚が泡を吐く　福士　慕情
餌もろて泳いでいればよい金魚　遠山　可住
金魚飼う今年も暑くなりそうだ　東川　和子
食べられぬ金魚まるまる肥えてきた　成田　公一
近寄って金魚ぶいっと泳ぎ去る　斉尾くにこ

連れ合いを亡くして意気消沈して、後を追うように逝ってしまった男性がいます。一方、以前より元気になって飛び回っている女性もいます。さて、金魚鉢に一匹だけ残った金魚は何を想っているのでしょうか。

餌を貰ってふらふら泳いでいればいいだけの金魚。世界中でいちばんの果報者に思えますが、「ぷいっ」と泳ぎ去る姿を見ていたら、何やら不満があって拗ねているようです。

逃げまどう金魚も命かけている　長浜　美籠
金魚にもどうもいじめがあるようだ　加島　由一
夜店から夜店を回り金魚死ぬ　永藤　弥平
入院も注射もされず死ぬ金魚　原　千鳥
犬ほどは泣いて貰えぬ金魚の死　秋貞　敏子
母の名を金魚に付けて偲んでいる　工藤千代子

生き物が身の危険を感じるのは親から教えられたものではなく本能的なものでしょう。金魚掬いの水槽に入れられてしまった金魚。追う方は遊びでも逃げている方は命がけです。

夜店の金魚でも運が良いのは大切に持ち帰って玄関に飾って貰えますが、運が悪いのは追い回されて傷つき死んでしまいます。家族のように大切にしてもらった幸せな金魚でも、入院して治療を受けられるのは稀なようです。

『麻生路郎読本』余滴(49)

「川柳職業人宣言」前後⑨

桒原道夫

昭和11年7月2日、同人会を開いて「川柳雑誌」を路郎の個人経営とすることになった。同月11日の夜、不整脈で倒れた妻の葭乃の看病もしながら、路郎は「川柳雑誌」7月号の編集をする。同月25日に7月号が発行されたが、通常70頁前後の「川柳雑誌」が、なんと4頁の薄っぺらい号となった。次に掲げるのは、1頁の写真である。

川柳雑誌
七月號
一萬圓句會

通常の表紙がなく4段組で、上段右に「川柳雑誌七月號」とあり、絵を挟んで左にゴシックで、「本誌は路郎の編輯・經營ではあるが路郎の箇人雑誌ではない＝超流派的柳誌」とある。2段目から4段目にかけて、「一萬圓句會」の記事がある。(後に紹介する)。下段欄外に横書きゴシックで「本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る」とある。

2頁は、「川柳人協會の創立と正會員を募る」と「川柳人協會々則」が掲載されている。(「川柳人協会」については稿を改める)。

3頁の、「川柳雑誌社組織變更に就て」を載せておく。他に、「祝川柳人協會創立廣告」「暑中御伺廣告を募る」「放送川柳」を募る」の広告記事がある。

〈△最近川柳雑誌の刊行が遅れたり事務が澁滯したり、句會を休んだり皆様に尠(すくな)からず御迷惑をかけました點は重々お詫び申上げますが所謂雨降つて地かたまると云ふ諺通り「川柳雑誌」の今後は一層輝かしいものとなりますから御安心願ひます。

△七月二日の同人會の決議によりまして「川柳雑誌」は麻生路郎先生の個人經營として刊行を續けていたゞくことになりました。別に强固な不朽洞會が出來て先生を極力支持して行くことになつてゐます。

△柳壇に三十有三年の體驗を有し、新聞、雑誌の經營には造詣の深い先生が終生の事業として立たれ、先生御一家が擧(こぞ)つて力を合はされ、心から先生に心腹せる不朽洞會員が全的支持をされますので柳界に嘗て見ざる麗はしい力强い雑誌社となる譯ですから、吾社の發展は期して待つべきものがあると確信してゐます。

△一層の御好評と御愛讀を賜り度御願ひ致します。

△尚ほ編輯と事務を擔當されてゐた增位汀柳君は同人會に先立ち六月三十日限同人を辭退されましたから御知らせいたします。

川柳雑誌社〉

4頁は、「不朽洞より」と、定価、発行所、売捌書店の案内の記事があるが、「不朽洞より」を一部抜粋する。

〈△遲刊やら不行届やらで毎號お詫びばかりしてゐる位、氣の利かぬ話はありませぬ。それで七月號はこんな『募る集』とでも名づけるべき凉しいものを出し、社の改組更正振りにつきお知らせやら倍舊の御聲援やらをお願ひすることにいたしました。從つ

て誌代は八月號共三〇錢になりますからお含み下さい。〉

前回の「余滴」で、川柳雑誌社を「深淵に投げ込むやうな事件」を、川柳雑誌社の経営、すなわち会計上の事件だと、筆者は記したが、そのことをほのめかしているように思われるのが、1頁の「一萬圓句會」の記事である。全文挙げておく。

一萬圓句會

△*1一萬圓グライ？　と思つてゐた時代もあるでせう。
×ありますとも。
△何年かかりました。
×貯めるのにですか。
△そうです。眞逆、一年や二年ではないでしよ。
×ところがデス。
△ハア。
×ところが、そうはいきませんネ。一度*2谷孫六さんに相談をして見やうかと思つてるんです。
△では、駄目だつたんですか。
×儲けても〳〵私の貯金函は底が抜けてるらしいのです。
一萬圓へ九千九百圓足らず　（路郎）
で、この調子では行末が案じられてならないのです。
△スツカリ悲觀しましたネ、*3一萬圓ルンペン臼坂一作爺さんはどうです。
×アレはルンペンだから、塵も山式にたまつたんです。私達は人間的に生きねばならず、食はねばならず、着ねばならず、教養を圖らねばならないんです。
△ハハー、なるほど。
×ではせめて、一萬圓の句でも作つてウサを晴らすことにしませう。

一萬圓大阪辨にまだ成れず　高橋かほる
一萬圓持つて聯絡線（ママ）に乗り　同
一萬圓親類が來ても眼が尖り　西田　艸樂
一萬圓用途は他人が考へる　同
一萬圓外に猿股とシヤツを持ち　同
たちまちにして甥があり飛んで來る　須崎　豆秋
一萬圓五九郎はまだ生きてゐる　同
松竹の慾は一ぺん映して見　同
四捨五入にされる一萬圓もあり　同
住友吉左衛門一萬圓がままならず　同
一萬圓フフンと云つて草に寢る　同
色は色一萬圓は離さない　麻生　路郎
心臓の強さ一萬圓忘れ　同
一萬圓哀れはけなるがるばかり　同

*1　当時の一万円は、今のどれぐらいに当たるか。矢野恒太記念会の『日本の100年』によると、昭和10年の勤労者世帯実収入が月額平均九一円。年刊一〇九二円。一万円は、一世帯の平均年収のおよそ9年分に当たる。

*2　谷孫六（本名・矢野正世）は、明治22年（一八八九）1月に生まれ、昭和11年（一九三六）11月に死去。経済著述家。矢野きん坊の名で「当世新柳樽」「大正柳樽」などを編集。昭和に入り、矢野錦浪の名で平凡社から「川柳漫画全集」出版。路郎はこの年の9月に上京した際、孫六主宰の「財の教」の事務所を訪れ、見舞っている。また、「川柳雑誌」12月号に、追悼文を載せている。

*3　ルンペンは、現代では放送禁止用語。臼坂一作は、未詳。

（次回に続く）

（投句215名）

何かにつけて、「平成最後の」という言葉が聞かれるようになりました。

かと言って、三十年もあった平成という時代が自分の中では只バクゼンとして掴みきれないのです。

反対に、昭和何年と言われれば、その年代ごとに鮮やかに蘇ってくる記憶は数えきれないほどあるのに。このような感覚は、私だけなのかしらと考えてしまいます。では。ナビです。

米子市　八木　千代

友と会う夜もアバウトの鍋になる

（評）仲の良い友と会えばお話が何よりの御馳走でしょう。料理は二の次、そんな時は鍋料理が便利ですよね。

鳥取県　斉尾くにこ

仲良しだった鏡が敵になってくる

（評）日に何度となく見ていた鏡も、見たくないものが顔に増えてくると、覗くのが嫌になります。鏡は悪くないのに。

大阪市　奥村　五月

百までは少し無理だと預金残

（評）人生百まで、最近よく耳にするコトバですが、それも先立つものがあればこそ。預金残とはまた現実的。

篠山市　長谷川善輔

もふもふを抱いて昼寝が夜となり

（評）犬でも猫でも、寒くなれば湯タンポ代わり。そのあったかさに昼寝のつもりが夜まで、シアワセです。

大阪市　柴本ばっは

冷える夜はユダもイエスも入れて鍋

（評）底冷えのする夜は敵も味方も、右も左も言っちゃあおれません。まずは体を温めてからこその対決姿勢です。

三田市　村田　博

父ちゃんはイノシシ獲りに山の中

（評）今どきは、こんなに勇ましい父ちゃんになかなか会うことは出来ません。今夜はシシ鍋なんでしょうね。

大阪市　宇都満知子

ハロウィンの後はかぼちゃを甘く煮る

（評）ハロウィンでくり抜かれたかぼちゃを見るたび、中身はどうなったんだろうと思っていました。

神戸市　山﨑　武彦

落し蓋無いから予算青天井

（評）どこかで歯止めをかけないといけませんよね。オリンピックの予算も個人の家計も。

和歌山市　土屋起世子

ゆっくりと煮詰めて丸くなる会議

（評）時間をかけて意見を言い合い、皆が納得する結果へ導く、そんな理想の会議、なかなか無いものです。

大阪市　樋口　眞

平成に名残りを惜しみ今日も飲む

（評）平成という時代も、一日、また一日と少なくなっていきます。そこで何が出来るか、やっぱり飲むことですか。

吹田市　山本希久子

隠しごとコトコト煮込む小半日　米子市　後藤　宏之

孔子老子意見なかなかかみ会わぬ　和歌山市　上田　紀子

月の出を待って一献差し上げる　河内長野市　木見谷孝代

サビついた脳の回路に油さす　大阪市　磯島福貴子

家事万能イクメン男子募集中　男鹿市　伊藤のぶよし

温まる民話にホッと囲炉裏端　西脇市　七反田順子

元号でつなごう平和みなのもの　米子市　成田　雨奇

女房が肴に困りまたこれか　河内長野市　山岡冨美子

お手軽と宇宙旅行が売りに出る

防府市　坂本　加代
真人間右脳と左脳歪みなし

青森市　守田　啓子
寝室は別長生きをしなくちゃね

橿原市　居谷真理子
絹もめん豆腐にもある内輪揉め

藤井寺市　鈴木いさお
半分こしても貧しさ変わらない

和歌山市　古久保和子
煮崩れをしない男に肩が凝る

唐津市　仁部　四郎
闇鍋に飛び入り禁止永田町

東大阪市　佐々木満作
立ち会いの呼吸が合わぬ喧嘩四つ

香芝市　大内　朝子
世渡りへ百面相を持つピエロ

松山市　宮尾みのり
どうせならたらふく食べて逝きたいね

佐賀県　真島久美子
新元号ミラーボールを準備する

弘前市　高瀬　霜石
カレーライスとライスカレーにある段差

土佐清水市　辻内　次根
文句いいながらたいらげる宿六

箕面市　出口セツ子
神様も自然も怒り煮つまって

芦屋市　近兼　敦子
ホッとする居場所探しているのです

日高市　根岸　方子
いも煮会胃腸も風も秋の陣

沖縄県　森山　文切
スナックでまたデュエットを聞かされる

明石市　糀谷　和郎
ロールシャハこの絵は何に見えますか

倉吉市　牧野　芳光
白旗を上げても逃げられぬ豆腐

奈良市　山本　昌代
「ああ」と声何とも言えぬ目鼻立ち

松江市　栂瀬みちを
鍋一つあれば老後は事足りる

堺　市　矢倉　五月
狭くとも音響屈指このホール

海南市　堂上　泰女
もやもやの時間惜しいと秋の天

唐津市　山口　高明
スナップの紳士淑女はみな笑顔

大阪市　古今堂蕉子
記憶力只今五十パーセント

松江市　石橋　芳山
非常食ですけど試食しませんか

大阪市　江島谷勝弘
探索中はやぶさ2のマスコット

堺　市　加島　由一
かずら橋渡っています七十五

米子市　生田　和之
どっしりと鎮座して来た昭和の詩

大阪市　栃尾　奏子
スタジアム今ライバルは自分だけ

松江市　相見　柳歩
真四角が崩れた頃に味を出す

大阪市　森　廣子
星を見る今夜二人で寝転んで

唐津市　坂本　蜂朗
ママの目が届く範囲の別天地

三田市　野口真桜子
満ち欠けで月のウサギも流浪する

門真市　坂本　星雨
墓じまいしましょとぬるい鍋が出る

生駒市　飛永ふりこ
黄泉路でもザ・ピーナッツは美声あげ

寝屋川市　籠島　恵子
家庭内別居おためし期間中

鳥取市　前田　楓花
スポーツは見るのが好きでコタツ派だ

神戸市　冨永　恭子
都市と過疎みんな独りで皆寂し

西宮市　高橋千賀子
のんびりと猫の隣りで昼寝する

宝塚市　岸田　万彩
仕切り線両手ついたか見る行司

鳥取市　福西　茶子
逃げ足の速さ諭吉とカレンダー

2月号発表
(12月15日締切)

(平本　勝彦　画)
柳箋に2句

本社 十一月句会

◇十一月七日（水）午後一時
アウィーナ大阪

夏の名残りさえ思わせる立冬の七日、十一月句会は百二十名（内投句者七名）の参加で開催された。初出席は大阪市の降幡広美さん。句会に先立ち、過日亡くなられた和歌山市の同人田中みねさん、鳥取市の同人竹口清信さん、大阪市の参与鶴田遠野さんに黙祷を捧げた。

今月のお話は三宅保州さん。題は「川柳あらかると9」。作句の心得を基本編から応用編へと各十カ条、するべからずを二十カ条も交えてお話され、会場は頷いたり笑ったりしながら聞き入った。川柳が上手になるためには、ひたすら読み、聴き、作ること。何より大好きになることだと、心に刻み込む時間だった。演歌「熊野古道」の替え歌で川柳への熱い想いを朗々と歌い上げ、楽しいお話を締め括られた。（眞澄）

月間賞は　今井万紗子さん（八幡市）

（司会―真理子・隆彦）（脇取―千代・すみ子）
（受付―㈲五月・大子）（懸垂幕墨書―耕治）
（清記―憲彦・勝弘）

席題「正しい」　米田　恭昌　選

邪を正す男の仁王立ち　山野　寿之
正しいと限らぬ神のなさること　西出　楓楽
力と金それが正義になる世界　村上　直樹
山坂越え父の正論色あせる　渡辺　富子
凸凹を正しい順で書けず老い　水野　黒兎
上澄みを取れば正体顔を出す　米澤　俶子
現金は正直ちゃんとする仕事　柴本ばっは
正しいこと曲げず万年平社員　出口セツ子
正論で善人たちが揉めている　木嶋　盛隆
正論を聞くたびあくび噛みころす　原田すみ子
清く正しく今も変わらぬ宝塚　前　たもつ
正論を青い青いと叱られる　山崎　武彦
正論はさておき先ずはビール注ぐ　澤井　敏治
秋の空規制正しく彼岸花　上山　堅坊
真実がフェークニュースにけ散らされ　吉村久仁雄
助手席の孫に黄だよとにらまれる　矢倉　五月
正義漢すぎて浮きます沈みます　古今堂蕉子
正論を吐けば外野が騒がしい　島田　誠一
蟻の群正しい仲間追うていく　七反田順子
日向ぼこにも母は正座を崩さない　宮崎シマ子
襟正し持論崩さぬ土根性　山野　寿之
平凡に正しく生きて今がある　長谷川崇明
訂正とお詫びばかりで生きた道　松尾美智代
父さんはいつも正しいから困る　山岡冨美子
正論を吐いて疎まれ蚊帳の外　永田　紀恵
正しいのはいつも母ちゃん譲りません　島田　誠一
正論にふりまわされる傍観者　酒井　紀華
鏡も君もいつも正しいから困る　大久保眞澄
トランプが正論だとは世も末だ　伊達　郁夫
正論一人堂々挙手する勇気　前　たもつ
春夏秋冬星の配置はずれぬまま　小野　雅美
妻の言うことが正しくなる我が家　片山かずお
百ひく七　正しく言える大丈夫　村田　博
薔薇檸檬正しく書ける惚けてない　西出　楓楽
まっすぐな道正解にたどり着く　山本希久子
鬱の字はハズキルーペで見てからね　矢倉　五月
矢面の正義は受けて立つ姿勢　栃尾　奏子

佳

妥協せず正しく生きて傷だらけ　鈴木　栄子
金釘流だけど正しい筆捌き　木本　朱夏
正論を弾きとばした多数決　村上　玄也
校正の目を擦り抜けた誤字脱字　大久保眞澄
正しいかちょっと疑う風の向き　森　廣子

人

ぼけかけているがまだある正義感　新家　完司

地

正義感何年経っても青いまま　福田　正彦

天

盤石は正論通す父の背　土田　欣之

軸

正論を吐いてみんなに疎まれる

兼題「名　前」　緒方美津子　選

拉致家族名前呼んでも届かない　川端　一歩
ばあちゃんはオイと言う名か孫が聞く　福田　好文
振り仮名の欲しい名前が世にあふれ　伏見　雅明
感じますもらった名前親の愛　磯島福貴子
無職の名で三十年も生きました　前　たもつ
子の名前忘れた母を抱き起す　山﨑　武彦
古稀過ぎて自分の名前好きになる　森　菊江
名は雑草強く正しく生きてます　安土　理恵
入院の母の下着に書く名前　平井美智子
難聴もマイネームには返事する　津守　柳伸
呼び捨てにされ勘違いしてしまう　平井美智子
訃の欄に知人の名前見る冬日　荒川　鈍甲
二度聞きをしますお孫さんの名前　立蔵　信子
寿限無より長い柳名いいですか　村田　博
漢字の妙読めないけれど可愛い名　平賀　国和
会釈だけお互い様のもの忘れ　中川ひろ介
駅前の句碑に路郎の名を見つけ　油谷　克己
プレッシャーにいつも負けてる勝君　山本希久子
ペンネーム三つも持って稼いでる　柴本ばっは
親にもらった名が泣いている少年A　三宅　保州
呼名され誇りをもらう我が名前　福田　正彦
お名前を見ればあなたも戦中派　山田　耕治
千の風纏って枯れ葉まで生きる　関　よしみ
故郷をしこ名に込めて土俵入り　石田　隆彦
名前だけ記した名刺で手漉き和紙　関　よしみ
戒名をネットで売っているお寺　細川　花門
可憐な小花　ヘクソカズラは酷すぎる　米澤　俶子
七光り名前が一人歩きする　能勢　良子
お名前はと聞かれた認知症テスト　三宅　保州
きゃりーぱみゅぱみゅ舌のもつれも売る手段　島田　誠一
黄金虫ちょっと良すぎる名前だね　上山　堅坊
親に貰った名だ丁寧に書いています　矢倉　五月
父母よやさしい名前ありがとう　指宿千枝子
命名の一字は祖父の贈りもの　木本　朱夏
キラキラネーム手古摺ってますおばあちゃん　柴本ばっは
名前聞くだけでファイトがわいてくる　中村　惠
千の薔薇千の佳き名に咲きほこる　水野　黒兎

佳

本名より渾名覚えている恩師　石田ひろ子
匿名で出した文句に返事くる　木嶋　盛隆
授かった名前を浄土まで磨く　土田　欣之
名前には親の心が宿ってる　田中　廣子
汚さずに守り育てた一代記　前田　紀雄

人

平成を深く刻んだ親授式　山根　妙子

地

80歳も2歳も付けておく名札　鈴木　栄子

天

汗なみだ沁みた往時の名刺入れ　村上　直樹

軸

朝毎に飲んでる薬　名がいえぬ

兼題「洗　う」　松岡　篤　選

もう一度洗いたかった母の背な　平井美智子
洗われて隠す術無いマイナンバー　冨永　恭子
眼を洗いフェイクニュースに踊らない　山岡冨美子
いやな噂耳を洗って忘れます　鈴木　栄子
澄んだ目になって出てくる美術館　藤井　宏造
台所洗って主婦の座を下りる　指宿千枝子
洗いざらい喋る覚悟の深呼吸　升成　好
洗うのは別々ですと洗濯機　木嶋　盛隆
しっかりと化粧落せばおばあさん　金川　宣子
洗い上げ無沙汰を詫びる墓参り　村上　直樹
わたくしを丸ごと洗う仕舞い風呂　指宿千枝子
この先を決めねばならぬ墓洗う　吉岡　修
口先では洗い落とせぬ原発禍　澤井　敏治
大滝のしぶき心を洗われる　米澤　俶子
手が切れる水で大根洗う老母　山野　寿之
千振の苦さスッキリ腹洗う　柴本ばっは
ケームから足を洗った三浪目　能勢　利子
新閣僚過去を洗えば真っ黒け　中島　一彌
洗濯機に入れてやりたいヤツが居る　江島谷勝弘
身辺を洗えば傷の二つ三つ　村上　玄也
洗う手間省く男の料理皿　細川　花門
酒で洗って消える悲しみたかが知れ　西出　楓楽
疲れたら緑のシャワー浴びにゆく　鈴木　栄子
洗濯物裏向けに干す戦中派　森　菊江
野球児の母泥んこを日日洗う　宮﨑シマ子

調理実習洗い物だけうまくなる　大久保眞澄
罪みんな洗うつもりの写経筆　島田　誠一
ふる里へ心洗いに帰ります　松尾美智代
もみ洗いしても消えない過去のシミ　初代　正彦
ありがとう言うたび心洗われる　大内　朝子
置き手紙まさかまさかと顔洗う　村田　博
簡単に洗脳された怖い過去　上山　堅坊
やけ酒で洗い流して次の恋　内藤　憲彦
幼子の瞳にこころ洗われる　平賀　国和
さっぱりと洗髪できた病み上り　大内　朝子
絹よりも洗い晒しが身になじむ　中村　恵
川柳にはまった足が洗えない　磯島福貴子

佳

退院の垢を洗って祝い膳　萩原　狸月
白髪を洗い流して老いの恋　鴨谷瑠美子
墓洗うじわり背筋が伸びてくる　伊達　郁夫
晩酌で今日の仮面を丸洗い　山野　寿之
丸洗いしたい男と住んでいる　山崎　武彦

人

姑さんは洗い直しを知っていた　中岡千代美

地

よく洗おう孫の内緒を聞く耳だ　片山かずお

天

大の字の産湯天使の大あくび　土田　欣之

軸

居酒屋で仕事のシミを抜いている

兼題「ゆるい」　吉村久仁雄　選

ゆるそうで芯はしっかり京おんな　清水　英旺
ゆるキャラが平和日本を闊歩する　北野　哲男
ゆるい球投げて相手の出方見る　川端　一歩
まあいいかと緩いルールで生きている　上山　堅坊
ゆるめるとなかなか切れぬ赤い糸　能勢　利子
子育ては手綱締めたり緩めたり　中島　一彌
いくさより余程ましです平和ボケ　平賀　国和
優しさに触れて結び目緩くなる　伊達　郁夫
太っても安心できる服ばかり　酒井　紀華
涙腺のゆるい男で惚れっぽい　西出　楓楽
ゆるい球ばかり不敵な男だな　初代　正彦
口元がゆるんで心見透かされ　石田ひろ子
甘い汁吸わせてネジを甘くする　山本　進
さっきのくしゃみで少うしモレたかも　鈴木いさお
自分への規制はゆるくゆるくする　森松まつお
ゆるキャラとインスタ映えの観光地　宇賀　史郎
母からの小包結び目がゆるい　三宅　保州
ネクタイも緩むと本音ほとばしる　藤井　則彦
その中にいてくまモンに切れがある　小島　蘭幸
生き様も下着もゆるい方が楽　森松まつお
ババはきつ目ママはゆる目のパンツゴム　桝本　宏子
人間を達観まるいゆるい背　山野　寿之
激論へゆるい冗談吐く機転　山野　寿之
コトコトと熱の児に炊くお粥さん　平松かすみ
すいませんゆるくてのろいのは私　飛永ふりこ
平和惚け箍がゆるんできた日本　米田　恭昌
同郷とわかって語尾がゆるみ出す　平井美智子
一つ覚え二つ忘れる脳になり　指宿千枝子
母の死がゆるい絆を強くする　油谷　克己
一日をほどいてくれるビートルズ　木本　朱夏
五感みなゆるめて森と対話する　升成　好
回覧板噂も廻すゆるい口　島田　誠一
逢いに行く帯は少うしゆるい目に　安土　理恵
大仕事終えた男の頬ゆるむ　村上　玄也
後期です箍を弛めて生きてます　片山かずお
気がゆるむ隙間悪魔が這入り込む　榎本　舞夢
ゆるやかにほほえみ母は子に還る　渡辺　富子

佳

てのひらの上でやんわり放し飼い　栃尾　奏子
百歳へゆるいカーブで年を取り　松岡　篤
ゆるい罰アイシテイルと言わされる　山田　耕治
母さんはそうねそうねと笑ってる　森　廣子
手ぬるいといらいらしてる拉致家族　大内　朝子

人

ゆるりゆるりとガラスの母を抱き起こす　山崎　武彦

地

おばあさんになったゆるキャラめいてきた　大久保眞澄

天

欲ひとつ捨てると風がゆるくなる　鈴木　栄子

軸

気の緩みあっちこっちで誤字脱字

兼題「伝える」　鈴木かこ選

祖母に聞き孫に伝える数え唄　鈴木いさお
様様な技術伝える正倉院　関よしみ
阿吽の呼吸でアタック見事決め　矢倉五月
筑前煮老母から娘へと伝えます　能勢利子
伝承のおとぎ話にみるロマン　伏見雅明
伝言板消えた　私の恋消えた　小島蘭幸
十五代伝え伝えて薩摩焼　中薗清
千年の塔燦然の興福寺　土田欣之
無事帰る地球の裏へ打つメール　北野哲男
ただ黙々と伝承の紬織る　森廣子
九条の不戦の誓い子に孫に　前田紀雄
赤ちゃんは泣いて笑ってランゲージ　宇都満知子
箸袋のメモが回って三次会　上山堅坊
初春の膳をにぎわす亡母の味　磯島福貴子
木簡の文字が伝える遠い過去　木嶋盛隆
小鳥も河馬も愛を伝える声しぐさ　古今堂蕉子
宵越しの金は持たないわが家系　永田紀惠
家族だけで送りましたと喪のハガキ　村上直樹
ツイートの度に補佐官右往左往　安福和夫
悲しみの校舎の壁の泥の跡　山田耕治
再会の温み伝わる素手と素手　山野寿之
臥せる母指でマルしてくれました　緒方美津子
基礎知識伝える母のサシスセソ　津守柳伸
雨宿りの目が「いいわ」と言うている　島田握夢
強い目のハグにどきどきしてしまう　山田耕治
お辞儀する気持が人を通わせる　久保田千代
口止めをされると喋りたいわたし　山﨑武彦
言の葉に乗せると発火するわたし　渡辺富子
飲み仲間顔で伝わり縄のれん　長谷川崇明
伝言ゲーム私の耳はいま兎　初代正彦
少しずつ憶測入る連絡網　森菊江
プイと横向いて耳まで真っ赤です　栃尾奏子
どうしますだけで通じる飲み仲間　江島谷勝弘
平成の何を伝える長い列　鴨谷瑠美子
過ぐる日にガラスの靴を脱ぎました　中村惠
風船に手紙を付けて出しました　上田ひとみ
伝わってしまった私のB面　小野雅美

佳

伝統芸一子相伝衒い無し　島田誠一
手の平を背中に置いてただ無言　居谷真理子
ブラックアウトSOSと出す狼煙　村田博
コラーゲンで遺伝子組み換えは出来ぬ　澤井敏治
ごねられる予感発車の寸前に伝え　島田握夢

人

遠くからいつも見守っているのです　中岡千代美

地

伝統を舞う夜神楽の美少年　土田欣之

天

瑠璃色の窓辺にふっと参ります　上田ひとみ

軸

じんわりと重ねた手と手から蕾

兼題「無茶」　小島蘭幸選

五十年妻を一度も褒めてない　福田好文
辺野古基地反対無茶は言うてない　川端一歩
無茶してた父がやさしく母介護　松岡篤
ハローウイン若い仮面が無茶をする　米田恭昌
無茶言うて甘えた頃が懐かしい　大内朝子
月旅行今からお金貯めている　榎本舞夢
ウィーンを目指す音痴なバイオリン　栃尾奏子
現場を知らぬお偉いさんが無茶を言う　片山かずお
恋人の無茶試されているらしい　山本希久子
無茶無茶においしい秋を食べている　指宿千枝子
兄ちゃんはイヤだ赤ちゃんに戻りたい　上田ひとみ
まだいまも女人禁制なんていう　山岡富美子
ギャフンというとこまで無茶をした若さ　山田葉子
遺産分けうるさい義母をつけてやる　中川ひろ介
先生が一たす一を三という　坂裕之
私かてたまに投げたい皿茶碗　森菊江
無茶振りを耐えて笑えるようになる　坂裕之
無茶もした企業戦士の棒グラフ　初代正彦
少数を無視した多数決の無茶　坂上淳司
茶茶無茶になったわたしの自尊心　中村惠
無茶と無理教わる甘くない世間　津守柳伸
あなただけ愛することは無茶ですか　小野雅美
無理無体無茶が新たな道開く　吉村久仁雄
無茶したらあかん　長生きせなあかん　平井美智子
アチャコさんの口癖死語になっている　松原寿子

必ず優勝と矢野言わされる　島田　握夢
もう無茶はしません家で飲んでます　片山かずお
太陽光止めて原発動かすか　江島谷勝弘
無茶しよる俺より器大きいな　居谷真理子
皆勤賞無茶をした日もありました　三宅　保州
無茶をした若さに滾る血があった　水野　黒兎
物腰柔らかく無茶を押し通す　能勢　良子
私でも出来るだろうかチャリスマホ　新家　完司
無茶苦茶に騒ぐことなどなくなった　鴨谷瑠美子
高速道前から車やって来た　藤井　宏造
ワンクッションおいて見ている孫の無茶　山本希久子
若い頃の無茶が今頃役に立つ　松尾美智代

佳

ピストルへ徒手空拳で立ち向かう　川端　六点
無茶だろかもいちど夫に抱かれたい　今井万紗子
無茶をする男の淋しげな背中　森田　旅人
ハーバード目指せとうちの鳶に言う　西出　楓楽
モナリザの笑みで夫の無理を聞く　渡辺　富子

人

無茶はもうやめて人魚姫に戻る　鈴木　かこ

地

一ヶ月ずっとモツ鍋食べている　新家　完司

天

無茶をした父もこの世にもういない　今井万紗子

軸

無茶ばかりして来たふくらはぎ笑う

句会燦燦

川柳塔まつり句会を読む　弘津　秋の子

正解はマーブルチョコの掴み取り　郷田　みや
カラフルな薬で今日も生かされる　西川　更紗

第二十四回川柳塔まつりに参加。耳から聞く川柳を書き留めて楽しむ。すっと頭に入った二句である。

カラフルな女の好きな冷奴　古今堂蕉子

「ひややっこ」の着地の言葉選びに唸る。会場も一瞬どよめく。白一色の豆腐とカラフルな女の対比も面白い。

おはようを配って今日を立ち上げる　松本　柾子
最高の笑顔で配る内祝　大内　朝子

作意を感じさせない句である。そこが凄い。

「ぱぴぷぺぽ」配ると踊りだす「は」行　喜多　妙花

書き留める手が一瞬止まる。リズムが面白いと耳が言う。

ぎんなんを配りおわると秋じまい　森中恵美子

秋に酔う。句に酔う。公孫樹の呟きが聞こえてくる。また来年お会いしましょう。

パソコンに棲んでいるのは大泥棒　浜　知子

兼題「不思議」の天位の句である。大泥棒を持ってきて不思議の魔力に打ち勝った句である。

どんぐりの仲間やさしい芯がある　寺井　弘子

ほっこりとさせてもらった句。会場内も優しさに包まれる。

カメムシが頭の芯に棲んでいる　新家　完司

「カメムシ」の言葉に笑いが起こる。呼名の「カンジ」にまいったなあとまた笑う。

やさしい人と暮らしていると風だより　島田　明美

兼題「男と女」の天位の句である。風が囁く忘れられない人の消息。幸せであれと祈る時に人は人らしく生きてゆけるのだ。しみじみとした空気の中で句会終了となる。

柔地柳壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

和歌山三幸川柳会　楠原　富香報

阿弥陀様の柔和な顔に救われる　保　州
褒められたことなどはない油虫　和　子
わだつみの声をひもとく八月忌　幹　子
ネグレクト許してならぬもみじの手　純　子
平凡な一日まっ白な日記　知　香
ほめながら今日も介護の日々送る　当　代
平和だな金魚の餌を買いに行く　ひろ子
ボディブローやんわり効いてくる小言　義　雄
八月の井戸はときどき覗かれる　智　三
喝采を浴びた男が居なくなる　次　根
ほめられて見られて金魚しな作る　碧
平凡な暮らしの中にある平和　起世子
褒められて育つ西瓜は甘くなる　日出男
撫でられて痛みのひどくなった桃　俶　子
柔らかい桃につついた跡がある　美枝子
人間に逢いたくなってきた花火　宏　夫
節くれた手も柔らかに母は老い　菜　摘
ホスピスを包む空気の柔らかさ　千　鶴
柔らかい土が豊作生んでゆく　敏　照
日々平和仏と暮らすことに慣れ　明　子
柔らかい物腰丸くなる心　絹　子
人間の幅を示した柔らかさ　准　一
お疲れ様涼しさ添える冷や奴　あき子
ほめられて同じポーズを取っている　美　羽
負けたって褒めてあげたい球児達　一　雄
辛抱とその気にさせるほめ上手　昭　枝
柔らかい乳房押さえるもみじの手　宏　枝
しなやかなハートで佳句を紡ぐひと　ま　き
泣かないと決めた自分をほめてやる　よしこ
衣食住足りて平和が欠伸する　富　香

川柳塔すみよし（大阪）　森松まつお報

台風で意外な被害大損だ　廣　子
意外やでうちの娘嫁に行くと言う　美世子
うちの子が意外も意外優等生　シマ子
連れ合いが頼りになった豪風雨　満知子
意外でした大阪に台風が来た　勝　弘
深夜帰宅妻が笑顔で待っていた　久仁雄
顔からは想像できぬシャイな彼　満　作
皮下脂肪一枚ぬぎに行くサウナ　日の出
きれいです矢張り効果が出ましたね　舞　蹴
百歳体操効果出て来た足軽い　舞　夢
尽くせどもハートのキイが外れない　喜与子
残り日を自身で決めて有意義に　ミナ子
呆け防止今日もスタコラ句会場　たかこ
妻の丁寧語に縮み上がる僕　宏　造
高い程効果ありげな化粧品　公　平
サプリよりバナナ一本食えと医者　一　歩
気が重いと考えているより実行よ　喜久栄
けちくさいことは御法度月の旅　ふりこ
けちになろう無尽蔵ではない資源　ゆみ子
やりくりの上手い妻だが超どけち　理　恵
工事費をけちって家が傾いた　直　子
いざのためケチって貯める内助の功　里　子
鮮やかな手腕で魅了するどけち　美　籠
けちけちと言われようとも志　朝　子
でかい夢語ってすするかけうどん　(矢)五　月
くすぶって田舎暮らしが性に合う　民　子
言えぬままくすぶったまま悔いばかり　大　子
握手した手からくすぶるわだかまり　進
彼の国にいまだくすぶる戦後処理　俊　雄
雨降るし行くとこないし昼の酒　克　己
くすぶった心に夕陽笑ってる　芳　香
燻製にされても烏賊のいい風味　いさお
酒癖の悪い客に焚くバルサン　ひろ介
くすぶった火種あるから生き延びる　雅　美
ちわ喧嘩くすぶりながら三日たち　重　信

川柳塔みちのく（青森）稲見　則彦報

人前で話すことなど不向きです　久美子
男だと胸毛ちらっと披露する　風来坊
秀才の答と違う書き替える　則彦
ペットたち上から目線やめなさい　吹喜
獣医師を好きでお辞儀をするペット　劦
紫陽花のピンク本音を伏せたまま　芳生
マジシャンは種も仕掛けもちらつかせ　京子
一瞬の雑念見抜く座禅僧　重虎
書斎には不向きな本が置いてある　冬道
晩酌にちらっと寝酒追加する　一呑
ＩＴは不向き昭和の石頭　慕情
本音にも建前少しふりかける　隆樹
引出しの奥で宥めている本音　黙人
路地裏のあちらこちらに捨てぜりふ　美鈴
追い風の時は苦手を忘れてる　洋子
のれんからちらりと見えるざわめきが　孝子
ペットたち私逝くのを待っている　柳子
晩年は妻のペットになるつもり　ひとし
北の人本音隠して握手する　小とみ
九官鳥に妻の悪口覚えられ　初枝
本音なら墓の中まで持っていく　のぶよし
ペットロス旦那の時はどうだろか　英子
芸無しの僕に猿真似出来ません　呑舟
愛犬が俺より先に飯を食い　龍馬

夏の入り口私という字考える　真由美
旬の山お互い怖い人と熊　ふさゑ
タブンタブン頭の酒が重すぎる　花峯
努力とはいえぬ結果の出ぬ限り　霜石
早朝の薄焼きたまご運動会　和香子
まだ誰も幸せにしていないボク　規子

はびきの市民川柳会（大阪）中川ひろ介報

沖縄の人の心に寄り添おう　雄太
下積みの苦労実った背番号　みつこ
寄り添うてなお寄り添うている絆　壽峰
引き籠もる子に寄り添って時を待つ　ちづる
起承転大往生へ辿る結　欣之
早起きをするから早く眠くなる　いさお
寄り添えば自由が良いと言う気儘　大子
寄り添えば添うほど妻は冷めていく　久仁雄
一本の傘で寄り添う老い二人　清
並走者選手に添って走り抜け　正義
寄り添って歩く人生長丁場　髙鷲
甲子園の土で実った粘り腰　冬のト
ワイン手に巨峰の実り目に浮かべ　瑠美子
七転び八起きの果ての大荒野　専平
寄り添って眺めた頃あり天の川　久仁子
年とれば取る程故郷想起する　シルク
早起きは歳のせいかもしれません　千鶴子
寄りそって歩く相手がみつかった　真

岩佐ダン吉　選

多数派というが烏合の衆だった　いさお
大の字に寝て群青の空仰ぐ　清
墓石に賞罰なしと彫っておく　実
仕方なく拾った猫に癒される　恵美代
台風のお詫びの様な月の冴え　哲男
終戦日「深い反省」重く聴く　国和
すらすらと口から嘘が出る不安　郁子
全身の汗に飾りも嘘もない　弘委智
忙しいのに涼しい顔をしてみたい　葉子
比べないと決めてからまだ負けてない　昭

佳句地十選（11月号から）

西口いわゑ　選

お裾分けなんて嬉しい花の種　徑子
母と子のフォークダンスや赤トンボ　千里
一言を添えて注がれるうまい酒　すみれ
朝顔の名残りを惜しむ濃むらさき　志華子
シルバーは終った人と違うのだ　盛夫
月天心嘘つきません天も地も　ばっは
花を見る余裕が出来た下り坂　修平
平均というぬるま湯に慣らされる　見清
生きるっていいな夕立のちに虹　天翔
一番は私誰とも比べない　ダン吉

母ちゃんに寄り添い喧嘩などしない　さくら
寄り添った日々も過ぎゆき半世紀　洋一
雨降らずやっと実ったミニトマト　フジ
なつかしい校舎を前に起立　礼　喜久子
満塁で起死回生のホームラン　一文
寄り添って山川越えた共白髪　泰子
猛暑にも負けず実った元気米　ひろ介

竹原川柳会（広島）　古田　太虚報

よたよたと歩む八十路へ風が押す　弘子
歩く歩くトトロの森へ着くまでは　比呂子
恩返し奉仕の道を歩む人　宣之
老い一人歩ける内に歩かねば　規代
こつこつと歩いた道は裏切らぬ　栄香
リハビリであの橋までは歩くんだ　半徳
青空と歩くと腹が空いてくる　蘭幸
這った歩いた歓喜こぼれる母子手帳　淑子
子は親を選べず又の虐待死　輝恵
絵本選び至福の時間孫といる　千代美
経験と勘で選んで今がある　夢香
引き下がることも選択肢のひとつ　昭紀
台風が日本選んで困らせる　幸子
絵手紙の秋へ私の海をたす　鬼焼
自転車みがく秋の島めぐる夢　敬子
どんぐりの秋は足下からころり　笑子
真っ白いこころで秋をつかまえる　寛

アナウンサー少し早目の秋を着る　慶子
山や川ブルーシートのまま秋か　白狐
グランドスラム精神力の強さ見る　歩美
雑草が伸び放題を亡夫に詫び　汎美
手を振って逝ってしまったちびまる子　厚子
月を持つ待宵草と私と　貞子
未来描くキャンパス元の色は白　史子
かみなりさまちょっときゅうけいしてください　三歳　ちか

川柳塔なら　大久保眞澄報

けなすより褒めて育てた子の未来　萌子
けなし合いに決着つけたかオキナンチュー　文聡
けなされて意地でつっぱり生きて来た　賛郎
虎これ以上けなしようない不甲斐なさ　恭昌
人を貶す前に我が身を検める　のぶよし
けなされるたびに私がジャンプする　ふりこ
年重ねけなす人生こりごりだ　おたか
くそみそに貶しているが惚れている　盛隆
けなされた絵画言葉を深く聞く　美智子
けなすだけなら易いぼくでも出来る　倫
子育ての辞書にはけなすことばなし　富子
安寧の世に馴れ不安よぎる日々　和夫
安心して話せる人のそばにいる　辰雄
安全速度しっかり守り遅刻する　よう子
日々安穏大台風に活もらい　敬子
安いって不味いという字透けて見え　優

墓前にて父母安らかにと香をたく　寿子
趣味の会終えて安らぐ縄のれん　堅坊
安らかにお眠り金魚埋めてやる　理恵
格好つけニートと名乗り職持たず　比呂志
うっかりとど忘れしても生きてます　妙
さてさてと飲んだ昨夜がでてこない　崇明
コーヒーと思案に暮れる置手紙　恵美子
この秋も食べてないのが一つある　勝弘
さてさてと考え巡る今日の飯　光堂
さてさてとどのように観る抽象画　展代
まだ美人鏡の前でひとり言　すみれ
納得をしたのか毬がよく弾む　國治
安倍内閣閉店セール目玉なし　紀雄
この歳になって納得　父の語彙　成子
妻の一言納得できぬまま三日　万紗子
そうなんだ大人の事情が裏にある　行久
王様はハダカさて君はどうします　眞澄

川柳茶ばしら（愛知）　関本かつ子報

夫には内緒昔はもてたこと　まみ子
表札にまだ親の名が生きている　遡行
付けられた名前通りに生きられぬ　三樹夫
避難所は形ばかりの無理な場所　美千代
三本締めの総会終わりさあ酒宴　雅美
大泣きをして棺桶は安い方　かつ子

わかあゆ川柳会（島根）　松本はるみ報

もう少し主役の椅子はゆずらない　安　子
森と海人間生きる糖となり　昌
わくわくとさせてはずれの宝くじ　かつ子
ランドセルわくわくとした背でおどる　はるみ
イケメンのリハビリ指導しびれてる　ハル子
歌にある憩いの森はいづこへか　恵美子

京都塔の会　山田　葉子報

隠されて隠して赤い糸の行方　多津子
過去のこと全て日記に伏せてある　千　代
隠しても無くて七癖生きる様　元　一
最後まで隠し三途の川渡る　英　旺
要チェック嫌ねと経理担当者　福　子
スケジュール再度チェックのふがいなさ　ふりこ
パソコンも書類チェックは出来ません　弥　生
文春に何時もチェックをされている　五　月
非常口まず確認のチェックイン　欣　之
まずは「敬老」ケータイ財布そして杖　弘　之
チェックインしても燃えないフルムーン　則　彦
名句ひとつポカリ湯舟に浮いたまま　哲　子
四人の仲間私一人になり淋し　ルイ子
げんこつの中に鼓動を閉じ込める　昭
パワハラに着地乱れるレオタード　公　子
派手を着る私一人の試着室　保　子
夢あまた終着駅はまだ遠い　万紗子
お気に入り毎日着ても飽きません　葉　子
着物きた母の遺影が懐かしい　泰　夫
よく眠るそんな貴方の着地点　知　栄
男と女ぞっこん惚れた方が負け　朝　子
ぞっこんになったら負けやあっぷっぷ　宏　子
怪我は覚悟ぞっこんだから会いに行く　光　久
ジャニーズにぞっこん惚れて若返る　忠　子
ぞっこんとまではいかない人といる　求　芽
ぞっこんと言われて嫁に来た筈が　満　子
希林さん貴方にぞっこんありがとう　益　子
ライバルに内緒エステにはまってる　洋　志
正直に生きているかとチェックする　義　昭
スマートに隠せないのでセミヌード　正　彦
人生の最後の着地〇にする　弘　子
ここまでは無事にきましたあと着地　美津子

川柳塔唐津（佐賀）　仁部　四郎報

かかりくる電話とらずにやりすごす　實
加速して来た実感の昨日今日　蜂　朗
靖国の砂利は軍靴の音がする　高　明
やはりそのおカネが欲しい八十路坂　四　郎

南大阪川柳会　松岡　篤報

読書週間こころの糧を実らせる　弘　子
身の丈に合っております文庫本　あや子
文庫本活字小さく斜め読み　峰　子
待望の文庫本には血がたぎる　弘委智
文豪の並ぶ自慢の文庫本　あさ子
ぼくの人格つくってくれた文庫本　たもつ
笑い袋何時でも持っていい笑顔　ルイ子
昔から変わっていない土嚢積み　勝　弘
給料日袋が立った昭和の日　実
欲しいのは咄嗟にひらく知恵袋　高　志
義理の二字背負うしんどいのし袋　志華子
想定外割れたガラスの後始末　柳　伸
原発で町が二つになる不幸　一　歩
総裁選今だけ割れる安倍石破　和　雄
腹筋が六つに割れるよう鍛え　直　子
屋根や窓割れて保険屋青くなり　篤
叩いても蹴っても割れぬ石頭　歌留多
揺れながら虹一瞬のシャボン玉　裕　子
ポッペンをペコペコ鳴らす中華街　柳右子
ペコペコの形見の鍋で母の味　ひさ乃
上司にはペコペコ部下によく怒鳴る　修
子の為だ米搗きバッタにも成ろう　克　己
赤ちゃんのペコペコ余り押さんとき　東　風
腹ペコの思い出ばかり敗戦忌　楓　楽
愛想いい女将も暗い過去を持つ　いさお
暗い国が明るくなった終戦日　国　和
暗闇で迷う私とすれ違う　郁　夫
暗雲の道朝一条の光射す　亜　成

プラザ川柳（大阪）　梶原　弘光報

秋まつりだんじり様のお通りだ　おかめ
医療費にこつこつためた金が消え　正子
こつこつと貯めた栄養腹膨れ　和代
こつこつと男が築く土性っ骨　克三
漏る茶碗はてなと妻は首傾げ　弘光
何もかもお茶碗一つ済ませます　五月
茶人でも朝は手にするティーカップ　政夫
ぜい肉も寄せブラジャーに包み込む　淳司
不機嫌な包み足りない盆の布施　修
オブラートに包んだ苦言胸にズキ　清乃
上司から貰った言葉包み持つ　悦夫
ダイヤ婚縁つないできた証　久美子
暖炉焚く襟裳しばれる北の春　一彌

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

思案中もらったきのこ行く末を　綾子
疚しさがかすみ網からもれている　小鹿
一期一会この繋がりを明日活かす　裕
また一人きのこ雲見た人が散る　好幸
女子会の凄さ一円までも割り　ゆり子
疚しさを包むザクロも口を開け　すみれ
一等もブービー賞もむずかしい　実満
二番ではダメですと言う梨と蟹　弘子
一番はないが結構幸せだ　鈴

一隅を照らすローソクには成れる　盛桜
ついて行こ一元さんはお断り　孔美子
大物と言われているが気は小さい　文道
疚しいがお得意さまよ大事です　和子
一歩目がなかなか出ない勇気だせ　草文
腹一パイ秋の味覚のきのこ汁　かおる
キノコ三昧秋の味覚の土瓶蒸し　みさ子
茸食べ笑って暮らす人となり　恒
一日に何回も言うありがとう　拓庵
昭和史に消えぬ頑固なきのこ雲　満
焼き鳥の悲鳴聞いたか幾万羽　蟹郎
飲み過ぎた疚しさ提げて朝帰り　照彦
団欒は五分も要らぬ遠い耳　茶子

川柳同友会みらい（鳥取）吉田　陽子報

天災は隣りあわせと覚悟する　紫音
大丈夫そんな場所など無い日本　みどり
正義通らぬ世直し神に問うてみる　和代
天災に嘆く農家の眼は同じ　三郎
スクワットささやかな夢追いかける　章子
読むほどに怖い薬の注意書き　海希
てんやわんやの波引いて二人きり　葵
前向きの我に追い風きっと父　省吾
立ち位置をずらし明日の風を聞く　武志
老いの手がATMに急かされる　清春
リハビリの熱意義足に血を通す　耕一

愛が何か詩集を読んでみましょうか　れい子
眠るとき育てた花の下がいい　美恵子
有る無しじゃなくて力を振り絞る　陽子
思いやる終焉今日も流れ星　菜美
振り向くと薄い足跡しか見えず　游子
丁寧に言い訳をして仕事せず　公弘

川柳ささやま（兵庫）　北澤　稠民報

一休みしながら老いの坂登る　かほる
錦秋と枯葉違い出る後期　哲男
平成史天地異変で終わりそう　稠民
孫いない第一子供いないもん　さゆ子
ジレンマに襲われてますこの体調　幸子
いやな奴が来るのに逃げ道なし　善輔
親に似て息子も嫁の言うがまま　剛
鬼嫁から避難してます屋根裏へ　重男
老いは突然気付いた時はもう遅い　喜弘
素晴らしい地球の旅を果てる迄　照代
台風を見ぬ振り遠出孫に会う　良子
希林さん人の心へ住まい変え　美智子

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

塾帰り家路を照らす星月夜　柳童
金婚の妻の手料理星三つ　奈津子
星の花園みたいプラネタリウム　一弥
真夜中の散歩星座も多くなり　孚彦

光年の時空を越えて星光る　守啓
迷うとき羅針盤めく父の星　黒兎
食べ頃の豚ではあるが可愛らし　信男
ふうふうをしてから母はアーンさせ　正子
食糧難知る老いにない食べ残し　久子
お茶漬けで今日の迷いを流し込む　美佐子
食べる話出来てるうちは呆けてない　則彦
発表会ドレスばっかり誉められる　春代
女子会から老人会になった歳　桂子
緊張で舌がもつれた読書会　順子
ひしゃくには零れんばかり夢を汲む　純子

川柳あまがさき（兵庫）　大浦　初音報

熟れた柿どうぞお採りと過疎の村　純
小ぶりでも秋刀魚を二匹買いました　厚江
尼崎城出来てうれしい尼に住む　柳明
真夜中のまちがい電話にホッとする　菊江
瞬きもせず肉眼で見た火星　たみえ
この歳になって半分青いまま　初音
バカバカと胸を叩いて泣いた妻　新録
のんびりと牛車に揺られ姫になる　(高)千賀子
レジの列帽子目深に被る老　歌留多
リュウグウは石ころばかり姫は何処　英坊
美人から人畜無害のお墨付き　健二
それぞれのドラマ抱えた深夜バス　祐康
善と悪入り乱れての夢の中　真桜子
叩いても忍者の如く蚊は消える　りこ
ひとり酒孤独にたえる夜の雨　紀華
スマホの窓で繋がる若い夜光虫　公子
叩かれて煩悩吐いている木魚　(竹)千賀子
一期一会秘仏松茸ゆっくりと　ひろ介
ダブダブの服の隙間へ夢を入れ　雪菜
ビリやのに監督辞めぬタイガース　正和
終い風呂一句じっくり茹で上げる　万彩
草食系背中どやしてやりましょう　耕治
秋の蚊をゆっくり叩く後期の手　かずお
いい夫留守で元気でよく稼ぐ　海童
可愛いと言われて悪い気はしない　美籠
叩いても髪の毛生える訳がない　(谷)修平
石橋を叩き忘れて詐欺にあう　宏造
仰ぐ星みんな私の好きな人　哲夫
魂を売ってはならぬ修羅潜る　ヨシエ
ほとばしる叫びのようなばち捌き　ひとみ
生きるため甲羅干しする池の亀　(入)修平
懐かしい夜店は夢も売っていた　靖鬼

西宮北口川柳会（兵庫）　藤井　宏造報

ひとつ忘れひとつ憶えて季の移る　千代
目に沁みる友逝った日の曼珠沙華　りこ
どこが違うのか4Kに8K　勝弘
トラ巨人尻尾踏ませず三連覇　弘委智
告白のレベルが変わる酒の量　正彦
蛇と出るか般若と出るかいざ八十路　弘子
田舎のバス砂利道走る向い風　紀華
ざらざらの特異な声が受けている　光久
ジーンズのざらざら感のある男　盛夫
したたかにしたたかに水飲んでこそ　美津子
待ちわびて早め早めにする準備　敦子
したたかに手は汚さないカラスの目　恭子
したたかに生きる女のつけ睫毛　郁夫
身の丈のあったしたたか秘めている　順子
したたかに生きておいとました希林　千賀子
したたかな相手を攻める回り道　浩司
新元号早く知りたい年男　野鶴
縫う前に針に糸が通せない　新録
なあトラよ早くはないかビリ決定　武臣
母さんのほころびそっと縫うておく　哲子
縫い付けた女の口はすぐ解け　宣子
共白髪夢のつづきを縫い合って　和宏
あなたとはほころび縫ってまた友に　みよし
早朝の露のしずくや墨をする　伯備
仰臥して語り終えたか油蝉　靖夫
海の砂付けて男の子が帰る　千津子
着る物はみんな手縫いで着せた母　嘉代子
嫁ぐ娘が身代わりに置く縫いぐるみ　忠夫

縫わないでジーンズの膝これがいい　邦夫
しっとりと汗ばむ乳房まだ女　野薫
ざら紙に走り書きしたラブレター　良種
綿菓子はザラメだったね秋まつり　喜明

川柳塔まつえ吟社（島根）相見　柳歩報

健脚も騙し騙しの空の旅　草庵
足しげく通って馴染む縄のれん　豊仙
継ぎ足した辺りで何か揉めている　美智子
考えてこれでいいのだ亀の足　雪代
足跡を消せぬまま来た待ち合わせ　孝子
足だけは真っ直ぐ若い頃のミニ　禮子
夕焼けの輪郭おぼろおぼろにて　芳山
輪郭も角が生えてる回れ右　とも子
輪郭がぼやけ始めた飲み過ぎだ　みちを
張る前の障子の枠の弱り顔　瑞人
自画像の輪郭太い線で描く　徳利
印押せば怪獣となる白い紙　桂子
ゴジラにも看なけりゃならぬ親が居る　弘充
この私怪獣が棲み暴れだす　輝山
神技だいや怪獣と褒めちぎる　左余
大坂はあっという間に怪獣ね　朋子
親も子も意見いろいろあって良い　米估
悩みごといろいろあるが前向きに　あきら
ボランティア美しい空同じ空　青帆

性格の悪い美女なら捨ててよい　柳歩
美の特効薬に笑顔足してみる　寿代

川柳花の輪（大阪）　岡本　薫報

目で盗めコツは教えぬ師は無口　みちる
あの人がオーラを撒いてひきあげる　笑子
子育てに愛さえあればコツいらん　あや乃
笑顔だけは撒き散らしても害はない　薫
ぬくもりの愛を撒いてるボランティア　泰子
コツはない努力あるのみコツコツと　正太郎
土俵場心しずめて塩をまく　やすの
撒いておく愛の泉が枯れぬうち　亜成

岩美川柳会（鳥取）　山下　節子報

ばあちゃんは天国じいちゃんは地獄　完司
何故だろう劣性ばかり親ゆずり　弘六
やさしさを忘れ乾いてゆく私　一瑤
伊達に歳取ってはいないおばあちゃん　天翔
論争に負けて舌打ちして帰る　一粋
朋友の乾いた文字に納得す　一平
ドライフラワー昔の色に戻りたい　美恵子
船頭はいらぬツーカー親子船　蟹郎
被災地の乾く心に妃のやさし　たぬ
真心も伝えられない舌足らず　菖子
乾くまで辛抱しろとコンバイン　幸安

バアちゃんの役はピカイチ希林さん　敏子
親祖父母みんな立派な団子鼻　茶子
汗かきの汗も暑さでもう乾く　雅女
生乾きなんて知らないランドリー　真理子
五臓六腑乾き過ぎだとやかましい　振作
あかんべえついでに舌も出しておく　彰夫
舌の上コメント一つ乗せている　千代
舌先がチョット滑って大バトル　凱柳
産声に親になったと認めあう　節子

長柳会（大阪）　辻村　ヒロ報

わらべ唄遠き乙女の弾む声　ヒロ
劇場で前に座ったでかい人　登美子
味守る一徹親爺手打ちそば　洋二
天高く心も弾む秋の空　靖博
教養が邪魔して前へ進めない　敬二
師を芯に持ってたおれる気がしない　旅人
停年後邪魔と言う字が横たわる　和子
ここまでと包み隠さずぐちこぼす　千代
秘め事を包む心のあたたかさ　ゆき
失敗も包み隠さぬお人好し　三和子
夕焼けに古傷そっと包まれる　和代
包装紙に負けぬ中味の心意気　ふみ
大家族包む祝儀は半端ない　光弘
ブランデー両手の中で香り立つ　淳司

柔らかな笑みで周りを包む人　ともこ
八ツ当り割れた茶碗が恨めしげ　幸子
茶柱の立った茶碗を夫に出す　孝
茶碗酒豪快飲み干しほれなおす　弘美
新米と秋刀魚で踊り出す茶碗　英美
目と愛で虫の音愛でつ茶碗酒　直樹
襟足に惚れてあなたが好きになり　正博
ときめいた春は駆け抜け思秋期へ　福子
ときめいたあの日の君は医者通い　孝代
思い出は甘い恋より苦い恋　隆明
恋しくて恋しくてでも許されぬ　由夏
恋をした人のおしめを替える老い　正美

八尾市民川柳会（大阪）　中薗　清報

わだかまり解けて握手の温かみ　耀一
天神祭よいのよいで川渡る　涼子
竣工し現場見渡す感無量　卓郎
図書館は時計の針を狂わせる　みどり
コスモスの迷路を抜けた秋日和　あかり
形見分け情の息吹を吹きこまれ　妙
生き様の縮図ありあり介護棟　高鶯
すっきりとすべてを捨てて第二章　森子
遥かなる大地遥かに大宇宙　壽峰
何も無い部屋に小さな句読点　恵
灼熱の背中を押したのは初秋　欣之
深くなる秋の絵筆は黄金色　かこ
土に生き土に塗れて土へ逝く　寿之

倉吉川柳会（島根）　竹信　照彦報

台風を射止めりゃ凄いノーベル賞　康子
飽きもせず毎週寄るぞ台風メ　次男
あの人もホラ吹く元気もう無いよ　瑞子
稼ぎなく使わぬことを旨とする　雄大
稼いだ金デイサービスで小出しする　日出子
大稼ぎ遺産相続もめにもめ　由紀子
稼ぎなく支給日待って好物を　智恵子
留守番も稼ぎのひとつ知ってるの　風露
生きている限り稼ぐと空元気　祐子
百歳まで滅法ゆるく行くつもり　萩江
油断すな滅法怖い活断層　酔芙蓉
わたしなり盲滅法生きて喜寿　けいこ
布団無い滅法阿保だクリーニング　恭子
とっぷりと夕日飲み込む地平線　龍枝
ぬるま湯にとっぷり漬かり痴呆症　石花菜
美男子にとっぷり惚れ込み丸裸　紀美恵
安倍疑惑とっぷり暮れる闇の中　玲子
とっぷりと日暮れた後はわが出番　鬼一
一人っ子とっぷり受ける親の愛　茂夫
とっぷりと浸かる混浴足湯だけ　野蒜
滅法な幸せ五体満足だ　照彦

川柳塔さかい（大阪）　内藤　憲彦報

いい話でしたわたしの早合点　扶美代
ラブレター貰えば友へ渡してと　雅美
犯人を巡礼と見た早合点　光雄
出産と入院間違え恥をかく　舞夢
おめでとう聞いたら猫の子が産まれ　さくら
飛んで行き来週だったクラス会　憲彦
自信たっぷり成長の子が頼もしい　唯教
九十年生きた自信の丸い背な　志津子
惚けてないなんて自信は無い昨今　五月
ロボットに自信のキャリア奪われる　憲
あれこれと試行錯誤の自信作　廣子
背をポンと自信持ってと母の檄　みつ江
食品はやっぱり産地チェックする　澄空
金あるか確認をして立飲み屋　(向)清
タータンチェック初恋の匂いする　美津子
健康チェック出て来てますよ認知症　としお
出入国のチェックは要らぬ渡り鳥　俶子
定期検査しても天寿は変わらない　敏治
チェックしたのに駅で気付いた忘れ物　ゆみ子
自信家の夢の先には月旅行　佳子
レトルトにひと工夫して自信作　輝子
復興へ勤勉と言う熱い自負　誠一
たっぷりの自信天狗の鼻になる　進

それまでの自信崩れる肩たたき　雅明
戦中を生きた自信が糧になり　妙子
過信から人が狂って毒をだす　富夫
島根の旅先ずは出雲へ願い事　(綾)清
習慣か枕替われば眠れない　素頓馬
しっかりと真似して生きる粘り腰　みつこ
震度7真っ暗闇の寝入り端　愿
新規ゼロまた減っていく年賀状　時雄
喋ったらマドモアゼルがネーちゃんに　世紀子
白黒をまだ決めかねて葱刻む　和夫
真相は真っ暗闇に眠ってる　玄也

城北川柳会（大阪）　近藤　正報

社会面斜め読みして吐息つく　満作
荒城の月を愛でつつ茶碗酒　直樹
穏やかなコーヒーミルを挽く三時　杁香
俺の句に太い斜線が引いてある　実
気が付けばゴールに居たという至福　捷二
斜め読み得意じゃないけど癖になる　縣筰
返還のゴールが見えぬ拉致家族　朝子
わが病友と思えばまた楽し　たもつ
語り部はグニャリ曲った被爆瓶　星雨
玉ネギに泣かされ磨く主夫の技　満洲夫
掘り起こす言葉一つの温かさ　宣子
会釈して互いに首を傾ける　和
真実を伝うることに要る勇気　郁夫
ゴールまだ決めず明日へ前を向く　賢子
偶然は死ぬまでないか宝くじ　堅坊
七転び八起ゴールへ夢つなぐ　洋志
人間のゴールは神が隠してる　かずお
豊作を父に伝えるお仏飯　志華子
波が来て砂のお城をつれていく　高志
生き恥をさらし本音を伝えたい　弘委智
人間の出来ない事の無い不思議　千恵子
秘伝などないよと親父照れ笑い　義昭
オウンゴールまでは大臣でかい口　和夫
伝統を守って匠貧の中　俊雄
砂漠へはテロより愛を　そして水　修
ゴールまでひたすら走る五七五　勝弘
ご機嫌が斜めになった地球軸　正

豊中もくせい川柳会（大阪）初代　正彦報

明日へと米一合を研ぐひとり　公子
ロボットにウインクされて困ってる　求芽
健気にも心の痛み隠す笑み　英旺
年金減夫婦が束になる暮らし　肇
自己中は人の痛みがわからない　健三
災害が計算にあるわが生計　武彦
成長を支えて芽出す子の歩み　時子
痛いと言ってなおるものなら言っている　多美子
砂かぶりきれいどころの品定め　健二
探査ロボたのむ観てくれ妻のハラ　英三
ロボットに柩担がす高齢化　歌留多
天空海闊伸びよ伸ばせよ子供の芽　真理子
芽ばえたら愛も欲しがるだろきっと　多津子
波静か真向かいて立つ大落暉　ヨシエ
勝ち栗が爆ぜて秋風連れて来る　野鶴
捻子一つ抜けロボットはがらくたに　久子
転ばぬよう老いの筋トレ四股を踏む　(岩)玲子
痛いとこ突かれて言うことを忘れ　見清
息子より温い会話をロボットと　満子
凸と凹がっちりタッグ組む暮し　宏造
裏のうら読むから軋むアゴの骨　正彦
過ぎたのに脳が覚えている痛み　葉子
ロボットに手術を受けて畏まる　則彦
痛い程友のやさしさ身に沁みる　美智代
目刺し焼き潮の香と居るお留守番　黒兎
お隣もそのお隣も一人の灯　耕治
ぽつねんと来し方思う青紅葉　美籠
大臣は変わる暮しは変らない　千鶴子
一輪の花活けて貧しさ口にせず　(永)玲子
新聞の隅にロボットの孤独死　雅美
好日の暮しに胡椒ちょっと足す　美佐子
好い人と思われてるぞ胸痛む　きらり

あかつき川柳会（大阪）　山本　昌代報

全員野球で民に挑んでくる気配　鈍甲
終焉が近づき興味わいてくる　たもつ

不器用で魚は刺身しか食べぬ　和雄
翼折られた鳥の見上げる空の果て　理恵
豊洲にて鮪のせりが殺気立つ　鮎子
大臣をいくら替えてもみんなポチ　万作
親の家近いけれどももういない　紀子
お迎えが近いも知らず金を貯め　喜代志
運不運有って人生万華鏡　壽峰
揚雲雀オーシャンブルー突き抜ける　高鶩
近すぎて気づかずにいた妻の情　一文
換気扇全開秋刀魚特売日　克己
生姜煮の鰯が旨い酒とろり　浩子
過ぎてからあれが幸運だったのか　信子
天国でバンザイしてる翁長さん　栄子
幸せも運鈍根がからんでる　郁子
年の近い姉妹若さを気にし合う　恵美子
富士山と南海トラフ　出番待ち　(櫻)秀夫
替わるたび妻の実家へ近くなる　敏子
まず一歩踏み出しゃ運が付いてくる　堅坊
近寄れば霞がかかる恋の文字　哲夫
退院は近い看護師笑顔ふえ　直子
くよくよしないこの大空に笑われる　穏夫
大空に国境はないイワシ雲　茶助
大空を両手ひろげて抱いている　紀乃
産声に運の選べぬ始発駅　のぶ久
秋の大空食べるくらいに深呼吸　満知子
生きのいい魚は酒を呼び寄せる　一行
魚受難海洋汚染拡大で　福貴子
運などは思わぬ蟻の汗の量　みつ江
大空の雲はいつでも聞き上手　ひろ介
大空の下　人間が揉めている　瑠美子
大空を帰るツバメよ風に乗れ　黒兎
5円拾い今年の運を使い切る　信二
灰色も黒も混じって新組閣　一歩

翠洋会(大阪)　大久保眞澄報

角度変えしかと見ている世の流れ　富子
スワ地震度胸すえたはお母さん　恭昌
儲けなど度外視しても今日の飯　げんえい
情熱の度合厳しく負けました　舞夢
老い支度もう適齢期過ぎている　眞澄
金の卵さがすプロの目甲子園　敬子
当り前のような顔してさすがプロ　義
そば打ちは趣味でするから褒められる　すみ子
社の裏も表も熟知する古参　満作
玄人の気分で歌い酔っている　千枝子
老人も希望を抱いて前を向き　善之
遍路姿一期一会の風を抱き　弘子
良薬も苦言も胸によく沁みる　日の出
大望を抱く少年らの未来　昭
人はみなチャームポイント持っている　楓楽
指摘されわかっちゃいるがまたどじる　ふりこ
貧でよしまだ手も足も動くから　志華子
ポイントはあの表情と喋り方　大子
成功のポイントやはり汗でしょう　蕉子
ポイントを稼ごう妻の肩を揉む　希久子
台風に耐えた稲穂に教えられ　和夫

きゃらぼく川柳会(鳥取)後藤　宏之報

浜育ち漁師一筋の人生　久直
明日への推進力に芋焼酎　紀の治
何事も気にならなくて老いを知る　治代
起きるのも着替えもいやだドボンの日　美智子
忍びよる朝夕涼し秋気配　ゆたか
別れ際言い難いことぎっぱりと　令位子
今迄は爪を隠しておりました　宏之
廃船の一生ここで波まくら　章
人生を百まで生きる気力です　美草
蚊をたたく壁の血痕ボク十五　瑞枝
古典的医者でまず診る爪の色　雨奇
乗せられて気張り炊いてる栗おこわ　美佐子
暑い夏よくぞここまで耐えました　菜々
友五人集いいつでも同期会　日枝子
悲しみを火にして噴くか曼殊沙華　千代
産む苦労知らず選者は没にする　美穂
合言葉私の好きな空元気　恵子

川柳大阪　山崎　珠生報

どの干支も幸せ皆持っている　芳香

高嶺の嫁夢じゃないかとつねる頬　珠生
恋心覚めて今では爺と婆　満知子
三人が寄ってもろくな知恵がない　まつお
知恵の輪を外せない男で素直　(田)ゆみ子
被災地の絆強めた知恵と汗　志津子
冷蔵庫知恵の出番や残り物　かよこ
人の知恵いっぱい借りていくこの世　(今)万紗子
ノーベル賞知恵と根気が功奏す　福貴子
いつもの角曲がるとあっキンモクセイ　(鈴)いさお
稲の穂がほのかに匂う秋匂う　美世子
芹ミツ葉匂いかぐわし食すすむ　和
和ダンスの奥で母さんまだ匂う　(矢)五月
お友達内閣戦争の匂い　紀雄
丈夫な歯親の形見の宝物　司

サークル檸檬(大阪)　松尾美智代報

まだ欲がありアンテナを高くする　智恵子
愛しくも半端になったイヤリング　いわゑ
半端ないなんて不思議な流行語　蕉子
幹事殿酔えない酒に酔うた振り　哲夫
ねばねばと生きるさばさば逝けそうで　久仁雄
にっこりと笑みを浮かべたのが返事　光久
半端では処理のできない核のゴミ　たもつ
半端ではなかった妻の反抗期　美智代
わたくしのとても半端な自尊心　扶美代
一抜けて二抜けやがては一人の絵　希久子
蟹松茸手が出ぬままに秋深む　楓楽

富柳会(大阪)　関よしみ報

秋になりきょ年のズボンゆとりなし　新之助
失敗も袖の下今日を楽しむ　文重
あの波がチャンスだったと後で知り　伸雄
足とめて花にもこころ寄せて秋　田鶴子
ノンアル日過ぎたビールがまた旨い　清
土下座してすんなり終わる妻の乱　常雄
財布の奥で眠ってばかりいるゆとり　隆充
茄子漬けの色も繋いだ母の壺　澄子
秋天のゆとり清かな風よ風　壽峰
消しゴムの波は煩悩拭い去る　高鷲
絶景へ日時計と行く一人旅　一文
何もかも許して大らかな笑顔　あかり
羊雲あたりにかなしみが消えた　かこ
AIの力を借りて一夜漬け　武人
風の彩楽しむようになりました　恵
締切にライバルからは高笑い　寿之
核心を突いたか波風が騒ぐ　よしみ
み仏へ私をつなぐ絵蝋燭　欣之
見栄を張りゆとりの裾が綻びる　森子

六甲川柳会(兵庫)　奥澤洋次郎報

月天心レッテルのない酒を飲む　日呂志
阿修羅像僕のこころに火をつけた　盛夫
祝杯に頑固な父の目がうるむ　弘華
降圧剤飲んで付き合う祝い酒　千賀子
ノーマークなおみ伸び伸びチャンピオン　廣光
色良い返事うきうき気分顔に出て　浩司
何時までも一番じゃおれぬ長男坊　憲三
来年の祝杯あげる虎フアン　洋次郎
台風にもがれた柿のつらさきく　美穂
無印が胸を張ってるのは中身　光久
祝杯はやっぱりお酒日本人　博史
うきうきと待っている間の発表日　芳江
食欲の秋を閉め出しダイエット　紀乃
祝杯へ下戸も参加のうれしい日　和子
無印は商品でなくこのわたし　邦子
年を食い二番煎じでよしとする　じろう
無印の中にキラリと光るもの　利子
二番茶もまだまだいける老二人　道子
無印の僕が尖った反抗期　真桜子
無印のおばちゃんの声的を射る　和宏
無印になってストレス消えました　和郎
息子から花キューピット照れる夫　敏夫
これでいい優しさ過ぎて二番です　弘
悩み事飲み込むような秋の天　美恵子
うれしくて祝杯の声裏返る　正彦
口惜しさは二番の席でする拍手　狸月
二番手で風向き読んでいるゆとり　武彦

川柳塔わかやま吟社　小谷　小雪報

隠しても心読まれる茜雲　京子
不覚にも読みを誤り火傷する　ほのか
いい日だな空の青さを読み返す　小雪
弁当の途中でひろう着信音　あきこ
弁当の菜に染みてる母の味　准一
働く掌父そっくりで頼もしい　まさみ
男部屋の傘立てにある女傘　紀久子
自販機も贋札までは見破れぬ　寿子
そっくりの遺伝子継いで反抗期　紀子
父さんとそっくりを聞く子の不満　冨美子
一卵性だって個性を主張する　知香
訳ありがポロリと端に顔を出す　秀子
訳あって何にも写さない鏡　大輪
訳ありの君と走った丸木橋　徑子
日記帳も二重帳簿にしています　保州

ふうもん吟社（鳥取）　両川　無限報

エピソード満載産気ずく列車　心咲
産気ずくそれでも母は田を植える　金祥
デコボコが私の脳を刺激する　善平
着地して根っ子張れよと母の声　八千代
平等に育てた子にもある格差　白兎
この俺もデコボコ道で育てられ　大

デコボコのパッチワークに祖母の味　一平
デコボコの妻の愛情乱気流　回春子
句作りの着地がうまく決まらない　房江
自然界悪の着地は栄えない　とも湖
百歳になって着地がまだ見えぬ　茂登子
着地点ズレて減点されました　楓花
ジェット風船着地は誰も見ていない　宏章
阿波踊り足の乱れが気にかかる　毅
本日は予定ない日だ朝寝坊　振作
報復はせぬが少しの距離をおく　鐘軌
台風の度に地図帳出してみる　節子
口惜しさの涙をバネに立ち上がる　美恵子
愚痴るのは止めたきれいな虹が出た　天翔
米二合明日の命洗ってる　桐子
総裁選負けは覚悟で出る勇気　由美子
幸運を掴んだ夢はすぐ覚める　昌鼓
木陰から亡母によく似た風が吹く　真理子
絶壁に咲く花恋は届かない　みゆき
主語のない別れ言葉で去ったひと　りんこ
厄介なことは一杯のんでから　一粋
総理の芽残して終えた負け戦　凱柳
回復期ついつい薬飲み忘れ　茶人
極楽へ木魚を叩く四拍子　蟹郎
そだねーと言えるはずない改憲案　隆浩
彼岸花綺麗に咲いて売ってない　勲章

帳尻が合うか余命と預金高　幸子
追伸に私の影を残しとく　一搖
団欒の器がひとつずつ欠ける　無限

さんだ川柳大会（兵庫）　田中　章子報

逃げないで日本一を目指せ矢野　正和
男でもイモタコカボチャみんな好き　宏造
一滴の涙で男の骨を抜く　和子
魅力ない男の恋は金かかる　哲男
百超えてやっと男の貌になる　武彦
L寸を着るより楽なメンズ物　厚子
父ちゃんはチョットうるさい母が好き　一子
ニッコリと笑いバッサリ斬り捨てる　はな
笑う事忘れた母を叱れない　郁夫
にっこりとしている女が喪主らしい　花門
叱ってもニッコリ笑う遠い耳　好文
にっこりと笑う医者見て怖くなる　サトミ
躓いた石に拾った生きる知恵　峰明
金拾う時は地面に手が届く　隆太
慟哭の箸で親父を拾う骨　欣介
友だちがアベさんなので無理が利く　勝弘
義理の二字無理をしました駄斗袋　たもつ
二リットルの水は無理だがビールなら　博
酒旨し少しの無理は許せそう　敏子
無理言えばうれしかったと言う返事　耕治

年頭のプランそのままもうお節　堅坊
恋路にはGPSもナビも無し　徹
浮雲に乗ってポエムの旅プラン　寿之
三連休妻には別のプランあり　哲夫
良い人は皆若死によねえあなた　正行
死んだ気で行きます月へハネムーン　美籠
良いプランだった同期と秋の駅　千津子
来世でもきっとあなたを好きになる　真桜子
長居すると何度も水を入れに来る　利子
母ちゃんは凄いお代わり三杯目　ひとみ
昔は妻が今は私が耐えている　かずお
ステップがあわないまんまフルムーン　光久
秋の空ほんまに僕は小さいなあ　ダン吉
新郎が訳も分からず読む誓詞　修平
松茸はないが嬉しいきのこ飯　恭子

川柳藤井寺（大阪）　太田扶美代報

お菊さんが井戸から出るという空き家　まつお
独り居のカップぜんざい甘辛に　絹子
近所ではお化け屋敷と言う空き家　光男
うらぶれた寺に読経の声もなく　喜代子
呑ん兵衛でぜんざいも好き二刀流　いさお
古民家にコスモス揺れて過疎の村　俶子
外人もぜんざい食べる法善寺　一文
塩ひとつ足してぜんざい味を増す　キーキー
風化した街に空き家が痛ましい　瑠美子
少子化が空き家を多くさせている　紀雄
被災地の空き家無念とローン抱く　みつこ
彼氏なしイケメン募集しています　かずお
誘い合って秋へとび出すスニーカー　シルク
童謡を歌いたくなる赤い靴　一歩
コトコトと秋の夜長にあずきたく　育代
買い手まだつかぬ空き家の花水木　扶美代

川柳ねやがわ（大阪）　籠島　恵子報

妻の手を引いていられる医者通い　博泉
お役目がすんで元気な影法師　かすみ
母介護汚いなどと言っとれぬ　ルイ子
星空や宇宙の本をやたら買う　尚世
緞帳が下りて未来のアンコール　壽峰
ご先祖とふんわり会話彼岸花　高鶯
物作りの不正が国を貶める　鈍甲
親切を看板にして騙し売り　秀雄
初入閣赤絨毯の夢の船　祥昭
新元号待ちます幸を呼ぶ二文字　武彦
初陣をあのたかぶりで突破する　修
喝采とどよめき起こる名演技　賢子
汗泥にまみれ尊いボランティア　朝子
もう一杯頼むと飯を出してくる　郁夫
信用を台無しにする不良品　高志
将棋とオセロ初陣飾り快挙生む　弘委智
初恋は何度もしたいアンコール　弘一
見下した雑魚に足首掴まれる　仁
コスモスを見せたい母は車椅子　信子
夕茜明日の空にもアンコール　麗
言ってない聞いていないと我を通す　銀杏
アンコールあるか幕を閉じるとき　亜成
ハロウィンが近い日本中がヘン　恵子

初歩教室のお知らせ

2019年1月号より
居谷真理子さんと
高瀬霜石さんが担当します。

尚、投句は従来通り誌友の方に限らせて頂きます。

原稿は必ず川柳塔社専用の柳箋でお願いします。

句会名	日時と題	会場と投句先
あかつき川柳会	9日(金) 14時締切 添える・端・交流・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
岸和田川柳会	15日(土) 14時締切 癖・過ぎる・うまい・ソフト	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
和歌山三幸川柳会	15日(土) 13時15分締切 役・畳・磨く	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川柳塔みちのく	15日(土) 17時締切 悟る・クリスマス・せりふ	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL 0172-36-8605
川柳ねやがわ	16日(日) 13時締切 席題・入院・虹・引退・自由吟	寝屋川市産業会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳藤井寺	16日(日) 14時締切 ゆったり・誰・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
川柳ふうもん吟社	16日(日) 13時30分締切 没句川柳供養大会 ちゃっかり・通販・死角・あと五分(ごふん)・四コマ・図器・使い捨て・敗者復活吟	日本海新聞ビル 詳細は本誌11月号119ページ 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪川柳会	17日(月) 18時締切 良い・明日・ぼやく・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
豊中もくせい川柳会	17日(月) 13時50分締切 勇気・焦る・あっさり 自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曽根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳さんだ	18日(火) 13時30分締切 指図・騒ぐ・ハワイ お世辞・自由吟	キッピーモール (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳たちばな	19日(水) 13時45分締切 席題・こっそり・残る・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7)TEL 06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造 TEL 06-6494-5187
はびきの市民川柳会	23日(日) 14時締切 枝・見せる・ドロン	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
京都塔の会	25日(火) 14時締切 ロス・宅・ゆっくり・席題	京都ハートピア 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勧修寺堂田70-16 桝本宏子
川柳塔すみよし	休会	

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

12月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	1日(土)14時締切 迫る・ソフト・余裕・自由吟	旭区老人福祉センター　3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
倉吉川柳会	1日(土)14時締切 ぎっしり・希望・なあなあ 席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔まつえ吟社	1日(土)13時30分締切 ケチ・籤・クジ・神・走る	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222－1　相見柳歩
川柳塔なら	6日(木)14時締切 過・ようやく・無事	奈良市立中部公民館　4F 奈良市上三条23-4　近鉄「奈良」駅④番出口　徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787　安土理恵
川柳大阪	8日(土) 14時締切 迫る・決意・さする	地下鉄・長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6　山崎珠生
川柳とんだばやし富柳会	8日(土) 14時締切 窓・労う・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ 200 m 〒584-0043　富田林市南大伴町4-1-10　池　森子
六甲川柳会	8日(土) 14時締切 守る・大根・ほれぼれ・自由吟	六甲道勤労市民センター　5F E室 JR「六甲道」駅南隣　メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4－11－11　上田和宏
川柳塔わかやま吟社	8日(土) 14時10分締切 兼題：角度・縮む・何時か 課題吟：下	和歌山商工会議所　TEL 073－422－1111 兼　題　〒649-6253 岩出市紀泉台366　藤原ほのか 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桒原道夫
川柳塔打吹	8日(土) 13時30分締切 楽園・結ぶ・センス・席題	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
八尾市民川柳会	9日(日) 14締切 本気・たっぷり・寝る・雑詠	渋川町・安中町集会所　JR八尾駅5分 〒581-0083　八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
西宮北口川柳会	10日(月) 14時締切 覚悟・なじむ・ばたばた 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602　梅澤盛夫
ほたる川柳同好会	11日(火) 13時30分締切 餅・帰る・ちらほら	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル　5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
川柳塔さかい	11日(火) 14時締切 せかせか・掃除 折り句：はかた	東洋ビルディング　4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5－171　矢倉五月
川柳あまがさき	11日(火) 14時締切 切る・味・まだ・自由吟	尼崎市女性センター・トレピエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造 TEL 06-6494-5187

柳界展望

★「川柳『潮』主催・第7回ふるさと川柳」は447名の参加。同人成績。

秀句　平井美智子
哀しみの形小さな力瘤

★「第70回西日本川柳大会」は、10月14日開催。同人成績。

（投句の部）

弓削川柳社賞　工藤千代子
身の丈で吠えろと父からの手紙

（当日の部）

岡山県川柳協会会長賞　小島　蘭幸
追われてるようで追いかけているようで

久米南町観光協会会長賞　森山　盛桜
オジサンの奇跡だ赤いハチマキだ

秀句　古今堂蕉子
空に父地に母の愛ゆるぎなし

秀句　藤井　智史
ムレータをひらり恋愛マタドール

秀句　永見　心咲
ジャグジーの泡あしたを追うかたち

★「第7回さんだ川柳大会」は、10月16日キッピーモールで参加者115名の参加で開催。同人成績。

秀句　尾崎　和子
父ちゃんはチョットうるさい母が好き

秀句　山田　耕治
無理言えばうれしかったと言う返事

秀句　野口真桜子
来世でもきっとあなたを好きになる

秀句　岩佐ダン吉
秋の空ほんまに僕は小さいなあ

★「第39回桜井市民川柳大会」は、10月21日桜井中央公民会館で開催。同人成績。

秀句　安土　理恵
こころの景色燃えておりますなかまど

★「第69回岸和田市民川柳大会」は、10月21日岸和田市総合福祉センターで開催。同人成績。

天位　小野　雅美
まっさらな明日を迎える眼鏡拭く

天位　小谷　小雪
にんげんの根っこ真下に伸びている

★「第41回神戸川柳大会」は、10月27日兵庫県立中央労働会館で開催。同人成績。

特選　上田ひとみ
あの朝の母のブラウス揺れていた

特選　上田ひとみ
陽炎をまだ住まわせている私

特選　両川　無限
半分こするとおいしさ倍になる

★「第42回鳥取県川柳大会」は、10月27日米子コンベンションセンターで参加者156名で開催。同人成績。

大会実行委員長賞　田中　天翔
山と谷折って祈って千羽鶴

鳥取県川柳作家協会長賞　上田　宣子
妖精と信じて魔女を生んだ森

新日本海新聞社賞　倉益　一瑤
わたくしの絵には大きな窓を描く

米子市長賞　斉尾くにこ
ゆるゆるとゆりもどされる葦の船

鳥取県議会議長賞　藤井　寿代
恋は今センターラインを追い越して

鳥取県知事賞　新家　完司
神様がそっと覗いている白夜

▽**動向**△

○小島蘭幸主幹は「文芸家協会」ニュースにエッセー「今日が吉日」を発表。

▽**ご芳志**△

○故塩満敏さんのご遺族・塩満恭子さんより金一封を拝受しました。

○故松尾和香さんのご遺族・松尾幸美さんより金一封を拝受しました。

▽**訂正とお詫び**△

○11月号P83、1段目19行目とP104上段29行目、森口美和→森口美羽。

▼計　報▲

○9月30日、竹口清信さん（同人・鳥取市）が逝去。享年85。

○10月21日、鶴田遠野さん（前副理事長）が逝去。享年71。

▽**新誌友紹介**△

鳥取市　**山下　京**
羽曳野市　**冬の　ト**
紹介者　川端　一歩
大阪市　**森田　明子**
紹介者　山田　葉子
仙台市　**月波　与生**
紹介者　木本　朱夏
加古川市　**吉村めぐみ**
紹介者　山口　光久
愛媛県　**玉井　勝順**
紹介者　中居　善信
大阪市　**木白喜久栄**
紹介者　松下小夜子
大阪市　**中村　民子**
紹介者　鶴田　遠野

常任理事会11月7日

①新年度役員業務分担について②第24回川柳塔まつりの評価と反省③災害時に於ける塔社行事開催ルールの検討④95周年記念基金の報告⑤95周年記念・塔誌1100号特別予算について⑥定例確認事項。

次回常任理事会＝12月7日㈮AM10時～

95周年記念事業基金御芳名

平成30年10月7日～10月31日　受付順

大阪　宮西弥生様
大阪　森中惠美子様
愛媛　宮尾みのり様
愛媛　黒田茂代様
大阪　安田忠子様
奈良　安土理恵様
沖縄　森山文切様
東京　川本真理子様
和歌山　武本碧様
大阪　岩崎公誠様
奈良　阿部紀子様
埼玉　星野育子様
鳥取　猪川由美子様
岡山　永見心咲様
富山　島ひかる様
奈良　中原比呂志様
東京　川名洋子様
鳥取　田中天翔様
松山　古手川光様
大阪　立蔵信子様
大阪　森田旅人様
兵庫　福田正彦様
大阪　針生和代様
名古屋　冨田末男様

創立95周年記念事業基金の募集は10月末日をもって終了致しました。御協力戴きました皆さまに心より御礼を申し上げます。有難うございました。

川柳塔社

高野山川柳塔碑合祀祭のご報告

平成三十年度高野山川柳塔碑合祀祭は去る十一月十日（土）に第三十回目の法要を実施致しました。幸いにも当日の高野山は天候に恵まれ、穏やかな秋日和の中、厳粛にそしてしめやかに法要が営まれました。前年は思わぬ風水害による交通遮断が発生、止む無く中止せざるを得ぬ事態となりましたが今回は前回と併せての合祀祭となりました。

合祀対象者は前回の八名に今回の六名を併せ後掲の十四名となりました。又、藤井正雄様ご遺族二名、塩満敏様、松尾和香様のご遺族の参加を頂きました。川柳塔社からは小島主幹、新家理事長、西出相談役、など十一名の参加を得、総勢二十三名での法要となりました。読経の後お坊様から倶会一処、故人との思い出に耽るのも法要ですとのお話があり、良き合祀となりました。小島蘭幸主幹からは十四名の物故者に心からの哀悼の言葉がありました。厳かな中にも心温まる思いの溢れた合祀法要でありました。

法要後の直会は新家理事長の献杯に始まり歓談と故人様を偲ぶ話題で終始し、和やかな中で散会を迎えました。

〈島田誠一記〉

法要参加の方々

合祀対象者

第二十九回

波多野五楽庵様（弘前市）
高島　敬子様（京都市）
宮園射月芳様（貝塚市）
林　瑞枝様（米子市）
恒松　叮紅様（松江市）
小林由多香様（鳥取市）
平嶋美智子様（大阪市）
松尾　和香様（和歌山市）

第三十回

両川　洋々様（鳥取市）
藤井　正雄様（茨木市）
坊農　柳弘様（大和郡山市）
上垣キヨミ様（三田市）
塩満　敏様（羽曳野市）
須郷　井蛙様（弘前市）

川柳塔WEB句会　兼題「幸　せ」

＊平抜きと佳作は到着順
＊webサイトと内容に齟齬がある場合、webサイトが正

10月例会入選句　投句数446句（228名）樋口由紀子　髙瀬霜石　共選

樋口由紀子　選

うまいもの食べる幸せまだ続く　大木　雅彦
誰だろうハートマークの考案者　龍　せ　ん
いい妻と賢い孫が四人いる　颯　来
ミシン目のとおり切り抜けぬ幸せ　雨　径
幸せでいつも押しピンはずれてる　乙川　初音
幸せはチリメンジャコの中にエビ　水野　黒兎
フランスパン噛みしめている幸福論　水木　星羅
幸せは一筆書きができません　米山明日歌
補助輪が外れペダルが風を切る　ホッと射て
幸せはフォークボールでやってくる　安西美智子
手から手へ行ったり来たり飯茶碗　十　六　夜
幸せだったことしか思い出さぬ老母　川本真理子
臍に胡麻しあわせだったことがある　西沢　葉火
シアワセの四隅の鋲を打ち直す　西沢　葉火
幸せを始発に乗って追いかける　木嶋　盛隆
幸せが売っていましたいちきゅっぱー　山口恵美子
同い年まだ大統領している　広瀬　宏和
幸せを買えとメールが喧しい　平井美智子
幸せという重機のパイロット　森下　博史
アンタが幸せやったらワタシもや　岸井ふさゑ
幸せは両手拡げた範囲まで　福　多　郎
戦争の手記は書かずに終われそう　高浜　広川
幸せのようなものならコンビニへ　尾崎　良仁
小籠包の海で溺れて死ぬ覚悟　秋　鹿　町
幸せは三秒間で消えていく　松長　一歩
幸福度100%柿もらう　丹下　凱夫
運がいい人と乗ってる飛行船　夏川　涼子
コロッケが好きです幸せなんです　一　葉
天高く幸せ願書受付中　怜
神話から溢れたしあわせの水位　斎藤　秀雄
こうふくをすべる石鹸割れて石　斎藤　秀雄
幸せになあれキュッと結んだところから　水たまり
佳　しあわせはビックリマンチョコのシール　吉田くみこ
佳　幸せにミトコンドリア踊りだす　白瀬　白洞
佳　雨の日に長靴はいて傘さして　関口　行雲
佳　大丸で買う幸せの計り売り　雨森　茂喜
佳　ルームミラーに嘘っぽい幸貼り付ける　水たまり
人　幸せの缶詰め鯖缶より重い　細田　陽三
地　殺されず殺しもせずに古希となる　居谷真理子
天　幸せ過ぎて出るに出られぬ毬の中　村田　博

髙瀬　霜石　選

誰だろうハートマークの考案者　龍　せ　ん
幸せが郵便受けからやってきた　荘子　隆
ちょこちょこと皆足りている衣食住　竹中　正幸
幸せにしてやるからって言ったよね　ナフタリン
幸せはこんなもんでしょ大欠伸　な　お
ミシン目のとおり切り抜けぬ幸せ　雨　径
幸せになったは良いが肥満体　大田かつら
幸せを２５日にセットする　こまっちょ
幸せになるために目をつぶってる　絹田　あさ
幸せのドアは自分の手で開ける　沢田　正司
幸せでよく風邪なんか引いている　丘　きらら
幸せのカタログ置いておきました　丘　きらら
幸せがあふれています要注意　青木　展子
物干しに家族が揺れる青い空　多川　義一
しあわせはビックリマンチョコのシール　吉田くみこ
どまんなか過ぎたあたりで気づく幸　田中　章子
幸せがたくさん見える素直な目　西山　竹里
マニュアルの通り進むのやめました　ナッツ池本
手から手へ行ったり来たり飯茶碗　十　六　夜
朗報をポケットに入れ持ち歩く　白鳥　象堂
二重あご一番よかった頃です　近藤　幸恵
幸せを籠においてきた社長　松島　勇象
幸せが売っていましたいちきゅっぱー　山口恵美子
印籠を見せて幸せ手に入れる　相葉　俊彦
幸せになったときから花粉症　中村　肇
ねじひとつ外して楽になりました　木原　正雄
幸せは胸ポケットに納めてる　フーマー
罠だっていいの幸せなんだから　田村ひろ子
幸せになりたかったら途中下車　浜野　律
ハッピーの名で繋がれたままの犬　徳重美恵子
負け組が幸せなんてこともある　梶原　弘光
幸せなんだなあピンクになってる　立花　穂香
佳　幸せが泣いて全裸でやって来た　甘　酢
佳　幸せは一筆書きができません　米山明日歌
佳　あたりまえのことあたりまえにできる　ホッと射て
佳　わからないままにしておく裏表　森野　ハナ
佳　青い鳥絶対数が足りません　佐藤ちなみ
人　やっとこさ真っ赤になったリンゴです　雨森　茂喜
地　本日の一時間目は自習です　菊池　文徳
天　幸せの手前チャックがひっかかる　み　か　ん

投句方法　【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック
senryutou.net　（サイト管理　森山文切）

第33回 国民文化祭・おおいた2018（11月12日）

第33回 国民文化祭・おおいた2018「湯けむりたなびく温泉地別府 川柳の祭典」選考結果、事前投句は1,790名、当日参加は396名。大会各賞は下記のとおり。

一般部門・入賞句

文部科学大臣賞

一本のペンからにんげんが香る　和歌山県　たむら　あきこ

国民文化祭実行委員会会長賞

感電死しそうチャンスのど真ん中　山口県　大木　加代子

大分県知事賞

生きていく狼煙を上げる台所　大阪府　中井　佳子

第33回国民文化祭大分県実行委員会、第18回全国障害者芸術・文化祭実行委員会会長賞

復興へ土の香りを確かめる　東京都　上村　脩

大分県教育委員会教育長賞

戦場のシャッターチャンスなどいらぬ　山口県　岡田　薫

別府市長賞

逃げたのか貫いたのか旅の月　佐賀県　真島　久美子

第33回国民文化祭、第18回全国障害者芸術・文化祭別府市実行委員会会長賞

針のない介護の旅はただ無言　宮城県　沼崎　愛子

別府市教育委員会教育長賞

旅はまほろば人間の殻を脱ぐ　愛媛県　永井　松柏

全日本川柳協会理事長賞

斎場の煙わたしは生きている　新潟県　山田　雅子

大分県番傘川柳連合会会長賞

見栄脱ぐと湯船にふわり浮くあぶく　熊本県　黒川　孤遊

二次選者　岡崎　守・田中　新一・雫石　隆子・梅崎　流青・古谷龍太郎

編集後記

★居酒屋の楽書帖に詩人の名　　薫風

★10月28日、番傘川柳本社創立110周年記念川柳大会には全国から485名の川柳人が参加。森中惠美子先生の第5句集『ポケットの水たまり』を戴いた。「ああ母よ今平成の水たまり」をはじめ、惠美子川柳の真髄が凝縮した一冊。文庫本サイズなのでバッグに入れて持ち歩けることも嬉しい。

★戦後の物のない時代に小学校に上がったせいもあって、本に飢えて育った。中学生になって図書館の本を自由に利用できるようになった時の嬉しかったこと。貸出の冊数にも期限にも制限はあった。もう遥かに時効だから告白するが、司書さんの計らいで私は自由に好きなだけ借りて読むことができた。

★三年前の入院をきっかけに蔵書を整理した。文字通り我身を切り崩すような辛さだった。が、しかしその後も読みたい本はどんどん買う。一度しか読まぬ本がまた溜まってゆく。そんな時に福島県白川郡矢祭町の「矢祭もったいない図書館」の存在を知った。「平成19年に開館、もったいない精神による寄贈図書のみで開館。三年以内に発行された新刊図書のみの寄贈受け付け」という。

★雑誌類は駄目だが保存状態の良い絵本は引き取って頂ける。大切にしていた当代一流の日本画家が描いた絵本のシリーズに、新刊本を添えて寄贈させて頂いた。「矢祭もったいない図書館」の電話・ファクスは0247―46―4646

ひとこと

川柳との出会い

今年の三月で三十六年間の教師生活に終止符を打ちました。

先日、国語の授業で俳句の学習をしていた時に「同じ五七五だけど季語を考えなくてもよい川柳というのがあるよ」と子ども達に話すと「知ってるで」と言うので、じゃあ皆で作ってみようかということになりました。

色画用紙を短冊に切って子ども達に配り「何でも良いから思いつくことを五七五で書いてごらん」と言うと、子どもらしく楽しい川柳がたくさんできました。

このことを切っ掛けに、この四月より友人に誘われ、月に二回川柳教室に通うようになりました。また川柳雑誌に投稿をしたり、思い切って句会にも足を運ぶと多くの方の句と出会い、川柳って楽しいなあと思うようになりました。

退職後あくせくせずに五七五

よろしくお願い致します。

（斎藤　隆浩）

★高野山の紅葉が秋空に映える11月10日、平成29、30年度川柳塔碑合祀祭に参列。碑の前で蘭幸主幹が今回合祀される方々のお名前を読み上げられた。いつか私の名もこうして読みあげられ、路郎師とともに点鬼簿に記載される・・・と思った時、厳粛な気持ちになった。（朱夏）

□ある「学習誌」のコラムから拾う。

□「世論は」は「よろん」か、「せろん」なのか。戦前の国語辞典では「世論」は「せろん」。「よろん」は「輿論」でした。戦後制定された当用漢字に「輿」が入らなかったので、結局「世論」になる。NHKでは「よろん」に統一している。

□憲法の施行は「しこう」か「せこう」か。「施行」は本来「しこう」と読むが、法律用語の「執行」と読み方が似ているので、官庁やNHKは「しこう」と読んでいる。

□「出生」は「しゅっしょう」か「しゅっせい」か。戦前は「しゅっしょう」。戦後も「出生届・出生率」など伝統的な読み方「しゅっしょう」と使っているが、「生活・生産・発生」などは「せい」と読む方が多いため「しゅっせい」と読む傾向が強くなっている。と解いていた。（勝弘）

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにお願いいたします。

作品募集

2月号発表（12月15日締切）

川柳塔（8句）小島蘭幸選
水煙抄（8句）西出楓楽選
愛染帖（2句）新家完司選
檸檬抄（2句）「振る」川端一歩 山岡冨美子 共選
インスピレーション・ナビ（2句）大西泰世選
「人情」古手川光選
「化ける」倉益一瑤選
一路集（2句）
初歩教室「小さい」（3句）髙瀬霜石担当

本社12月句会

とき 12月7日(金) 13時開場・13時40分締切
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ケ辻町19－12 電06・6772・1441
おはなし「2100年」村上直樹氏
席題「　」原田すみ子選
兼題「破る」今井万紗子選
「らしい」佐々木満作選
「向く」三宅保州選
「若手」木本朱夏選
「永遠」小島蘭幸選
（各題2句以内）
会費 1000円 **投句料** 500円（切手可）

3月号
檸檬抄「あれこれ」
一路集「モットー」「調べる」
初歩教室「守る」

本社1月句会

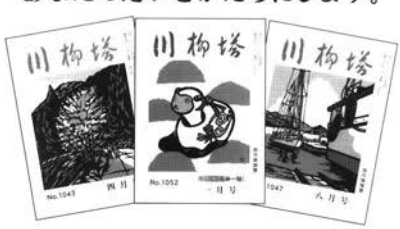
7日(月) 午後1時から
兼題「和やか」「ステップ」「仕事」「渡る」「輝く」

川柳塔WEB句会のご案内

課題「無い」樋口由紀子 髙瀬霜石 共選
締切 12月20日 **発表** 12月25日頃
投句料 無料
インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

定価 八百円（送料88円）
半年分 五千円（送料共）
一年分 九千八百円（同）
二〇一八年（平成三十年）十二月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一－一四－一七 花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話（〇六）六七七九－三四九〇番
振替 〇〇九八〇－四－二九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート
〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL (06) 4800－3018
FAX (06) 4800－3028
E-mail：bikenart@ea.mbn.or.jp
※事務所移転につき住所・電話番号が変わりました。

平成三十年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇九九号　川柳塔　十二月号
定価　八百円（送料　八十八円）

川柳募集

「ごま」にまつわる
あなたならではの
一句を募集します。

・兼題　「ごま」川柳塔社主幹 小島蘭幸　選
・応募要領　郵便ハガキに2句、郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記してください。入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。
・発表　本紙4月号にて発表いたします。
・締切り　2019年1月31日(当日消印有効)
・投句先　〒543-0052　大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201号室　川柳塔社　ゴマ川柳係　宛

オニザキの
つきごま
手作りの味わいに
こだわり続けて
六十一年

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL 0120-30-5050

心を尽くし　思いを尽くし　知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団　湯川胃腸病院

消化器科　放射線科　脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2　TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

雑誌 05703－12